目録

第一章　序論 3
1.1 研究動機と目的 3
1.2 先行研究 4
1.2.1 寺村（1984） 4
1.2.2 野田（1995） 5
1.2.3 安達（1998） 6
1.3 研究方法 7
第二章　時間軸に置かれた「モノ」「コト」 8
2.0　はじめに 8
2.1　「-ルコトガアル/アッタ」「-タコトガアル/アッタ」 8
2.2　「-タモノダ」 10
2.3 「コトガアル」と「－タモノダ」 12
2.4 まとめ 14
2.5 結論 15
第三章 思考活動を表す「モノ」「コト」 16
3.0 はじめに 16
3.1　「コト（ダ）ト思ウ」 16
3.2　「モノ（ダ）ト思ウ」 18
3.3　「コトト思ウ」「モノト思ウ」 19
3.3.1　コトとモノによる介在 19
3.3.2「コトト思ウ」 21
3.3.3　「モノト思ウ」 25
3.4　まとめ 32
3.5　結論 34
第四章　感嘆を表す「モノ」「コト」 36
4.0 はじめに 36
4.1　感嘆を表す「コト」・「コトカ」 37
4.1.1　「コト」 37
4.1.2　「コトカ」 39
4.1.3　まとめ 41
4.2　感嘆を表す「－(タ)モノダ」 41
4.2.1 感嘆の「－(タ)モノダ」の統語構造 41
4.3　「コト」「－(タ)モノダ」の言い換えについて 47
第五章　当為をあらわす「モノ」「コト」 50
5.0 はじめに 50
5.1 当為を表す「モノダ」 50

國立政治大學 National Chengchi University

5.1.2　反問を表す「モノカ」.....56
5.2 当為を表す「コトダ」.....58
5.2.1 「コトダ」とコト述語文.....59
5.2.2　規則を表すコトと当為を表す「コトダ」.....63
5.2.3 「コトダ」・「ベキダ」・「ノダ」.....65
5.3 まとめ―「モノダ」と「コトダ」.....68
第六章　願望を表す「モノ」「コト」.....70
6.0 はじめに.....70
6.1 願望を表す「モノ」.....70
6.1.1　「タイ（ほしい）モノダ、」.....70
6.1.2　「～ナイモノ(ダロウ)カ」.....74
6.1.3　「デキルモノナラ」.....78
6.2 「デキルコトナラ 」と「デキルモノナラ」.....82
6.3 結論.....85
第七章 結論.....87
7.1　意味が類似する「モノ」「コト」.....87
7.1.1 時間軸に置かれた「モノ」「コト」.....87
7.1.2 思考活動を表す「モノ」「コト」.....88
7.1.3 感嘆を表す「モノ」「コト」.....90
7.1.4 当為を表す「モノ」「コト」.....92
7.1.5 願望を表す「モノ」「コト」.....93
7.2　「モノ」「コト」の性質.....94
7.2.2 「モノ」「コト」の性質.....96
7.3　今後の課題.....96
付録.....98

國立政治大學 National Chengchi University

第一章　序論

1.1 研究動機と目的

「コト」「モノ」は、次のように、元々は違う指示対象を持つ名詞である。

(1) 地球温暖化を自分自身のことして考えてみる。　（毎日新聞 2000.1.26）
(2) 介護用品のカタログに、良さそうなものがいろいろあります。（毎日新聞 2000.3.19）

(1)では、「コト」が事柄を、(2) では、「モノ」が物体を表していると言ってもいいだろう。だが、次のような例もある。

(3) 明確な意識なくして、人間が行動に移るなどということは、本来、決してあってはならぬものなのである。　（『太郎物語』）
(4) そうした現実に根ざした強いものであると指摘することこそが、氏の作品の美しさに、さらに輝きを加えるものである。　（『堀辰雄　人と作品』）

(3)(4)では、「モノ」の指示対象は、共に「コト」となっている。もし「コト」「モノ」は単純な「事柄」「物体」の意味を表すのなら、(3)(4)は「こうした事柄はこうした物体である」という構造になる。しかし、これではあまり意味が通じない。また、(3)の文末の「モノ」は「コト」に言い換えても差し支えがないようだが、(4)は「コト」に置き換えると、違和感が生じる。

さらに、(5)-(7)のように、「モノ」「コト」が参与する文法形式に、類似する意味を表す「モノ」「こと」の形式が同時に存在することが観察される。(5)（6）では、下線を引いているのは、元の文型である。

(5) a. （我ながら、）この暗い中をよくここまで走って来た{ものだ /？こと。}（『悲歌』）
　b. 同居してはや３年、月日のたつのは早い{ものだ /こと。}（毎日新聞 2000.7.19）
(6) 神学校で上席を占め、{できることなら / できるものなら} 一番になろうというのが、ぼくの堅い決意だったのだ。それをきみはくそ勉強だといった。ぼくについてはたしかにそのとおりだ。しかし、それがぼく一流の理想だったのだ。ぼくはそれにまさるものを知らなかったのだ。（『車輪の下』）
(7) a. 水夫は、必ずジャックナイフをからだから離さないものだ。（十五少年）
　b. 読んだら、すぐ焼け、なんて、女は身勝手だと思う。すぐ焼かねばならぬような内容なら、紙に書いたりしないことだ。　（『太郎物語』）

（5）感嘆、（6）は願望、（7）は当為を表す例で、中には（5 b）（6）のように、条件が整えて言いかえが可能なものもあるが、(5 a)（7）のように、言いかえられない例もある。

だが、まったく同じ意味を表すのなら、二つの形式を必要としないと思われる。そのため、同じ感嘆、願望、当為を表しても、両形式にきっと違うところがあるため、両方とも存在し、言いかえが不可能になると考えられる。

そして、両形式の違いは「モノ」「コト」の性質によるものだと仮設し、以下は「モノ」「コト」の性質を見出すことを目的として、類似する意味を表す「モノ」「コト」の文法形式を分析し、そこから「モノ」「コト」の性質を見出すことを試みる。

1.2 先行研究

ここで、まず「コト」「モノ」を含む形式を同時に取り上げて分析する先行研究をあげる。

1.2.1 寺村（1984）

寺村（1984）では、「コトダ」と「モノダ」を分析している。

「コトダ」については、ムードの助動詞的な意味・用法として、忠告・勧告を表すとしている。そして、忠告・勧告を表すとき、連体修飾節の述語動詞は、基本形に限られていると述べ、否定では「～コトデハナイ」を使わず、「コトハナイ」の形を取ると指摘している。

「モノダ」については、「P は Q モノダ」という文型を基本にして考察している。P と Q との関係によって、モノダ文の意味を下の例文のように、順に P への性状規定、当為・理想の姿の主張、解説、追想、感慨に分類している。

(8) 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感ずるものだ。
(9) 男の子は泣かないものだ。
(10) 何年も前から、「もっと魚を食べよう」というキャンペーンがソ連全土で行われた。畜産の伸びなやみを魚でカバーしようというものだった。
(11) 彼は陶器に非常な関心を持っていて、よく熱心な話をしたものだ。
(12) 毎日掃除していてもよくごみがたまるもんだねえ。[1]

性状規定と当為・理想の姿の主張の用法は「P は Q モノダ」の構文構造をしっかり保っているが、解説、追想、感慨の用法では、P に当たるものが文中に見当たらない。(下の例文では、波線が P の位置に当たるものである。)そして、

[1] 例文(1)-(6)は、寺村（1984）から取り入れたものである。

当為・理想の姿の主張、解説、追想、感慨を表す「モノダ」の意味用法をムードの助動詞化したものとしている。

以上、寺村（1984）では、「コトダ」「モノダ」のモダリティ（ムード）的意味を示し、その統語構造を指摘した。だが、「コトダ」の忠告・勧告と、「モノダ」の当為・理想の姿の主張は類似しているが、両者の置き換えは可能なのか、意味の違いまでは触れていなかった。

それについて、野田（1995）では次のように分析している。

1.2.2 野田（1995）

野田（1995）は、当為を表す「モノダ」「コトダ」を考察し、次のように述べている。

まず、統語構造において、野田（1995）はタ形になれるかどうかについて考察した。結果として、当為を表す「モノダ」「コトダ」は、いずれもタ形にすることができないとわかった。

「モノダ」については、野田（1995）は「xハyモノダ」を基本な構文構造とし、本来的性質を表す用法と、当為を表す用法は、xには総称的な名詞を取り、特定の個体を取りにくい点で共通すると指摘している。

そして、モノダが聞き手に行為の実行を促すプロセスとして、次の三段論法を挙げている。

「祭りの前の晩は早く家にはいるもんだ」を例に

(13) a．祭りの前の晩は早く家にはいるものだ。……大前提
　　b．今は祭りの前の晩だ。……小前提
　　c．今、聞き手は早く家にはいることが望ましい。……結論

（13）のように、「xハyモノダ」で表されるのは、一般的な通念である。ただし、それはあくまでも話し手が一般的な通念だと考えているということであり、実際に一般的な通念であるとは限らない。そして、一般的な通念を大前提として提示することによって、間接的に、当該の場面で聞き手がyという行為を実行することを促すのである。

次に、「コトダ」について、野田（1995）は「聞き手が悪い状況に留まらないため、陥らないためには、その行為の実行が必要、重要だという話し手の判断を示す場合である」と述べている。そのため、「モノダ」と違って、一般的な通念に従った判断でなくても、話し手が必要だ、重要だと判断すれば用いることができる。

さらに、使用場面において、「コトダ」は親しい間柄の話し言葉では用いられにくく、比較的高い年齢層の人が用いるといった特徴を持つ。そして、否定

の場合、コトダと違って、親しい間柄の話し言葉でも用いられやすいとも指摘している。

(14) そんなにハッキリしてるんなら私に相談することないじゃない。（野田 1995）

以上、野田（1995）は「コトダ」「モノダ」の意味の違いを分析し、統語構造では、両方ともタ形に変えることができないとわかった。

では、ひとつの文に「コトダ」「モノダ」両形式共に用いられる例文はあるのか、あったとしたら、意味的に違いがあるのだろうか。これについては、本稿で検討したい。

また、同じ当為を表す形式だが、「モノダ」は一般的通念に基づいたものだが、「コトダ」は話し手個人的な判断になる。このような違いは何故生まれたのか、本稿では「モノ」「コト」の元の性質に影響されたのだと仮設し、その違いの原因を分析したい。

1.2.3 安達（1998）

安達（1998）では、認識的モダリティやある種の思考動詞に、その直前に形式名詞「コト」「モノ」が現れることを「介在」現象と名づけ、「コト」「モノ」の介在は、話し手のその事態に対する認識の仕方を反映していると仮設している。

そして、思考動詞の中で、「思ウ」を最も代表的な動詞とし、主に「コトト思ウ」「モノト思ウ」を中心に考察し、次の結論を述べている。

(15) a. 真偽に対して判断を決められない事態を話し手は「コト」として把握することになる。

b.「モノ」の介在には、思考動詞の中でも根拠に基づいた論理的な推論を表すか、あるいは文脈的にそのような条件が保障されているということが関係する。

また、「コト」の介在に聞き手の心理状態への言及を伴う現象が観察されるとも述べている。

一方、文型辞典における「モノト思ウ」の説明を見ると、次のようなものになっている。

(16)「モノト思ウ」: 話し手が確信していることを表す。

（15 b）は「モノ」の介在を根拠を持つ論理的な推論を表すとしているが、（16）では、「モノト思ウ」について、根拠の有無を言及していないが、話し

國立政治大學 National Chengchi University

手は叙述内容が真実だという確信を持つとしている。

このような説明の食い違いはどのように生じたのか、どちらがより明確に「モノト思ウ」の意味を表しているのか、本稿で分析したい。

1.3 研究方法

青空文庫、毎日新聞、新潮文庫のデータベースから、「モノ」「コト」の例文を収集してまとめた結果、以下五組の「モノ」「コト」の文型による類義表現が観察される。
経験：「ールコトガアッタ」・「ータモノダ」
思考活動：「コトト思ウ」・「モノト思ウ」
感嘆：「コト」「ー(タ)モノダ」
当為：「コトダ」「モノダ」
願望：「デキルコトナラ」「デキルモノナラ」

そして、先行研究が示すように、それぞれの文法形式に対する意味分析及び統語構造の分析は行われているが、類似する両形式における言い換えの可能性については、あまり触れていない。

本稿では類似する文法形式が二つも存在することは、表す意味に違いがあるためとし、その違いは「モノ」「コト」の影響を受けて生まれたものと仮設する。

そして、これまでの「モノ」「コト」における類義表現の研究成果を踏まえ、「モノ」「コト」の性質に結びつけることを試みる。さらに、類義する両形式に、言いかえが可能かどうかテストを行い、言い換えの条件を見つけ、その条件は「モノ」「コト」の性質に関わっているのかを確認する。

第二章　経験を表す「モノ」「コト」

2.0　はじめに

日本語において、「コト」「モノ」が参与し、経験の描写に関わる文法形式に「-ルコトガアル/アッタ」「-タコトガアル/アッタ」「-タモノダ」がある。そして、文型の数から伺えるように、「コト」において文型はテンス・アスペクトの変化が多く、時間軸と緊密にかかわっている。それに対して、「モノ」は「-タモノダ」のみである。例文を一通り挙げると、次のようになる。

(1) １回の漁で３０枚以上もビニール袋を引き揚げることがあり、持ち帰って処理するのが大変な労力だ。（毎日新聞 2000.1.23）
(2) 岩肌はおおむねなめらかで凹凸は少なかったが、それでもときどき張り出した岩のかどに思い切り頭をぶっつけることがあった。（世界の終り）
(3) 宮村さんと一緒に山へ行ったことがある。（『孤高の人』）
(4) 埼玉県東松山市の丸木美術館を、寒い冬の日に一人で訪れて、じっくり鑑賞したことがあった。（毎日新聞 2000.1.18）
(5) 私は空想物語が大好きです。鉄腕アトム、宇宙家族の物語。目を輝かせて熱中したものです。（毎日新聞 2000.1.7）

(1) は可能性の提示、(2) は偶発的なことの叙述、(3) (4) は経験を表し、(5) 回想に用いられる。それぞれ違う意味を表すが、以下その統語構造や意味特性について詳しく述べる。

2.1　「-ルコトガアル/アッタ」「-タコトガアル/アッタ」

「コトガアル」は前節動詞と本動詞「ある」にテンス・アスペクトの活用があるので、タ形とル形の組み合わせで、「-ルコトガアル」「-ルコトガアッタ」「-タコトガアル」「-タコトガアッタ」と、四つの文型に分けられる。

「-ルコトガアル」は可能性の提示であり、実際に起こっていない事柄でも用いられる超時的な存在のため、実際に起きたことを述べ、過去に位置する「-タコトガアル」と言い換えると、意味が変わるので、両者の言い換えはできない。

(1) １回の漁で３０枚以上もビニール袋を引き揚げることがある。
(1’) １回の漁で３０枚以上もビニール袋を引き揚げたことがある。

(1) は「-ルコトガアル」によって可能性を提示しているが、(1’) で「ー

るコトガアッタ」に書き換えると、文は通じるが、意味は可能性の提示から、経験の叙述になっている。したがって、「-ルコトガアル」と「-タコトガアル」の言い換えはできない。

それに対して、「-タコトガアル」と「-ルコトガアッタ」の言い換えはできるようである。

(2) 岩肌はおおむねなめらかで凹凸は少なかったが、それでもときどき張り出した岩のかどに思い切り頭をぶっつけることがあった。
(2’) 岩肌はおおむねなめらかで凹凸は少なかったが、それでもときどき張り出した岩のかどに思い切り頭をぶっつけたことがある。
(3) 宮村さんと一緒に山へ行ったことがある。
(3’) 宮村さんと一緒に山へ行っくことがあった。

「-ルコトガアッタ」は文節の述語のル形によって、事柄の内容を特定し、本動詞「ある」のタ形によって過去のテンスを示し、「-ルコトガアッタ」全体で事柄は過去に起きたことを表す。

それに対して、「-タコトガアル」は文節の述語のタ形によって、パーフェクトのアスペクトを表し、本動詞「ある」の意味をもって事柄の存在を表し、「-タコトガアル」で経験を表す。

両者は過去に起きたことを表すところに大差はないが、(2”) (3”)から両者の違いが伺える。

(2”) ？岩肌はおおむねなめらかで凹凸は少なかったが、それでもときどき張り出した岩のかどに、一回思い切り頭をぶっつけることがあった。
(3”) 一回、宮村さんと一緒に山へ行ったことがある。

「一回」という回数を表す言葉を(2”)(3”)につけ加えると、(2”)に違和感が生じる。それは、「ータコトガアル」は主に一回限りの経験を表すのに対して、「ールコトガアッタ」は多発の経験を表すためである。

そして、「ータコトガアル」は一回限りの経験を表すが、次のように、一見多発の経験に見られる例もある。

(6) 先月５歳になった二女は、公立幼稚園が定員オーバーで入園できず、来春を楽しみに待っている。母子でゆっくり過ごせる最後の貴重な１年をどのようにしようかと考えた末、これまで行ったことがある親子教室とはひと味違う所を見つけた。 (毎日新聞 2000.8.15)

(6) では「これまで」という言葉がわかるように、親子教室に行ったのは

一回限りのことではなく、何回もあったか、ある期間において通い続けてきたはずである。にもかかわらず、「-タコトガアル」が用いられるのは、一回の事柄にみなされているからである。「これまで」という語彙から事柄の持続だけでなく、その文を境に、述べた事柄の終わりとそこから違う事柄の展開も暗示される。そのため、分かれ目まで事柄がずっと続けられ、そこから違う事柄が展開されていくとしたら、分かれ目を中心に、二つ異質の事柄は二分され、これまで続けてきた事柄はひとつまとまった一回性のものとみなされる可能性がある。そのため、(6) のように持続を持つ事柄も「ータコトガアル」を用いられたのである。

そのほかに、「-タコトガアッタ」は文節と本動詞、両側同時にタ形の変化がある。文節のタ形はパーフェクトを、本動詞のタ形は過去のテンスを表す。つまり、「-タコトガアッタ」は「-ルコトガアッタ」「-タコトガアル」両方のタ形の特徴をもっている。

さらにいうと、「-タコトガアル」は現在の時点に立って、経験を述べるが、その経験は何らかの形で発話時の現在と関わっている。それに対して、「-タコトガアッタ」は経験をすでに過去のものとして扱うものであり、発話時との繋がりはより薄くなる。

2.2 「-タモノダ」

次に、「-タモノダ」について考察を行うが、(7) のような例は感嘆を表し、経験を表すモノではないので、感嘆のモノ・コトで論じることにする。

(7) 「政治家に徳目を求めるのは、八百屋で魚をくれというに等しい」と言った元閣僚がいた。それが、たとえ現実だとしても、自らを見下す言葉をよく言えたものだと思う。 (毎日新聞 2000.3.17)

文型の形態からわかるように、「コトガアル」と比べて、制限が多く、文法化の度合いが高いとわかる。また文型辞典によると、「ータモノダ」は、過去において、習慣的に行われていたことを感慨をこめて回想するのに用いると説明されている。しかし、(8) は過去のことに対する回想を述べているにもかかわらず、「ータモノダ」を使うと、違和感が生じてしまう。

(8) *石器時代、人間は石器を使って狩猟・採集生活を営んでいたものだ。

違和感が生じる理由は、話し手が関与していないからである。関与とは、「ータモノダ」で表される回想は、話し手が回想内容を直に見て、自分の目で経験することが必要である。すなわち、「ータモノダ」を用いるには、話し手が行為者・観察者であることが必要である。

(8) は、石器時代の人類の生活実態について述べている。それは今の時代

の人間が観察したり、経験するのが難しいほど時間の隔たりが存在する。そのため、話し手が「ータモノダ」を使うと、違和感が生じるのである。

「ータモノダ」を使える例に、典型的な例として（9）のような文がある。（9）では、話し手が自分の子供のころの思い出を回想している。（10）では、話し手は述語「言う」の動作主ではないが、その動作内容は新聞やテレビなどを通して見たため、話し手の観察経験に組み込まれたのである。そのため、話し手は動作主ではないが、観察した内容を回想し、「ータモノダ」を用い得たのである。

(9) 麦の収穫期には、夕方からホタルが乱舞し、追いかけたものだ。

（毎日新聞　2000.7.4）

(10)竹下氏は首相時代、政策の処理について「司々にまかせてある」とよく言ったものだ。官僚が打ち出す政策を、得意の調整力を駆使して実現していくという手法である。しかし、官僚依存は、官僚主導政治を助長させる結果ともなった。（毎日新聞 2000.6.20）

また、（9）を（9’）との比較からわかるように、「タ形」はただ過去のことを述べ立てるのに対して、「-タモノダ」を用いると、過去を振り返って過去を懐かしむ感情が帯びるようになる。これは、感嘆の「ータモノダ」に繋がっていく。ただ、回想の「-タモノダ」はすべて感嘆の意味を帯びるのではない。（9）のように、話し手が行為者の場合、感情を帯びるニュアンスが強くなり、（10）のように、話し手が傍らの観察者の場合、感情を帯びるニュアンスが弱くなる。

(9’)　麦の収穫期には、夕方からホタルが乱舞し、追いかけた。

一方、「-ルコトガアッタ」と「-タコトガアル」で表される経験は、（11）（12）が示したように、話し手がその場で見なかった第三者の経験でも用いられる。

(11)この年四月、彼は北海道から単身上京して来た。自然主義の風潮に刺激され、志は小説にあったが、六月ごろから爆発的に歌興が湧いて、一夜のうちに百数十首も多作{することがあった。/ ?したものである。}（一握の砂）

(12)リクルート疑惑追及の声が燎原の火のように広がりつつあった１９８９年２月、政治家らへのリ社の未公開株譲渡について竹下氏が、株価が下がったら買い戻すという価格保証付きであれば贈収賄が成立するが、それがなければ成立しない、と発言｛したことがある。/ したものである。｝

（毎日新聞 2000.6.20）

（11）は石川啄木の歌集『一握の砂・悲しき玩具』に山本健吉が書いた評論の一部である。話し手は歌集の作者がなくなった後生まれた人間なので、多作の様子を直に見たことは不可能である。そのため、「ータモノダ」は用いられ

ないが、「-ルコトガアッタ」は使える。それに対して、(12) は話し手がマスメディアを通して発言現場を見たことが可能なため、「ータモノダ」に言い換えられることが可能である。

そのほかに、回想の「ータモノダ」は (13) (14) のような特殊な場合にも用いられる。ここからも、回想と感嘆の「ータモノダ」の繋がりが伺える。

(13)「冗談じゃない。ことは、国民の意思をどう反映させるか。そのための選挙制度の問題でしょうがっ！」。私はラジオ相手に怒りまくったものです。
(毎日新聞 2000.1.19)

(14)私の子育て時代は、その日の糧、明日の生計にも事欠いた時代だった。3人目の子供が生まれた時、「ああ、これで人口の減少ラインを越えられた。社会にお返しできる子供が授かった」と感謝し、喜んだものである。
(毎日新聞 2000.2.6)

典型的な回想の「ータモノダ」は、頻繁に行われた習慣的な経験を述べることが多い。しかし、(13) (14) は事柄に引き起こされたその場の感情の現れなので、一回限りの事柄である。一回限りであることは、(13’) で頻度副詞「よく」を付け加えると、違和感が生じることからもわかる。(14) は時間が「3人目の子供が生まれた時」という時間副詞で、一点に指定されているので、これは一回のことだと分かる。

(13’) *「冗談じゃない。ことは、国民の意思をどう反映させるか。そのための選挙制度の問題でしょうがっ！」。私はよくラジオ相手に怒りまくったものです。

典型的な回想の「ータモノダ」においては、(9) のように、話し手は習慣的に行われた過去の経験を振り返って、懐かしむ気持ちを帯びることが多い。それに対して、(13) (14) は一回限りの経験を述べている。そして、文脈を追って分かるように、その経験は先行する事象に対する一回限りの感情の表れなので、典型的な回想の「-タモノダ」より「目の前」の性質が強い。

回想は過去の経験を思い浮かべるのに対して、感嘆は目の前のことで引き起こす感動を表すため、このような「目の前」性の強まりは、感嘆の意味への繋がりと考えられる。

2.3 「-ルコトガアル/アッタ」「-タコトガアル/アッタ」と「ータモノダ」

以上の分析から、「ータモノダ」は過去において習慣的に行われていたことを話し手が回想するときに用いられるため、「ールコトガアル」のように、未

発生の事柄に対する可能性の提示を表す文型とは、言い換えられないとわかった。では、同じく過去における多発的なことを表す「-ルコトガアッタ」と「ータモノダ」の言い換えはどうだろうか。

次は「-ルコトガアッタ」と「ータモノダ」の言い換えを試みながら、その性質の異なりをもう一度確認しておく。

まず、例文から入りたい。下線を引いているのは、元の文脈で使われる文型である。

(15)僕は子供のときケンポナシの実が落ちるのを待ちかねて、よく小石を梢に向けて抛り投げたりして親父に叱られていた。小石は飛んで行って風呂場の屋根に落ち{<u>ることがあった</u> / ？たものだ}。お袋はそれをまだ覚えているらしい。 (『黒い雨』)

(16)私の妻もとても静かな眠り方をしたので、ときどきベッドの中で死んでいるのではないかと心配{し<u>たものだ</u> / することがあった}。 (世界の終り)

（15）は元は「-ルコトガアッタ」の例で、多発的な事柄なので、習慣的な経験を回想する「ータモノダ」との言い換えは可能だと予測されるが、「ータモノダ」に言い換えると、違和感が生じる。それは（15）は習慣的に多発される事柄ではなく、偶発的な事柄であることにも関係しているが、主な原因は、多発性が保障されなくなるからである。「-ルコトガアッタ」の場合、多発性は文節のル形によって表されるが、「ータモノダ」の場合、（15）のように、時間副詞を入れるほうが多発的であることが明確になり、文が自然になるのである。

(15’) 小石は飛んで行って{よく / ときどき}風呂場の屋根に落ち<u>たものだ</u>。

また、偶発的な事柄も「ータモノダ」を用いられることは、(16)の例からわかる。（16）は「ときどき」という時間副詞があり、偶発的な事柄と思われるが、「ータモノダ」を用いられる。それは、偶発的な事柄が繰り返して起きるうちに、持続性が見出され、習慣的な事柄とみなされるからである。この場合、「-ルコトガアッタ」に置き換えることも可能である。

ただ、（16）は「ータモノダ」と「-ルコトガアッタ」を使うことで、ニュアンスが違ってくる。「ータモノダ」を使う場合、話し手は過去に振り返って、その時点に戻ったかのように、懐かしむなどという感情が伴う。それに対して、「-ルコトガアッタ」を使う場合、話し手は特に昔の時間に振り返ったりせず、現在の時間に立って、昔起きたことを述べるだけである。

そのほかに、 (17)のように、「ータコトガアッタ」「-タモノダ」両方用いられる例もある。

(17)私は声をあげて泣きたかったが、泣くわけにはいかなかった。涙を流すには私はもう年をとりすぎていたし、あまりに多くのことを経験しすぎてい

た。世界には涙を流すことのできない哀しみというのが存在するのだ。それは誰に向っても説明することができないし、たとえ説明できたとしても、誰にも理解してもらうことのできない種類のものなのだ。(略)

もっと若い頃、私はそんな哀しみをなんとか言葉に変えてみようと試み{たことがあった / たものだ}。しかしどれだけ言葉を尽してみても、それを誰かに伝えることはできないし、自分自身にさえ伝えることはできないのだと思って、私はそうすることをあきらめた。 (世界の終り)

「ータコトガアッタ」「-タモノダ」両方用いられるが、「ータコトガアッタ」の場合、話し手は昔の経験を述べるが、感情があまり移入していない。それに対して、「-タモノダ」は話し手の経験を表すほか、話し手が過去を振り返って懐かしむなど感情の移入が入っている。

そのほかに、(6) からわかるように、「-タコトガアル」は連体修飾節を作れるが、「-タモノダ」は連体修飾節を作ることができず、必ず文末に位置する。これは、「-タモノダ」はモダリティを表す文法形式として確立することを示すように思われる。

(6) 先月５歳になった二女は、公立幼稚園が定員オーバーで入園できず、来春を楽しみに待っている。母子でゆっくり過ごせる最後の貴重な１年をどのようにしようかと考えた末、これまで行っ{たことがある / *たものである}親子教室とはひと味違う所を見つけた。 (毎日新聞 2000.8.15)

2.4 まとめ

以上、「-ルコトガアル/アッタ」「-タコトガアル/アッタ」「ータモノダ」について見てきた。

「コトガアル」は本動詞「アル」と前接の文節において、テンス・アスペクトの変化が多く、「-ルコトガアル」「-ルコトガアッタ」「-タコトガアル」「-タコトガアッタ」と四つの文型に分けられる。四つの文型の意味は次のようにまとめられる。

① 「-ルコトガアル」: 可能性の提示。実際に起きていないことの叙述に使う。
② 「-ルコトガアッタ」: 過去の経験の叙述。多発の事柄にしか用いられない。
③ 「-タコトガアル」: 過去の経験の叙述。一回、あるいは一回とみなされる事柄に用いる。事柄は発話時点と関係している。
④ 「-タコトガアッタ」: 過去の経験の叙述。一回、あるいは一回とみなされる事柄に用いる。事柄は発話時点と関係が薄い。

コトの前に来る文節は述語のタ形がパーフェクトのアスペクトを示す。だが、

述語のル形はアスペクトではなく、事柄の内容を指定する機能を果たす。本動詞「アル」はタ形で過去のテンスを表し、ル形で現在のテンスを表す。

「コトガアル」において、テンス・アスペクトの変化が多く、形態の拘束も少なく、文型としてあまり定着されていないため、コトは主にもとの形式名詞としての働きを果たす。

また、「ータモノダ」は回想を表すが、話し手が行為者・観察者・感情主であることが必要である。話し手が行為者の場合、「ータモノダ」は過去を振り返って懐かしむニュアンスが強くなる。それに対して、話し手が観察者の場合、懐かしむニュアンスが弱くなる。また、話し手が感情主の場合、一回限りの経験の回想にも用いられるようになる。

2.5 結論

以上の分析から、「コトガアル」におけるテンス・アスペクトの変化によって生まれる「-ルコトガアル/アッタ」「-タコトガアル/アッタ」という形式から、コトが現在・過去・超時と、時間と緊密に関わっていることを示している。そのため、「コトガアル」におけるテンス・アスペクトの変化の多さは、コトに含まれる経過性を反映しているとも考えられる。

経過は時間が過ぎること、あるいは段階・過程の移動を指す。事柄を指す実質名詞の「事」に、そのような時間や事件の経過を含む性質を持っていると思われる。そのため、形式名詞の「コト」に、実質名詞の「事」の影響が残されるように考えられる。

一方、「ータモノダ」はある程度時間の隔たりがないと、用いることができない。回想の内容は感情の回想を除いては、習慣的な経験になっている。

「コトガアル」が扱う事柄は過去・現在・超時など、多様なテンス・アスペクトの状態を持つ。そのため、「コト」は動的な存在であることが分かる。それに対して、「ータモノダ」は話し手が行為者・観察者・感情主の形で事柄に関与し、時間の隔たりを持つ習慣的な経験を回想するのに用いられる。すなわち、「モノ」は静的な存在を扱うのである。

これは文法化の進み具合によるとも考えられるが、以下ほかの「モノ」「コト」から発展した文法形式からも、このような「コト」「モノ」の性質の違いが伺える。

第三章 思考活動を表す「モノ」「コト」

3.0 はじめに

ここで、「モノト思ウ」「コトト思ウ」を中心に考察したい。文型辞典では、「モノト思ウ」を「話し手が確信していることを表す」と、「コトト思ウ」を「節について、聞き手の状況を同情やいたわりの気持ちを込めて推測する気持ちを表す」と説明している。

安達(1998)では、思考動詞の前に「コト」「モノ」が現れることを介在と名づけて、「コト」の介在を「推測」、「モノ」の介在を「論理的推論」を表すと述べている。

安達(1998)における「モノ」の介在についての結論と文型辞典における「モノト思ウ」についての説明が食い違いが現れている。また、「コト」と「モノ」の介在は、共通する動詞に「思ウ」があるため、対象を「モノト思ウ」「コトト思ウ」に絞り、安達(1998)と文型辞典の食い違いを分析すると同時に、「モノト思ウ」「コトト思ウ」の違いは「モノ」「コト」の性質に繋がることを仮設して考察を行う。

そのほかに、「モノト思ウ」「コトト思ウ」に似る「モノダト思ウ」「コトダト思ウ」も存在する。そこで、以下はまず「モノト思ウ」と「モノダト思ウ」、「コトト思ウ」と「コトダト思ウ」の違いを分析し、さらに「モノト思ウ」「コトト思ウ」の意味を考察したい。

3.1 「コト（ダ）ト思ウ」

「コトト思ウ」は構造上「コトダト思ウ」と似て、一見「ダ」を省略したものとも考えられるが、実際両者には統語的・意味的な側面で、違いが伺える。次の(1)—(4)の例文を見てみよう。例文の下線は筆者によるものである。……は「コト」の連体修飾節と連体修飾句に当たり、＿＿は本節の考察対象の「コト（ダ）ト思ウ」にあたり、＝＝＝は「コト」の指示対象に当たる。

(1) 景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力していることと思う。（毎日新聞　2000.4.6）

(2) いくら原子力エネルギーや環境に優しい燃料を使用して発電しても、消費者が環境に配慮し、使用エネルギーの削減に取り組まなければ、いま以上に環境を保全していくことは難しくなってくることと思う。（毎日新聞 2000.11.12）

(3) それが本当に問題のないことなのか、慎重に考えたいというのは当然のことだと思う。（毎日新聞 2000.9.9）

(4) 公園のごみ回収もしているが、利用者へ要望が二つある。一つは、燃えるごみ、瓶や缶などを分別して、ごみ箱やかごへ出してほしいこと。(略)
もう一つは、ごみ袋の「口」のところを縛って出してほしいこと。(略)
ごみの分別と袋の「口」を縛る作業は、公園に限らず、ごみを出すときのすべてに言えることだと思う。ぜひ、協力してほしい。

(毎日新聞 2000.4.14)

(1)(2)は「コトト思ウ」の例で、(3)(4)は「コトダト思ウ」の例であるが、両者に一番顕著な違いは指示対象の有無にある。(3)ではコトダを述語に、「慎重に考えたいというの」をコトの指示対象に取り、文全体がひとつの題述文になっている。(4)は指示対象が文中に位置しないが、先行する文の内容は如何なることを意味しているか説明しているため、前の文脈が指示対象となる。

そして、(3')(4')が示したように、「ト思ウ」がなくても文が成立するので、「コトダ」と「ト思ウ」の繋がりはあまり緊密ではないことが分かる。

(3') それが本当に問題のないことなのか、慎重に考えたいというのは当然のことだ。

(4') ごみの分別と袋の「口」を縛る作業は、公園に限らず、ごみを出すときのすべてに言えることだ。

以上を踏まえて「コトダト思ウ」の統語構造を分析すると、(5)になる。本稿ではこれを「コトダ述語文」と名づける。そして、コトダ述語文は、「ダ」が省略される場合がある。

(5) [指示対象は 連体修飾節+コト(ダ)]+ト思ウ →「コトダ」述語文

一方、(1)(2)は指示対象がなく、(1')(2')が示したように、「コトト思ウ」を取り外しても文は成立するので、「コトト思ウ」は命題の外側に位置することが分かる。

(1') 景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力している。

(2') いくら原子力エネルギーや環境に優しい燃料を使用して発電しても、消費者が環境に配慮し、使用エネルギーの削減に取り組まなければ、いま以上に環境を保全していくことは難しくなってくる。

また、(1')(2')は、論理的事実が変わっていないが、現状を推測する意味がなくなり、命題内容を事実として現状の述べ立てになっている。したがっ

て、「コトト思ウ」は命題の外側に位置して「推測」のモダリティを表す文法化された文法形式であることがわかる。そのため、「コト」と「ト思ウ」の間に、「ダ」を入れることも不可能である。そして、否定を表したい場合は、「だろう」「ようだ」などのモダリティ形式と同じように、命題の述語を否定形に変えて、「コトト思ウ」は否定形にならないのである。

(1”) *景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力していることだと思う。

(2”) *いくら原子力エネルギーや環境に優しい燃料を使用して発電しても、消費者が環境に配慮し、使用エネルギーの削減に取り組まなければ、いま以上に環境を保全していくことは難しくなってくることだと思う。

このような「コトト思ウ」の統語構造を示すと、(6) になる。

(6)　[命題]+コトト思ウ

以上の比較から、「コトダト思ウ」と「コトト思ウ」の文法化の度合いが違うことがわかった。

「コトダト思ウ」はひとつの文法形式としてまだ定着していない。そのため、「ダ」の省略が可能であり、また「ト思ウ」と「コトダ」の繋がりもあまり緊密ではない。

それに対して、「コトト思ウ」は「ダ」の挿入を許さず、命題の外側にモダリティを表す文法形式になっている。したがって、「コトト思ウ」は「コトダト思ウ」より文法化されていることが分かる。

3.2　「モノ（ダ）ト思ウ」

次に、「モノダと思う」と「モノと思う」を比較したい。まず、二つの形式の例文から入る。

(7)　１日本欄「都の『車通行料』は手前勝手だ」の意見があったが、私はそう思わない。（中略）物流を含めた移動の手段は、道路だけではない。通行料を嫌ってほかの交通機関にシフトされれば、環境は良くなり、国民全体の利益にもつながるはずだ。私は、行き過ぎた車社会を見直す、良いお手本を都が示すものと思っている。　(毎日新聞 2000.2.9)

(8)　最も奇怪なことは、ストリックランドがなぜ突然画家になろうなどという決心をしたかだが、これがどうも唐突なのである。むろんなにか生活上の事情に原因があったものと思うが、僕にはいっさいわからない。
(『月と六ペンス』)

(9)　歯磨き剤を、飲むなと言っても、飲んでしまうのが子供だと思うのです。

國立政治大學 National Chengchi University

表にかわいい絵があれば、つけてるなあ、という程度の、刺激のない歯磨き剤で十分です。変な色や、甘みなどは、必要のないものだと思います。（毎日新聞 2000.2.2）

(10) 我慢することや人への思いやりの気持ちなどは、人間関係づくりの中で学び、体得するものだと思います。(毎日新聞 2000.1.22)

次の分析から分かるように、「コト（ダ）ト思ウ」に観察できた特徴は「モノ（ダ）ト思ウ」にも見られる。

（7）（8）は「モノト思ウ」、（9）（10）は「モノダト思ウ」の例文である。(9)（10）はモノダを述語にとる題述文のため、文中にモノの指示対象に当たるものが見られる。そして、「ト思ウ」を省いても文は成立することから、「モノダ」と「ト思ウ」は緊密につながっていないことが分かる。

それに対して、(7)（8）では、モノの指示対象が見当たらない。また、(7’)(8’)が示したように、「モノと思う」は「ダ」の挿入を許さず、ひとつまとまったモダリティ形式になっている。そして、このような「モノト思ウ」は、否定形がなく、否定の意味を表す場合は、命題の述語を否定形にして、「モノト思ウ」というモダリティ形式で否定の命題を括るのである。

(7’) 私は、行き過ぎた車社会を見直す、良いお手本を都が示すもの{φ/*ダ}と思っている。

(8’) むろんなにか生活上の事情に原因があったもの{φ/*ダ}と思うが、僕にはいっさいわからない。

したがって、「モノ（ダ）ト思ウ」においても、「モノダト思ウ」より「モノト思ウ」のほうが、文法化が進んでいることがわかった。

3.3 「コトト思ウ」「モノト思ウ」

3.3.1 コトとモノによる介在

安達(1998)では、(11)（12）のように、認識的モダリティや思考動詞の直前に、形式名詞コト・モノが現れる事を「介在」と呼ぶ。そして、介在は話し手のその事態に対する認識のしかたを反映するとしている。

(11)97 年の中国返還以後は”国語”の日常化に今以上の拍車がかかることでしょう。（安達(1998)）

(12)そこだけが強調されたとは聞いていない。大統領は、大統領としての現在の立場をおっしゃったものと思う。（安達(1998)）

形態の側面において、介在現象は、(13)と(13’)から分るように、主語名詞の内容をコト・モノでまとめられる文と違って、思考動詞を取り除いて「ダ」に置き換えたら、非文になるので、コト・モノでまとめられる題述文と区別している。

(13) a. しかし、私にとって一番の思い出は、チャールズ・ミンガスが来てくれたことだろう。
b. それだけにバッハは、娘たちの縁談に、心を砕いたことと思われる。
c. このダレスの言葉は、安保条約の核心を見事に表現したものであろう。
d. たとえば、集団で生活していれば、仲間の個体がエサを見つけて食べている姿を見るだけでも、どこにエサがあるかがわかる。このことだけでも、群に加わる十分な理由になるものと思われる。

（安達（1998））

(13’) a. しかし、私にとって一番の思い出は、チャールズ・ミンガスが来てくれたことだ。
b. *それだけにバッハは、娘たちの縁談に、心を砕いたことだ。
c. このダレスの言葉は、安保条約の核心を見事に表現したものだ。
d. *このことだけでも、群に加わる十分な理由になるものだ。

(13 a)(13c)は文末をコト・モノでまとめる題述文であり、（13 b）(13 d)は安達(1998)が提示したコト・モノの介在現象を伴う例文である。（13’）のテストで文末を「ダ」に書き換えたら分かるように、介在現象の例文は「ダ」に書き換えることができない。そのため、コト・モノの介在は後ろに来るの思考動詞や認識的モダリティに依存していることが分かる。

このような違いは、3.1 と 3.2 で述べた「モノ（ダ）ト思ウ」「コト（ダ）ト思ウ」における「コトダ」「モノダ」述語文と文法形式になった「モノト思ウ」「コトト思ウ」の違いに繋がると思われる。

意味の側面において、安達(1998)はモノの介在による事態の把握を、「何らかの具体的な根拠があり、ここから論理的思考を経て得られた帰結として提示された事態をもの」とし、コトの介在による事態の把握を「話し手がその事態を真偽が不明であるものとして捉えている」としている。さらに、コトの介在は「聞き手の心理状態への言及」を伴うことが多いとも指摘している。

そのほかに、モノの介在は、「モノト思ウ」「モノト思ワレル」「モノノヨウダ」「モノラシイ」「モノト見ル」とあげられるが、コトの介在は「だろう」「と思う」にしか起こらないとも指摘している。

ところが、モノは思考動詞に介在する形ではなくても、論理的思考を経て得た帰結を表すと思われる場合も存在する。例えば、次に寺村（1984）にあげられた（14）の例文である。

(14)ストラウス米大統領特使は十六日イスラエル入りし、四日間の中東訪問外交を開始する。米・イスラエル関係は最近パレスチナ解放機構の扱いなどをめぐって不協和音が目立っている。(中略)
この危機を乗り切るため、タフで知られ、かつカーター大統領の信任の厚い「スーパー大使」ストラウス氏の出馬となったものだ。

(寺村(1984))

（14）の文末の「モノダ」は、「わけだ」に言い換えても差支えがなく、先行する事態について論理的に導き出された結論を表しているが、思考動詞を伴う介在現象ではない。ここから、二つの仮説が導き出せる。

ひとつは、「モノ」という語彙自体に、結論を言い表すという意味を持っているか、「モノ」自体が文法化され、文法機能を果たしている。もうひとつは、「モノダ」が文法化され、ひとつの文法形式として、論理的な推論を経て得られた結論という意味を表す。

だが、（14）の構造を（15）で分析したように、「ものだ」がなくても、文の表す論理的事実は変わらない。命題の内容は「なった」のところで完結している。すなわち、「ものだ」の存在は述語としてではなく、モダリティを付加する機能を果たしている。また、「ダ」を除くと、帰結の意味を表せなくなるので、「ものだ」がひとつの単位になっていることがわかる。

言い換えれば、「ものだ」がひとつの文法形式になっていると考えられる。

(15)[この危機を乗り切るため、…ストラウス氏の出馬となった] もの｛だ／*φ｝。

一方、モノの介在現象と帰結の「モノダ」は形態が違うが、機能的意味の側面において共通点を持っている。これは文法化以前の「モノ」の性質につながり、「モノ」の意味の持続に関係しているためと推測する。

以上、安達（1998）では、「コト」「モノ」の介在現象を形態の区別、意味の違いで分析している。そして、「コト」の介在は聞き手の心理状態への言及を伴うことが多いと指摘しているが、それは何故なのか、「モノ」の介在は何故起きないのかまでは言及していない。そして、3.0 のはじめに触れたように、安達（1998）における「モノ」の介在の説明は文型辞典における「モノト思ウ」の説明は食い違いがある。

したがって、以下は思考動詞「思ウ」に絞り、「コトト思ウ」と「モノト思ウ」の違い、安達（1998）と文型辞典の食い違いのところの分析を分析したい。さらに、コトの介在に起きる聞き手の心理状態への言及は何故起きるのか、その原因を分析することを試みる。

3.3.2「コトト思ウ」

ここで、「コトト思ウ」の分析から入りたい。先に述べたように、安達(1998)では、「コト」の介在を「推測」、「モノ」の介在を「論理的推論」を表すと述べている。また、「コト」は多くの場合、聞き手の心理状態を言及することが多いとも指摘している。これは文型辞典で「聞き手の状況を同情やいたわりの気持ちを込めて推測する気持ちを表す」と説明される「コトト思ウ」と一致している。

(16) さぞお疲れのことと思います。ゆっくりお休みください。(安達(1998))
(17) みなさんもずいぶん楽しみになさっていたことと思いますが、旅行の中止は私もたいへん残念です。（『日本語文型辞典』）

だが、次の（18）が示したように、「コトト思ウ」は以下三つ類似した意味を持つ形、すなわち「ト思ウ」「コトダロウ」「ダロウ」に書き換えられる。これらの形式に、意味の違いはあるのか、「ことと思う」で表される推測の性質をよりよく捉えるためには、突き止める必要があると思われる。

(18) a.景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力していることと思う。
b.景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力していると思う。
c.景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力していることだろう。
d.景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力しているだろう。

まずは「ダロウ」と「ト思ウ」についてだが、「ダロウ」は事態がいまだに確認されていないものとして捉え、「推量」の意味を表す。それに対して、「ト思ウ」は話し手自分の判断や意見を聞き手に表明するのに用いられる[2]。

そのため、「ト思ウ」は聞き手の存在が必須で、(19 a）の場合両方とも用いられるが、(19 b)のように、話し手の独り言の場合は「ダロウ」のみ使える。

(19) a.明日雨が降る{だろう/と思う}。
b.（独り言）明日雨が降る{だろう/*と思う}。
（日本語記述文法研究会(2003)）

また、「ト思ウ」と「ダロウ」に共通するのは、命題の内容がまだ成立する

[2] 「ト思ウ」の意味は、日本語記述文法研究会（2003）を参考にした。

かどうか分からず、話し手が命題内容のように推測を行うということであるが、「ト思ウ」で表される事態は「ダロウ」の表現より落ち着いた感じがあり、推量というより、話し手の判断の述べ立てというほうが適切である。しかし、「ダロウ」は話し手自身が事態を不確かなものとして捉えるのに対して、「ト思ウ」は話し手がすでに結論づけた事態を表す。「ト思ウ」をつけたのは、聞き手に伝える場合、それは事実かどうか判らないが、話し手がそう判断したということを伝えるためなのである。

次に、「コトダロウ」についてだが、日本語記述文法研究会（2003）は次の例を用いている。

(20) a. A「佐藤は来るかな？」
B「ああ、きっと来る｛だろう/*ことだろう｝」

b. A「鈴木は何をしているかな？」
B「きっと社会人として立派にやっている<u>ことだろう</u>」
（日本語記述文法研究会(2003)）

日本語記述文法研究会（2003）では、「コトダロウ」は事態の真偽について推量するのではなく、その場から離れた時空間に存在する事柄を想像しながら述べるような場合用いられると述べている。

確かに、(20 a)のように、来るか来ないかという肯定・否定の判断だけなら、「コトダロウ」は用いられない。それに対して、(20 b）のように、今現在の状況を想像する場合なら、「コトダロウ」を用いるのに不自然はない。すなわち、意味の中心になるのは、事柄に対する想像である。

「コトダロウ」は「コトト思ウ」と同様に、話し手の感情の移入を表せる。これは、場面や状況を想像し、その想像に情が流れ込んだのだと考えられる。つまり、両者に感情の移入が生じたのは、「コト」の存在が事柄の経過性を引き立たせるため、話し手が事柄の経過に割り込んで、場面や状況の想像から、いたわりの気持ちが生じたのだと考えられる。例えば、(21）を通して、「ダロウ」「ト思ウ」「コトダロウ」と「コトト思ウ」は、いたわりの気持ちの有無において違いが伺える。

(21) a.みなさんもずいぶん楽しみになさっていた<u>ことと思います</u>が、やむを得ず、旅行を中止することになりました。
b.みなさんもずいぶん楽しみになさっていた<u>と思います</u>が、やむを得ず、旅行を中止することになりました。

c.みなさんもずいぶん楽しみになさっていたことでしょうが、やむを得ず、旅行を中止することになりました。
d.みなさんもずいぶん楽しみになさっていたでしょうが、やむを得ず、旅行を中止することになりました。

(21 a) (21 b) は話し手の聞き手に対するいたわりや配慮の気持ちが読み取れるが、(21 c) は配慮の気持ちより、話し手の予測や想像に中心を置いている。さらに、(21 d)は、聞き手の気持ちに同調することがほとんどなく、失礼にさえ感じとれる。このような違いが出てくるのは何故だろう。

先に述べたように、「ト思ウ」を用いるには聞き手の存在が必須であるため、聞き手への配慮にもつながる。それに対して、「ダロウ」は話し手の主観的態度の現われにとどまり、独り言の場合でも用いられるので、文脈によっては突き放したニュアンスを帯びることもある。また、「コト」の存在は、経過性を引き立たせる効果がある。したがって、(21 a) の「コトト思ウ」は経過性を引き立たせて、聞き手への配慮もあり、丁寧さが最も高い。

(21 b)は「思ウ」の聞き手への配慮を受け継いだため、(21 a) ほどではないが、丁寧さを感じ取れる。(21 c) は「コト」の存在があるため、事柄の経過性が引き立っている。しかし、「コト」を受け取るのは、内言にとどまる「ダロウ」であり、聞き手への配慮が薄いので、経過性は話し手の事柄に対する想像のほうに偏り、丁寧さも「ダロウ」によって削られる。そして、(21 c) は内言の「ダロウ」だけを使っているため、文脈は全体的に丁寧さが低くなり、強引に旅行を中止するニュアンスになる。

さらに、ともにコトを用いた形式、「コトダロウ」と「コトト思ウ」を比較するために、次の例文を取り上げたい。

(22) a.わたしは、そのようなつもりで、日々を生きて来たつもりである。とは言え、わたしの死に会って心乱れている時には、この書も何かの力になることと思う。 (『塩狩峠』)
b.わたしは、そのようなつもりで、日々を生きて来たつもりである。とは言え、わたしの死に会って心乱れている時には、この書も何かの力になることだろう。

(22 a) と (22 b) とは、意味に大差はないが、ニュアンスにおいては、(22 a) は (22 b) より丁寧に読み取れる。これも先に述べた「ト思ウ」と「ダロウ」における聞き手への配慮の有無に影響されているからだと思われる。

以上の分析を踏まえて、「ダロウ」「ト思ウ」「コトダロウ」「コトト思ウ」の意味をまとめると、(23) のようになる。

(23)　「ダロウ」:（聞き手不在）事柄の真偽について、話し手の主観的推量を表す。

「ト思ウ」:（聞き手志向）話し手自身の判断や意見を聞き手に表明する。

「コトダロウ」: 発話現場から離れた時空間に存在する事柄を想像しながら述べる。「ダロウ」よりもいたわりの気持ちを帯びることが多い。

「コトト思ウ」: 発話現場から離れた時空間に存在する事柄を想像しながら述べる。「ト思ウ」よりもいたわりの気持ちを帯びることが多い。「コトダロウ」より丁寧さが高い。

（23）をみて、「コトダロウ」「コトト思ウ」、両方とも「コト」と共起することで、事柄における場面や情景の想像といたわりの気持ちを伴うようになるとわかる。そのため、「コト」との共起は、想像といたわりの気持ちの伴いを引き起こすと考えられる。

また、2.4 で述べたように、「コト」に経過性という実質名詞の「コト」の性質が残っていると考えられるが、「モノト思ウ」は事柄をまとめて帰結を現すのに対して、「コトト思ウ」は想像を引き起こし、話し手の感情の移入が伴われるため、事柄を引き伸ばして、詳しく事柄を見る形式だと言えるのではないかと思われる。

さらに、「コト」は共起する形式によって、違う効果を引き起こすとわかった。聞き手志向の「ト思ウ」と共起する場合、話し手は事柄を引き伸ばし、事柄を細かく吟味する結果、いたわりの気持ちが引き起こりやすい。それに対して、内言の「ダロウ」と共起する場合、想像によって生まれる相手へのいたわりの気持ちは、内言の「ダロウ」によって削られ、想像性のみが顕著になったため、意味も事柄に対する想像へと偏る。

3.3.3　「モノト思ウ」

次に、「モノト思ウ」について見てみたい。安達(1998)は「モノト思ウ」を「論理的思考を経て得た帰結を表す」としているが、文型辞典では「話し手が確信していることを表す」と説明されている。両者の説明に食い違いが生じている。ここで、両者が挙げた例文を引用する。

(7)　1 日本欄「都の『車通行料』は手前勝手だ」の意見があったが、私はそう思わない。（中略）物流を含めた移動の手段は、道路だけではない。通行料を嫌ってほかの交通機関にシフトされれば、環境は良くなり、国民全体の利益にもつながるはずだ。私は、行き過ぎた車社会を見直す、良い

お手本を都が示すものと思っている。 (p.18 の再掲)

(24) そういうことはないものと思うが、一応確かめてみよう。(『日本語文型辞典』)

(25) 母は、子供たちも一緒に行くものと思っている。 (『日本語文型辞典』)

たしかに、安達(1998)があげた（12）は文脈をふまえて論理的思考で得た帰結を表しているが、『日本語文型辞典』があげた（24）（25）は話し手が確信していることを表している。

だが、実は両者は根拠をもっているところに共通している。（12）は文脈に提供された情報を材料に、論理的思考で情報を処理した結果、結論を得た。そのため、根拠は得た情報のほかに、論理的思考能力である。一方、（24）（25）は根拠が言語化されていないが、確信は根拠から生まれたものである。

（24）（25）を分析する前に、まず（26）（27）のように、根拠が言語化された例を見てみたい。

(26) （荷車の）前輪がはずしてあったので、彼はこわれたものと思ったのである。 (アンナ・カレーニナ)

(27) ジュリヤンが地べたに倒れているのを見て、死んでいるものと思った。 (『赤と黒』)

（26）では話し手が前輪の状態を見て、荷車全体の状態を推測している。（27）では、話し手が目の前の人の様子を見て、死んでいるという判断を下した。すなわち、（26）（27）は明らかに文脈に先行事象があって、それを根拠に判断したため、話し手は確信を持っている。そして、このように先行事象を持つ例は（26’）（27’）のように、「モノ」を「ノダ」に置き換えられる。

(26’) （荷車の）前輪がはずしてあったので、彼はこわれたのだと思ったのである。

(27’) ジュリヤンが地べたに倒れているのを見て、死んでいるのだと思った。

「ノダと思う」と「モノト思ウ」の置き換えを説明するために、ここで「ノダ」の意味を説明しておきたい。

「ノダ」について、名嶋（2007）と日本語記述文法研究会(2003)では考察を行っているが、名嶋（2007）は「ノダ」を説明、発見、命令、決意、忠告、願望など、まず文における「ノダ」が果たす意味機能で分類を行い、そこから「ノダ」のそれぞれの意味用法における「ノダ」の構造を考察している。それに対して、日本語記述文法研究会（2003）は「ノダ」の意味構造を分析し、「ノダ」を多義にさせた二つの意味要素によって、「ノダ」を分類している。

そして、「モノト思ウ」との構造を比較するために、意味構造をもって分析

された「ノダ」を通して考察するほうがを把握しやすいと思い、日本語記述文法研究会（2003）の論述を踏まえることにする。

日本語記述文法研究会(2003)では、「ノダ」を四つの用法に分けている。以下四つの用法の例文を挙げて説明する。

ただ、「関係づけ」と「非関係づけ」の「ノダ」の違いについては、説明が足りないように思われるため、以下は日本語記述文法研究会(2003)の分類を述べた後、「関係づけ」と「非関係づけ」の違いを分析したい。

(28) a. 私、明日は来ません。用事があるんです。（提示・関係づけ）
b. [映画館の前の長い行列を見て] 新作をやってるんだな。（把握・関係づけ）
c. 僕、絶対、プロのサッカー選手になるんだ。（提示・非関係づけ）
d. [会場に入って] え、こんなにいっぱい人がいるんだ。（把握・非関係づけ）

（日本語記述文法研究会（2003））

（28）で示したように、日本語記述文法研究会(2003)では、認識者は誰か、先行文脈との関係という二つの軸から、「ノダ」の意味を四つに分けている。

話し手が認識していたことを聞き手に提示して認識させようとする「ノダ」を「提示」、話して自身が認識していなかったことを把握したとき、あるいは改めて把握したときに用いられる「ノダ」を「把握」としている。そして、先行文脈や状況について、その事情などを提示・把握する「ノダ」を「関係づけ」、事態をそのまま提示したり把握したりする「ノダ」を「非関係づけ」としている。

例えば、（28 a）は話し手がなぜ明日来ないのか、その理由を聞き手に認識させようとしている。認識者は聞き手のため、「提示」の「ノダ」になる。また、「用事がある」は「明日来ない」の理由のため、先行文脈との関係づけを表す「ノダ」であることがわかる。（28 b）は話し手の独り言なので、認識者は話し手であり、把握の「ノダ」になる。また、先行文脈はないが、長い行列を見て、それについての感想を述べているので、先行事象への「関係づけ」の「ノダ」になる。そして、（28 c）は聞き手に決心を表すので、「提示」の「ノダ」と分かる。（28 d）は話し手自身が会場の状況を認識したので、「把握」の「ノダ」になる。

しかし、ここで問題になるのは「非関係づけ」の「ノダ」である。（28 d）は、「会場に入る」という先行事象がある。また、（28 c）も、（29）が示したように、何かの先行事象がないと、違和感を感じる。

(29) a. [サッカー選手が試合中の大活躍を見て] 僕、絶対、プロのサッカー

選手になるんだ。

b. [プロのサッカー選手になる] 僕、絶対、プロのサッカー選手になるんだ。

c. [サッカーは学校の遊びでいいから、卒業後の進路はちゃんと考えてください]僕、絶対、プロのサッカー選手になるんだ。

したがって、「関係づけ」の「ノダ」と「非関係づけ」の「ノダ」の違いは、先行事象の有無によるものではないと思われる。「ノダ」を用いるには、先行事象の存在が必須なのである。では、「関係づけ」と「非関係づけ」の「ノダ」はどう違うのだろうか。それを説明するために、もう一度（28 a）（28 d）を並べる。

(28) a. 私、明日は来ません。用事があるんです。（提示・関係づけ）

d. [会場に入って] え、こんなにいっぱい人がいるんだ。（把握・非関係づけ）

（28 a）では、「ノダ」の文は、先行事象に対しての説明になっている。それに対して、（28 d）では、「ノダ」の文は外側の世界に存在する事実そのものを表し、「ノダ」を付け加えることによって、話し手がその事実を把握したことを表すのである。

もうひとつ例文を見ると、（30）で示したように、(30 a)は A の発話（先行事象）をもとに、論理的推理をした結果を表している。聞き手は存在するが、ここで焦点は聞き手に認識させることではなく、話し手自身の命題内容への把握にある。また、「ノダ」に繋がる命題内容は先行する文脈を踏まえて理解を表しているため、（30 a）は関係づけの「ノダ」となっている。一方、（30 b）は先行事象が言語化されていないが、雨の音を聞いたり、頭上に落ちてきたりするなどを先行事象として、元々存在する雨が降っているという事実を話し手に認識させるため、「関係づけ」の「ノダ」とされやすいが、命題内容は先行事象の背景にある事情や原因を理解したり、分析を行ったりするような内容ではないため、「非関係づけ」の「ノダ」になる。

(30) a. A「毎月、20 冊ぐらい読んでます」

B「とすると、年間 200 冊以上読んでるんだ」（把握・関係づけ）

b. あ、雨、降ってるんだ。（把握・非関係づけ）

日本語記述文法研究会（2003）

すなわち、「関係づけ」の場合、「ノダ」の文は先行事象の説明、解釈や推理など、何らかの形で先行する事象や文脈と繋がる。それに対して、「非関係づ

け」の場合、「ノダ」の文は、先行事象がきっかけとなって、「ノダ」の文で表す事実を認識させるが、先行事象の背後事情などと関わる文ではない。そのため、「非関係づけ」の「ノダ」における先行事象との関係は「関係づけ」の「ノダ」ほど緊密ではないと結論付けられる。

ここで改めて「モノト思ウ」との置き換えについてみる。

(24’)*そういうことはないのだと思うが、一応確かめてみよう。

(25’)*母は、子供たちも一緒に行くのだと思っている。

(26’) おそらく彼女は、加藤が、例年のように梅雨あけと同時に、活発な登山活動を始めるのだと思ったのにちがいなかった。

(27’) ジュリヤンが地べたに倒れているのを見て、死んでいるのだと思った。

(24’)(25’)から分かるように、先行事象がはっきりしない文は、「モノ」を「ノダ」に置き換えられない。また、(26’)(27’)のように、「モノ」を「ノダ」に置き換えられる「モノト思ウ」の例は、話し手自身の判断や把握を表す文である。また、「ノダ」の後ろにさらに聞き手を意識する「ト思ウ」をつけられることから、聞き手の存在も要求しないことがわかる。以上をもって、「モノト思ウ」は「モノ」を「ノダ」に置き換えられる場合は、「把握・関係づけ」の「ノダ」の場合だけであることが分かった。

また、「モノト思ウ」の「モノ」が「ノダ」に置き換えることができるなら、それは「モノ」が形式の中でもつ働きが「ノダ」と共通していると意味するのではないかと考えられる。すなわち、「モノト思ウ」において、「モノ」は話し手が先行する事態に対して、どのように認識し、把握するのか、それを表すと考えられるのである。

ただ、「ものと思ウ」は「ノダと思う」に言い換えられるが、(31)のように、「把握・関係づけ」の「ノダ」は「もの」も、「モノと思う」にも言い換えることができない。

(31) a. [映画館の前の長い行列を見て] 新作をやってるんだな。

b. A「毎月、20 冊ぐらい読んでます」

B「とすると、年間 200 冊以上読んでるんだ」

それは、「モノ」は「モノト思ウ」において、「ノダ」と共通する働きを見出せるが、「モノ」自体は「ノダ」と同じ働きを果たす文法形式になっていないためだ思われる。また、「把握・関係づけ」の「ノダ」は、話し手自身の認識を表しているので、自己の納得や独り言の場合も多い。それに対して、「モノト思ウ」は「ト思ウ」の影響を受け、聞き手を意識するニュアンスを持っている。そのため、「ノダ」は「モノト思ウ」にも置き換えられない。

以上、先行事象を推理の根拠として持つ「モノト思ウ」について見てきた。そのような「モノト思ウ」は、「モノ」を「把握・関係づけ」の「ノダ」に置き換えられる。そのため、「モノ」は「把握・関係づけ」の「ノダ」と共通する意味を持つと考えられる。

ここで、先行事象ははっきりしないが、推理の根拠を別に持つと思われる(24)(25)の「モノト思ウ」の例に戻る。(24’)(25’)が示したように、このような「モノト思ウ」でも、話し手はまったく根拠もなしに確信を持ったわけではない。

(24) そういうことはないものと思うが、一応確かめてみよう。(『日本語文型辞典』)
(25) 母は、子供たちも一緒に行くものと思っている。　(『日本語文型辞典』)

(24’) a.理論上、そういうことはないものと思うが、一応確かめてみよう。
b.一般的に考えて、そういうことはないものと思うが、一応確かめてみよう。
c.？なんとなく、そういうことはないものと思うが、一応確かめてみよう。
(25’) ？母は、なんとなく 子供たちも一緒に行くものと思っている。

(24’a) (25’b)は問題なく成立するが、(24’c)は違和感が生じてしまう。それは、(24’a) (24’b)は理論や普遍的事実をもとに、判断を行ったのに対して、(24’c)では話し手の直感的な考えによるためである。(25’)にも同じ理由で違和感が生じている。したがって、根拠を持たない場合、「モノト思ウ」を用いると、違和感が生じることが分かる。(24)(25)では根拠を言語化されていないが、話し手の経験、社会に存在する普遍的事実など、何らかの根拠があることを想定される。また、(12”)(24”)(25”)から分かるように、「モノ」を取り除くと、話し手の確信度および証拠性が低くなるため、ここからも、「モノと思う」の証拠性が伺える。

(12”) 私は、行き過ぎた車社会を見直す、良いお手本を都が示すと思っている。
(24”) そういうことはないと思うが、一応確かめてみよう。
(25”) 母は、子供たちも一緒に行くと思っている。

また、(12)のように、論理的推理によって得た帰結を表す場合は、文脈の事態を導き出された結論の根拠にして判断したのである。したがって、「モノト思ウ」の意味の説明は、「話し手が確信していることを表す」と同時に、判

断の根拠の存在も暗示していると付け加えたい。

すなわち、「モノト思ウ」は、意味の基本は根拠に導き出された判断・結論を表す。だが、根拠がちゃんと言語化された場合、論理的推理で得た帰結であることが前に出され、客観的なニュアンスが強い。それに対して、根拠が言語化されないなどはっきりしない場合、話し手の確信が前に出て、主観的なニュアンスが強くなる。

さらに、「モノト思ウ」からテンス・アスペクトの変化によって生まれた文法形式「モノト思ッテイタ」もある。これについても見てみよう。

(32) 明日はストで休みになるものと思っていたから、授業の準備は全然しなかった。 (『日本語文型辞典』)

(33) 田中さんはこないものと思って、五人分の食事しか作らなかった。 (『日本語文型辞典』)

文型辞典では、「モノト思ッテイタ」を話し手の思い込みを表す。真実だと思い込んでいたが、実際にはそうではなかったという場合に用いるのが普通と説明しているが、何故「モノト思ッテイタ」は思い込みしか表せないかというと、それは「タ」形のモダリティから来たのである[3]。ここで、まず（34）の例を参考にしたい。

(34) 学生の時にもっと基礎をしっかり学んでおけばよかったとよく思います。 (毎日新聞 2000.7.15)

（34）では話し手の後悔する気持ちを表している。「学生の時に基礎をしっかり学んでおけばよかった」ということは、事実に学生のときはそうしなかったということである。反事実の意味を表すために、形容詞「いい」のタ形を用いたのである。

したがって、「モノト思ッテイタ」は、「モノト思ウ」と同じように、基本は話し手が何らかの根拠から生まれた確信を表す。（32）では、ストライキが起きたため、授業が休みになることを確信していた。（33）では何らかの事情により、田中さんは来ないことを確信していた。だが、そのように判断と確信は、

[3]日本語記述文法研究会（2007）では、このような現象を過去形による特殊な意味・用法としている。（33）は反事実を表しているが、過去形におけるほかの特殊な意味として、さらに次の三つあげている。

a. [鍵を探していて]あっ、ここにあった。（発見）

b. そういえば、ここのまんじゅう、けっこうおいしかったんだ。（想起）

c. ほら、さっさと行った、行った。（差し迫った要求）

文型辞典で「思い込み」と説明されるのは、その確信が後になって事実ではないことが発見されたからである。すなわち、「モノト思ッテイタ」は、「モノト思ウ」によって、話し手の確信を表し、「思ウ」の「タ」形によって、確信の反事実性を表すという構造になっているのである。

また、「ト思ッテイタ」は、日本語記述文法研究会（2003）が述べているように、通常（34）（35）（36）のように、三つの用法があるが、そのうち、「モノ」の挿入が許されるのは、（37）のように、考えが間違っている場合のみである。

(35)　そのとき、私は、田中さんと話しをしながら、この人はいい人だなあ{φ/*もの}と思っていた。（日本語記述文法研究会（2003））

(36)　いつかはこうなる{φ/*もの}と思っていた。（日本語記述文法研究会（2003））

(37)　君にはもう会えない{φ/もの}と思っていた。（日本語記述文法研究会（2003））

（35）は話し手が過去のある時点で浮かび上がった考えを表し、（36）は話し手がずっともち続けた考え表し、（37）は話し手がずっと持ち続けた考えが誤りの場合である。しかし、そのなかで「モノ」を付け加えられるのは、（37）のように、その考えが間違っている場合のみである。この現象は日本語記述文法研究会（2003）でも指摘されているが、原因までは触れていない。

その原因は、先にも述べたタ形のモダリティと関係していると思われる。すなわち、「モノト思ッテイタ」は「思ッテイタ」の意味・用法に、「モノ」が挿入されたのではなく、「モノト思ウ」という話し手の確信を表す文法形式に、タ形の特殊用法を応用してその確信が事実と違っていることを表すためだと思われる。

以上、「モノト思ウ」を見てきた。安達（1998）では、「モノト思ウ」は話し手が論理的思考、経験や社会に存在する一般的事実などを根拠に導き出された判断・結論と述べている。さらに、それに付け加えて、3.3.3 では、根拠が言語化されているか否かで、ニュアンスに揺れが生じることがわかった。根拠が言語化された場合、論理的思考で得た帰結であることが顕著になり、客観的なニュアンスが強い。それに対して、根拠が言語化されない場合、根拠性が薄くなり、話し手の確信のほうが顕著になり、主観的なニュアンスが強くなる。

また、「モノト思ウ」を「ノダト思ウ」に言いかえられることから、「モノト思ウ」における「モノ」の意味特徴は「把握・関係づけ」の「ノダ」に共通するところがあると考えられる。そして、そのような「把握・関係づけ」の「ノダ」は、話し手の先行事象に対する説明、解釈や判断などの把握のしかたを表すのである。

3.4　まとめ

以上は「コト（ダ）ト思ウ」「モノ（ダ）ト思ウ」について考察した。

「コトダト思ウ」は「コトダ」を述語にとる文で、「コトダ」の部分は主語になる指示対象に対して規定を行うため、指示対象の存在が必須である。その統語構造は「[節+コトダ]+ト思ウ」となっており、文法化があまり進んでいない。それに対して、「コトト思ウ」は、推測のモダリティを表す文法形式になって、「節+コトト思ウ」という構造になっており、指示対象が存在しない。

また、「モノダト思ウ」と「モノト思ウ」においても、同じような違いが伺える。「モノダト思ウ」は「モノダ」を述語に取り、統語構造は「[節+モノダ]+ト思ウ」となっており、主語になる指示対象が必須である。「モノト思ウ」は「節+モノト思ウ」という指示対象を持たない統語構造をもち、文法化が進んで、モダリティを表す文法形式になっている。

次に、モダリティを表す文法形式となった「コトト思ウ」と「モノト思ウ」の分析を行った。

3.3.2 では「コトト思ウ」を分析した。「コトト思ウ」は言い換え可能な形式として、「ダロウ」「コトダロウ」「ト思ウ」がある。それぞれの意味特徴は（23）のようにまとめられる。

（23）「ダロウ」:（聞き手不在）事柄の真偽について、話し手の主観的推量を表す。
「ト思ウ」:（聞き手志向）話し手自身の判断や意見を聞き手に表明する。
「コトダロウ」: 発話現場から離れた時空間に存在する事柄を想像しながら述べる。「ダロウ」よりもいたわりの気持ちを帯びることが多い。
「コトト思ウ」: 発話現場から離れた時空間に存在する事柄を想像しながら述べる。「ト思ウ」よりもいたわりの気持ちを帯びることが多い。「コトダロウ」より丁寧さが高い。

「コトト思ウ」の意味の基本は、「発話の時点から別の時空間に存在する事柄を想像し、推測する。」その想像した状況や場面に情が流れ込み、いたわりの気持ちを帯びるようになる場合が多い。いたわりの気持ちの伴いは、安達（1998）では「聞き手の心理状態への言及」とされ、指摘されている。

そして、なぜ「コトト思ウ」はいたわりの気持ちを帯びるのか、次のように分析してみた。コトの経過性は事柄に割り込み、広げる機能がある。そして、共起する形式によって、違う効果を引き起こす。聞き手志向の「ト思ウ」と共起する場合、事柄に割り込む経過性は事態を広げる。話し手がその中で細かく事態を吟味したため、いたわりの気持ちが引き起こりやすい。それに対して、内言の「ダロウ」と共起する場合、相手へのいたわりの気持ちは、内言の「ダ

ロウ」によって削られ、経過性によってもたらした事柄の割り込みと事態の広げだけが顕著になったため、意味も事柄に対する想像へと偏るのである。

一方、3.3.3 では、「モノト思ウ」を分析した。「モノト思ウ」について安達（1998）の分析と日本語文型辞典の説明に、食い違いが生じている。分析した結果、その原因はニュアンスの揺れにあると分かった。

「モノト思ウ」は、意味の基本は根拠に導き出された判断・結論を表す。そのため、話し手の確信度も高い。だが、根拠がちゃんと言語化された場合、論理的推理で得た帰結であることが前に出され、客観的なニュアンスが強い。それに対して、根拠が言語化されないなどはっきりしない場合、話し手の確信が前に出て、主観的なニュアンスが強くなる。

また、「モノト思ウ」は、文脈に先行事象を持つ場合、「モノ」を「把握・関係づけ」の「ノダ」に言い換えられるので、「モノト思ウ」における「モノ」の働きは、「把握・関係づけ」の「ノダ」に共通するところがあると推測できる。そして、「把握・関係づけ」の「ノダ」は、先行事象に対しての話し手の把握のしかたを表すのである。

3.5　結論

「コト」と「モノ」の性質を探るために、第三節では、文法化されたモダリティ形式「コトト思ウ」「モノト思ウ」を分析した。分析の結果、「コトト思ウ」「モノト思ウ」において、意味の揺れとつながりが伺える。

「コト」の経過性は事柄に割り込み、事態を広げる機能がある。「ト思ウ」との共起によって、事柄の想像がいたわりの気持ちへと導く。「ダロウ」との共起によって、いたわりの気持ちが削られ、事柄の想像のほうが際立つ。その機能と効果からも、「コト」の動的性質が伺える。

一方、「モノト思ウ」の意味は「確信」と「論理的帰結」の間にゆれている。根拠が言語化された場合、論理的思考で得た帰結であることが顕著になり、客観的なニュアンスが強い。それに対して、根拠が言語化されない場合、根拠性が薄くなり、話し手の確信のほうが顕著になり、主観的なニュアンスが強くなる。だが「確信」にせよ、「論理的帰結」にせよ、いずれもはんこを押すように、話し手は事柄に対して、結論か判断を下している。すなわち、静的な存在である。

それに対して、「コトト思ウ」においては、「コト」の経過性によって、事柄に入り込み、事態への想像を引き起こすので、動的な存在である。また、「コトト思ウ」の意味においても、「発話の時点から別の時空間に存在する事柄を想像し、推測する」という想像や推測を中心とした落ち着かない性質のものである。

國立政治大學
National Chengchi University

第四章　感嘆を表す「モノ」「コト」

4.0 はじめに

日本語記述文法研究会（2003）では、感嘆を(1)のように、話し手がものや事象に刺激されて生まれた肯定的な感情としているが、これに(2)のように、ものや事象に刺激されて生まれたあきれやマイナス的な感情を合わせて、感嘆と呼ぶことにする。

(1) まあ、きれいな花！ (肯定的態度)　（作例）
(2) よくもそんなことが言えるわね。(マイナス評価)　（作例）
(3) まあ、きれい！/まあ、美しい！　（作例）

感嘆のモダリティを表すには、三つの形がある。ひとつは、(1) のように、名詞で終わる装定文[4]にする。ひとつは、(2) のように、述定文[5]に陳述副詞や終助詞を付け加えるものである。もうひとつは、(3) のように、形容詞の語幹あるいは終止形で表すものである。

そして、(4) - (9) のように、述定文に付け加える終助詞と副詞に、形式名詞「コト」「モノ」から発展したものがある。

(4) もう、そんな時刻？……時間のたつのが早いこと。(コト・感嘆)（新源氏）
(5) ずいぶんけちなお願いだこと。縁起でもないわ。あなたもすっかり田舎者になってしまったのね。(コト・あきれ)　（新源氏）
(6) 畦に腰掛け、家族と一緒に食べたにぎり飯のなんとうまかったことか。今も、鮮明に覚えている。(コトカ・感嘆)　（毎日新聞 2000.11.10）
(7) 民謡の番になると、前の席の中年男性が舞台と一緒に歌いだしたのには閉口した。「やめて」と何度心の内で叫んだことか。(コトカ・マイナス感情を含む感嘆)　（毎日新聞 2000.1.12）
(8) これは面白くなってきたものだ。(「ー（タ）モノダ」・感嘆)（『放浪記』）
(9) 政府・自民党は、これに懲りることもなく、今度は小渕前首相の病気退陣を利用した「同情総選挙」での勝利を画策している、と言われている。事実だとすれば、国民もナメられたものである。(「ー（タ）モノダ」・あきれ)　（毎日新聞 2000.4.19）

---

[4] 『日本文法事典』では、文の従属成分が文の断止成分へ連体的なあり方で結びついていくことによって文を形成していく場合は「装定」と説明している。
Ex: なんときれいな桜の花よ。
[5] 『日本文法事典』では、文の従属成分が文の断止成分へ連用的なあり方で結びついていくことによって文を形成していく場合は「述定」と説明している。
Ex: なんときれいな桜の花が咲いている。

以下は「コト」「コトカ」「ー（タ）モノダ」で表す感嘆のモダリティの違いを検討し、形式名詞「コト」「モノ」の性質はいかに反映されるのかを追及することを試みる。

4.1　感嘆を表す「コト」・「コトカ」

4.1.1　「コト」

ここで、まず「コト」を用いた感嘆の例と、装定文、形容詞の一語文と比較する。

(10) a. まあ、残念。　(作例)
　　b. まあ、残念ですこと。　(作例)
(11) a. まあ、なんときれいな花！　(作例)
　　b. まあ、なんときれいな花だこと！　(作例)

（10）（11）が示したように、形容詞の一語文と装定文で表す感嘆のモダリティは、「コト」の感嘆文に書き換えられる。そして、（10 b）は「残念なこと」という連体形で書くこともある。では、一語文と想定文で表す感嘆は、「コト」を付け加えたものと、意味は違うのだろうか。

まず、日本語記述文法研究会（2003）が指摘するように、「コト」による感嘆文は、女性が用いることが多いため、女性的な口調になる。

そして、「コト」を用いる感嘆は、形容詞の一語文と装定文と比べて、より冷静に感嘆対象を眺めるというスタンスがある。次の文章からその違いが伺える。

(12) 少年　（姉の顔を見上げ）青い！
　　女子　ええ！
　　少年　青い！
　　女子　何が？
　　少年　青いの、お姉様のお顔が……そして冷たい！　そして大変悲しそうなお眼だこと。お姉様！　（『レモンの花の咲く丘へ』）

文章では、少年が姉の顔色に気づいたとき、驚きのあまりに、自分の感情を即時的に言葉で表し、「青い」と発している。

そして、「青い」「冷たい」と続いて異変に気づき、目の悲しさを見出したときには、姉の異常を分かり、「悲しそうなお眼だこと」のところでは、話し手の情意が落ち着きつつあることが読み取れる。

もうひとつ例を取り上げる。

國立政治大學 National Chengchi University

(13) 使　あなたは小野の小町の代りに地獄へ堕ちることになったのです。
小町　小野の小町の代りに！　それはまた一体どうしたんです？
使　あの人は今、身持ちだそうです。深草の少将のたねとかを、……
小町　（憤然と）それをほんとうだと思ったのですか？　嘘ですよ。あなた！　少将は今でもあの人のところへ百夜通《ももよがよ》いをしているくらいですもの。少将の胤を宿すのはおろか、逢《あ》ったことさえ一度もありはしません。嘘も、嘘も、真赤な嘘ですよ！
使　真赤な嘘？　そんなことはまさかないでしょう。
小町　では誰にでも聞いて御覧なさい。深草の少将の百夜通いと云えば、げすの子供でも知っているはずです。それをあなたは嘘とも思わずに、……あの人の代りにわたしの命を、……ひどい。ひどい。ひどい{φ/*こと}。（泣き始める）　（略）
小町　まあ、何と云う図々しい人だ！　嘘つき！　九尾の狐！　男たらし！　騙り！　尼天狗！　おひきずり！　もうもうもう、今度顔を合せたが最後、きっと喉笛に噛みついてやるから。くやしい。くやしい。くやしい{φ/*こと}。　（『二人小町』）

(13)が示したように、感情が高揚する場合、形容詞の一語文は用いられるが、「コト」の感嘆文に書き換えることは難しい。それは話し手が高揚の感情にとらわれ、自分の状態や周りの状況を冷静に見ることができないため、自分の感情を客観視する「コト」を使うことが適わないからである。

そのほかに、「コト」の感嘆は（14）のように、装定文の形をもっているが、文末の名詞は実質名詞ではなく、形式名詞の「コト」になる例もある。この場合、「の」を「が」に書き換えることが可能であり、述定文にすることができる。そして、（15）のように、装定文の形ではなく、述定文のなかで終助詞の働きを果たす例もある。

(14) あの嵐の怖ろしかったこと。住吉の神、たすけたまえ、と念じたのをお聞き届け下されたのだな。　（新源氏）
(15) 思えば、姉君の三の宮はうらやましいこと。あなたを姫君の婿になさって、おん孫さえお持ちになり、その縁で、始終あなたにお会いになれるのですものねえ。　（新源氏）

（14）の「怖ろしかった」のタ形と（15）の「思えば」から分かるように、（14）（15）は目の前の情景に刺激されて生じたものではなく、即時的な感嘆でなくなっている。それはすでに起こったことを振り返ることにより引き起こされた感嘆である。

そして、（14’）(15’)と比較して分かるように、「コト」が省略されると、文の意味は主語の性質の述べ立てに近くなり、「コト」が付加されると、感嘆

の意味が生まれ、より話し手個人の感想に近くなる。
(14’) あの嵐が怖ろしかった。
(15’) 姉君の三の宮はうらやましい。

以上から分かるように、形容詞の一語文と装定文による感嘆は即時的な反応の場合に用いられる。それに対して、「コト」による感嘆は、即時的な反応の場合と、回想による感嘆の両方に用いられる。だが、即時的な反応で用いる「コト」は、形容詞の一語文と装定文に比べて、話し手はより冷静に自分と状況を捉え、自分の感情を客観視しているのである。

これについて、日本記述文法研究会(2003)であげられた例も反映している。

(16) a. この作品の面白いこと！
b. いやまったく、推理小説の面白いこと！やめられないね。
（日本記述文法研究会（2003））

（16 a）では、感嘆の対象は特定のものになっているが、（16 b）では、特定のものではなく、小説のジャンルが感嘆の対象となっている。つまり、「コト」による感嘆は、特定のものに対してでなくても用いられる。感嘆の対象は特定の時空間に存在するものでなくてもよいことは、すなわち、特定の時空間での即時的反応でなくてよいことを意味する。

したがって、即時性で比べると、最も即時的なものから順に（17）のようになる。

(17) 装定文・形容詞の一語文->現場のコト->回想のコト

4.1.2 「コトカ」

次に「コトカ」の例についてみてみたい。

（6）畦に腰掛け、家族と一緒に食べたにぎり飯のなんとうまかったことか。今も、鮮明に覚えている。（毎日新聞 2000.11.10）
（7）民謡の番になると、前の席の中年男性が舞台と一緒に歌いだしたのには閉口した。「やめて」と何度心の内で叫んだことか。（毎日新聞 2000.1.12）

（6）（7）で分かるように、「コトカ」を用いるには疑問詞の存在が必須である。その意味は述べた性質の程度の甚だしさを表し、後ろにさらに「言い表せない」「わからない」などを付け加えることが可能である。

また、（18）（19）(20)は（18’）(19’)(20’)のように、「コト」を省略す

ることができるが、後ろの「言い表せない」は省略すると不安定な感じの文になる。そして、「コト」が省略すると、感嘆の意味も薄くなる。それは、三節で述べた「コト」の経過性で引き立つ想像の意味と関係すると考えられる。

すなわち、「コトカ」は「コト」の存在によって、命題で述べた事柄への想像性が引き立ち、当時の場面に連れ戻して見せるようになるため、後ろの「分からない」「言い表せない」などが省略できるようになり、感嘆の意味も状況の想像によって生まれたのである。

(18) 修道士のくれた一杯の水がどんなにおいしかったことか（言い表せない）。
（『狭き門』）

(19) その放送は、どんなに心和む時間だったことか（言い表せない）。
（毎日新聞 2000.5.20）

(20) 我が息子も高校、大学、大学院と日本育英会から貸与を受け、勉強させてもらった。母子家庭で、それはどんなにありがたかったことか（言い表せない）。（毎日新聞 2000.11.5）

(18’) 修道士のくれた一杯の水がどんなにおいしかったか、{言い表せない/?φ}。

(19’) その放送は、どんなに心和む時間だったか、{言い表せない/?φ}。

(20’) 我が息子も高校、大学、大学院と日本育英会から貸与を受け、勉強させてもらった。母子家庭で、それはどんなにありがたかったか、{言い表せない/?φ}。

ただし、「なんと」と共起する場合、(21) が示すように、文末は名詞でなければならないので、(22)(23)においては、「コト」の省略ができない。

(21) a. この花はなんときれいなのだろう！（日本語記述文法研究会（2003））
b. *この花はなんときれいだろう！

(22) ヴェルテルの何と自由であることか。（『二十歳の原点』）

(23) 日本のトップリーダーの地位にあるというのに、この人の憲法感覚は一体どうなっているのだろう……。森喜朗首相の「日本は天皇を中心とする神の国」発言を聞いて、頭をよぎったのは、そんな驚きだった。（略）支持者の前で自らの立場をわきまえずにリップサービスする。言動のなんと軽いことか。（毎日新聞 2000.5.17）

また、「コトカ」は想像性を持ち合わせているため、(24) のように、仮説の場合の感嘆にも用いられる。

(24) ああ、こんな月光に照らされた浜辺の美しさを、かの紫の君に見せてやったら、どんなに喜ぶことか。（新源氏）

4.1.3　まとめ

以上、「コト」「コトカ」によって表す感嘆のモダリティについてみてきた。

「コト」は実質名詞の装定文と形容詞の一語文と比べて、話し手が自分の感情と距離を保ち、冷静的に状況をながめている。そのため、実質名詞の装定文と形容詞の一語文で表す即時的な反応より、客観性を持っている。

即時性で最も即時的なものから順に並べると、(17) のようになる。

(17) 装定文・形容詞の一語文->現場のコト->回想のコト

一方、「コトカ」は「コト」によって想像性を引き立たせて、程度の甚だしさを表し、感嘆の意味を帯びるようになる。そして、仮説の場合の感嘆にも用いられる。

4.2　感嘆を表す「ー(タ)モノダ」

4.2.1 感嘆の「ー(タ)モノダ」の統語構造

回想の「ータモノダ」は、必ず動詞のタ形につけるのに対して、感嘆の「ー(タ)モノダ」は、(25)が示すように、動詞のル形、タ形と形容詞の現在形に接続することができる。(25 a)は対格動詞のタ形、(25 b) は非能格動詞のタ形、(25 c) は非対格動詞を可能形に変えて、ル形をとったもので、(25 d) は可能動詞のタ形であり、(25 e)は形容詞の現在形の例である。それぞれの例について、以下詳しく述べていく。

(25) a. 介護保険料を老齢年金から天引きとは、なかなか考えたものだ。(毎日新聞 2000.8.24)
　　b. お前も、よくねばったものだねえ。　　(『正義と微笑』)
　　c. よくもまあ、ここまで変れるものだ。　　(『死体は眠らない』)
　　d. こんな日の予約が、よくとれたものだ。　　(『クリスマス・イヴ』)
　　e. 年はとっても、その情熱は衰えない。凄いものだ。(『インペリアル』)

(25 c) (25 d)で分かるように、非対格動詞及び可能動詞、存在動詞は意味上静的な性質を表し、感嘆の「ー(タ)モノダ」と共起するの場合は、ル形とタ形両方に接続することが可能である。だが、意味は多少違う。ル形の場合、感嘆は話題人物の属性に向ける。それに対して、タ形の場合、感嘆はすでに起きた、一回限りのことに向けるのである。

例えば、(26 a)は変化対象が持つ自己を変化させる能力に対して感心を表すが、(26 b) は変化の結果を見て、感心しているのである。

(26) a．よくもまあ、ここまで変れるものだ。　　（『死体は眠らない』）
　　b．よくもまあ、ここまで変れたものだ。　　（作例）

そして、（25 a）（25 b)のように、感嘆の「ー(タ)モノダ」が対格動詞と非能格動詞と共起する場合、対格動詞と非能格動詞は動きを表す動詞なので、ほとんどはすでに起きた、一回限りのことへの感嘆を表す、タ形をとるのである。だが、（27）のように、ル形と共起する例もある。そこから、ル形とタ形を使う場合の意味の違いは、はっきり現れる。

(27) a．重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。女房も年をとったものだ。　　（『点と線』）
　　b．五年も見ないと人間って年をとるもんだなあ。　　（作例）

(27 a）では、話し手が女房の様子をみて、感嘆の気持ちがこみ上げたため、特定のことに対するものである。そして、（27 b）では「五年も見ないと年をとる」ということを人間の性質として述べている。性質に向けての感嘆を表すため、動詞はル形になっている。

このように、ル形をとる場合は、超時的、普遍的事実を表し、タ形をとる場合は、一回限りの事柄を表すのである。

そして、動詞の性質から見ると、ル形をとる場合は非対格動詞、可能動詞と存在動詞を用いることが多く、タ形をとる場合は非能格動詞と対格動詞を用いることが多い。

また、タ形を取るのは、テンス・アスペクトを反映するためのものが多いが、存在動詞の場合、タ形にするのは、、テンス・アスペクトではなく、モダリティを表しているのだと考えられる[6]。

---

[6] 寺村（1984）では、タ形のモダリティを「ムードのタ形」と称し、以下の六つに分類している。
（1）過去に実際に起こらなかったことを起こりえたことと主張する。
　Ex: も少し遅かったら助からなかった。
（2）過去に実際しなかったことを、すべきであったと主張。回想する。
　Ex: あそこは買いだった。
（3）忘れていた過去の認識を思い出す。
　Ex: 失礼ですが、お名前はなんでしたかね？
（4）未然のことを、既に実現したことのように仮想して言いなす。
　Ex: ～したと仮定して…
（5）差し迫った要求を、既に実現したことのように言いなして表す。
　Ex: どいた、どいた！
（6）（過去の）期待の実現を表す。
　Ex: ここに切手があった。/ バスが来た。

以上六つの分類の中で、感嘆の「-（タ）モノダ」の静的動詞のタ形に類似するのは、期待の実現のタ形だと思われる。期待の実現のタ形は、いずれも発見のニュアンスを持ち合わせている。そして、属性に向ける感嘆は、元々存在する性質に対して感嘆を表すので、属性に向ける感嘆のタ形は寺村(1984)の分類にしたがうと、期待の実現に近い機能を果たすと思われる。

そして、形容詞は性質を表し、ル形で発話時の「今」を表せるため、感嘆の「ー(タ)モノダ」と共起するとき、タ形になることはない。

これを表にまとめれば、次のようになる。

感嘆の「ー(タ)モノダ」と共起する動詞のテンス			
	非能格動詞・対格動詞	非対格動詞・可能動詞	存在動詞
ル形	超時的・普遍的事実を表す。	超時的・普遍的事実を表す。	超時的・普遍的事実を表す。
タ形	一回限りの事柄を表す。	一回限りの事柄を表す。	超時的・普遍的事実を表す。モダリティを表す「タ形」

以上、動詞のテンス・アスペクトとの共起について見てきたが、次に、感嘆の「ー(タ)モノダ」の特徴として、副詞「ヨク」と助詞「モ」との共起について考察する。

副詞「ヨク」と共起する場合、以下三つの状況が観察される。

(28) 私は {よく / *よくも} 浅草公園へ出掛けて、所在のない時間をつぶしたものです。(『モノグラム』)

(29) きみみたいな人が四年も {よく / よくも} あんなところでしんぼうできたものだ。(『八つ墓村』)

(30) 平面、凸面、凹面、波型、筒型と、{よく / よくも} あんなに変わった形のものが集まったものです。(『鏡地獄』)

(28) は回想を表す例で、「ヨク」は頻度を表す副詞になっている。そして、回想を表す場合、(28) が示すように、「ヨク」は「ヨクモ」に書き換えられない。(29) では、「ー(タ)モノダ」は過去のことに対する感嘆を表し、(30) では、目の前のことに対する感嘆を表している。いずれも「ヨク」は陳述副詞であり、「ヨクモ」に書き換えることができる。

すなわち、「ー(タ)モノダ」という形式は回想と感嘆、二通りの意味に分けられるが、それは、「ヨク」が「ヨクモ」に書き換えることができるかどうかで、回想と感嘆が分かれる。「ヨクモ」に書き換えられるのは、陳述副詞としての「ヨク」のみであり、「ヨクモ」への言い換えは感嘆を表す「ー(タ)モノダ」のマーカーになっている。

また、(31) - (33) が示したように、感嘆の「ー(タ)モノダ」は、「モ」と共起することが多く、中には (31) のように、「ガ」「ハ」に言い換えないものもある。(33) はそのままでは「ハ」に書き換えることはできないが、主語を

「近頃の暴力団」に変えれば、書き換えができるようになる。

(31) 重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。女房{も / ?が/ ?は}年をとったものだ。
(32) 不思議のこと{も / が/ *は}あるものだ。
(33) 近頃は暴力団{も / *は}スマートになったものだ。

つまり、感嘆のモダリティと共起できるのは、「モ」だけでなく、「ガ」「ハ」もできるのである。そして、(32) のような現象文で「ガ」を用いることと (33) のような判断文で「ハ」を用いることはごく自然であり、むしろ「モ」を用いることのほうが考えにくいのである。

澤田（2007）では、感嘆のモダリティを持つ文で現れる「モ」を「感嘆のモ」と称し、沼田（2009）では、これを累加のモの「不定用法」と称し、「モ」と感嘆のモダリティとの共起を累加の意味の基本と関係付けている。以下は先行研究における「モ」の機能と意味の考察を踏まえて、感嘆のモダリティとの共起について検討してみる。

寺村 (1991) では、取立ての「モ」は詠嘆を表す機能を持つと述べているが、何故このような働きを果たせるかまでは言及していない。

澤田（2007）は、とりたて助詞の「モ」について、二つ中心的な意味から、ほかの周辺的意味が生まれていくとしている。その中心的な意味を類似と意外とし、周辺的な意味として感嘆と当然をあげている。以下「モ」の四つの意味の例をそれぞれ挙げておく。

(34) 太郎は歌を歌うし、踊りも踊る。（澤田(2007)）
(35) 普段あまり笑わない花子も笑った。（澤田(2007)）
(36) 交通費ナシで時給 300 円でしょ。学生たちもヤル気なくしますよ。（澤田(2007)）
(37) この財布もずいぶん古くなりましたね。（澤田(2007)）

(34)は類似、(35) は意外の意味を表している。また、(36) は当然、(37) は詠嘆を表すが、この二つの意味は澤田（2007）では、類似と意外の延長線で生まれた使い方とされている。当然と詠嘆の意味は、どうやって類似と意外につながるのか、以下説明する。

(34) は似た概念を並べるときに用いられる。(35) は命題に適合可能の複数の要素の中で、話し手にもっとも適合可能性が低い[7]と判断された要素が適合した場合に、「モ」によってその要素が適合要素の範列に入ることを示し、それと同時に、適合可能性の低さから来る意外のニュアンスも表すのである。

[7]澤田（2007）では、適合可能性を EXPECT 値と称している。

（36）は命題内容自体が成立の可能性が低く、非日常的な出来事であり、それが条件の付加で、成立の可能性が高くなり、意外性が当然性に変わる。

そして、（37）のように感嘆を表す用法は「ある種の驚き」と「通念との類似」が同時に「モ」によって表現される。すなわち、時間がたてば、ものは古くなり、壊れていくが、その財布もその通念に当てはまることを「モ」によって示す。同時に、そのことに気づいたのは、発話時のときであり、改めて認識したことに伴う「ある種の驚き」の感情も表すのである。

さらに、「モ」によって表される詠嘆は、澤田（2007）では、「モ」そのものによって表されるのではなく、文末のモダリティや発話環境にも関わると考え、詠嘆性の解釈可能の条件として、属性付与、状態変化、属性変化と三つ上げている。それぞれ例を挙げると、次になる。

(38) お前も馬鹿だな。(属性付与)　（ 澤田(2007)）
(39) 夏も終わりですね。(状態変化)　（ 澤田(2007)）
(40) 王もついに 756 本うったね。(属性変化)　（ 澤田(2007)）

例を見ると、確かに澤田(2007)が指摘したように、(38)は話題人物に新たな属性を付与し、（39）は季節の移り行きを述べ、(40)はホームランの世界記録を作ったことによって、王貞治に「偉業を成し遂げた人になる」という属性変化が起こる。そして、文中に感嘆のニュアンスが読み取れる。

そのほかに、沼田（2009）は、取立ての「モ」をモ$_1$とモ$_2$に分けて、それぞれ「累加」のモ$_1$と、「意外」のモ$_2$と称し、(38)―(40)のように感嘆を表す「モ」は累加の「モ」の不定用法としている。

そして、文の叙述内容で読み取れるものを「主張」、取立て詞「モ」で含まれた暗示の内容を「含み」と名づけて、モ$_1$とモ$_2$の意味を（41）のように分析している。

(41) 「モ$_1$」：主張：断定・自者―肯定
　　含み：断定・他者―肯定
　　二次特徴：「含み」は前提
　「モ$_2$」：主張：断定・自者―肯定
　　含み：想定・他者―肯定/自者―否定

累加の「モ$_1$」は、(42)のように、自者の「手」が命題の成立に当てはまることを肯定し、同時に自者のほかに、命題に当てはまる他者もあることを暗示する。

(42) (足の動きにあわせて、)自然に手も動かしている。　（沼田(2009)）

意外の「モ$_2$」は、主張においては累加の「モ$_1$」と同じく自者が命題に当てはまることに肯定を示すものであるが、含みのところでは累加の「モ$_1$」と異なって、話し手の想定を表すのである。

例えば、(43) では自者は親で、他者は身内以外の人と考えられる。話し手は、話題人物の行いには身内以外の人はあきれるかもしれないが、親だけはそれを大目に見て許してしまうと予想していた。つまり、話し手の予想においては、他者が「愛想尽かす人」に当てはまることは肯定されるが、自者が当てはまることは否定されていた。だが、事実にその自者も命題に当てはまったので、話し手の想定と反したことによって、意外の気持ちが生まれる。

(43) (彼の放蕩ぶりには)親も愛想を尽かした。 (沼田(2009))

一方、「モ$_1$」の不定用法は、(44) のように、他者が想定しにくい場合を指す。この場合は沼田 (2009) が指摘したように、他者は文脈に応じて焦点が変化する。

例えば、(45) では、他者は「先生」以外の誰かを想定することができる。同時に、「時間の経過を思わせるさまざまなこと」を想定する場合も考えられる。言い換えれば、沼田 (2009) で言う他者は文単位のものも入っているのである。Kuroda(1965)では、このような文単位の他者を「影の文」(shadow sentences) と称している。もうひとつ例を挙げると、(46) になる。

(44) 春もたけなわになりました (が、お変わりなくお過ごしですか。) (沼田 (1995))
(45) 先生もずいぶん髪が白くなられましたね。 (沼田(1995))
(46) 酒も飲んだし、次は何をしようか。 (作例)

また、このような不定用法の機能について、沼田 (2009) は談話の視点から考え、後に続く文を発話するための「背景作り」をする機能を果たすものが多いと指摘している。そのほかに、他者を明示しないため、話し手と聞き手が異なる他者を想定する可能性があるが、話し手はそれを問題にしない。むしろ、話し手は聞き手に、聞き手なりの「他者」の想定を委ねていると述べ、不定用法に伴う詠嘆や含蓄的表現のニュアンスはこうしたことから来るものと推測している。

以上から分かるように、取立ての「モ」はいくつかの用法が取り上げられるが、それぞれの用法につながりを持ち、主に累加 (類似) の用法を中心に発展されたともいえるだろう。

澤田 (2007) は「モ」に詠嘆を表せるのは、文脈によるものと考え、「モ」を詠嘆と解釈可能な場合を分析し、属性付与、状態変化、属性変化と三つまとめている。

沼田（2009）は詠嘆の「モ」は累加の「モ」の周辺的用法と考え、不定用法の「モ$_1$」と名づけた。そして、その機能について、背景作り、詠嘆、含蓄的表現と指摘している。

感嘆の「-（タ）モノダ」と共起する「モ」は、沼田（2009）が指摘した「モ$_1$」の不定用法と分かったが、その理由については以下のように考えられる。

ひとつは機能からの共起である。「モ」は「-（タ）モノダ」と同じく、感嘆を表す機能を持つため、感嘆文の場合においては両者の共起が多くなる。

また、もうひとつの場合は、用いられる文脈が重なっているためである。澤田（2007）の指摘を踏まえれば、「モ」は属性付与、状態変化、属性変化、この三つの文脈において、詠嘆と解釈可能となる。また、「-（タ）モノダ」もこの三つの文脈でよく用いられる。それに対して、「ハ」は題述や断定を表すが、「モ」であらわす他者との類似関係を表すことができないため、叙述内容のほかに思わせるいろいろな事柄に伴って生まれた詠嘆の気持ちを表すには、「モ」の存在が必要となる。そのため、感嘆の「-（タ）モノダ」は「モ」と共起することが多いのではないかと思われる。

4.3　「コト」「ー(タ)モノダ」の言い換えについて

つぎに、感嘆を表す「ー(タ)モノダ」と「コト」を比較したい。例文から分かるように、「ー(タ)モノダ」と「コト」の言い換えは、例文によって可能になる場合がある。また、「？」マークがつけた例は、括弧の内容を省けば、言いかえが可能になる例である。

(47) よくもこの代々の法華宗の家へ、娘がほしいなんて申し込めた{ものだ /こと。}　（『太宰治全集』）

(48) 同居してはや３年、月日のたつのは早い{ものだ /こと。}　（毎日新聞 2000.7.19）

(49) （近頃は暴力団も）スマートになった{ものだ /？こと。}（『名のない男』）

(50) （これは）面白くなってきた{ものだ /？こと。}　（『放浪記』）

(51) （我ながら、）この暗い中をよくここまで走って来た{ものだ /？こと。}　（『悲歌』）

(52) （実に）凄い化学品が出て来た{ものだ /？こと。}　（『黒い雨』）

(53) 介護保険料を老齢年金から天引きとは、なかなか考えた{ものだ /？こと。}　（毎日新聞 2000.8.24）

(54) お父さんも年をとった{ものだ /こと。}　（作例）

構文から見ると、「コト」を用いる制限が観察できる。（49）以降の構文は、「こと」に言い換えることができないが、括弧の内容を省略すれば言いかえが

可能になる。まず、「コト」を用いるには、(50)のように、主題がなく、題述文にならない。その理由は次のように考えられる。

現象文は話し手が目の前にある情景を述べるときに使う文である。現象文では主語のところは「は」ではなく、「が」で表現される。そして、感嘆の「コト」は即時的な感嘆を表すため、「が」で表現される現象文と共起しやすいのだと考えられる。

また、(52)(53)で現れる「実に」「なかなか」などの評価副詞は、次の分析から、「コト」と共起しにくいことがわかる。

「実に」は(55)が示すように、食べた瞬間に即時的な評価を表すのではなく、時間を置いて吟味する反省的な評価を表すのである。また、「なかなか」も(56)が示すように、なかなかをつけ加えると、修飾対象のみを見て出された評価ではなく、話し手自身の予想と比較した上で出された評価だとわかる。反省的な評価と予想と比較する評価は、体験時に体験の事柄に刺激されて、さらに時間を置いて吟味したり、自分の予想に影響された後で出された評価なので、即時的に出せない評価副詞であることがわかる。ゆえに、反省的な感嘆を表す「ータモノダ」と共起するが、より即時的な感嘆を表す「コト」とは共起しにくいのである。

(55) 息子たちが就職、大学と家を出てから、夫婦の食生活が変わった。
まず、肉や脂っこい料理が減る。野菜や魚を中心とするシンプルな料理が目立って多くなった。「イモのつるをもらった」と、ひき肉、油揚げを混ぜた総菜をつくる。温かいごはんにのせて食べると実にうまい。(毎日新聞 2000.12.5)

(56) 自民党は{なかなか / φ}面白い問題提起をした。(毎日新聞 2000.4.3)

そして、(54)で示したように、「ー(タ)モノダ」は性別に関わらず男性も女性も使えるが、「コト」は日本語記述文法研究会(2003)で指摘したように、女性が用いることが多い。

さらに、「ー(タ)モノダ」と比べて、「コト」を用いる場合は、外部にある事柄や情報に刺激に対する即時的な反応であるのに対して、「ー(タ)モノダ」を用いる場合は、外部の刺激を時間を置いて、吟味、反省した場合に用いられるのである。そのため、「コト」は状況が目の前に展開されているときに用いられることが多く、「ー(タ)モノダ」は発話時に事柄が目の前になくても用いられる。

そのほかに、(49')(54') から分かるように、「コト」「モノ」だけでなく、終助詞を用いて感嘆を表すこともできる。

(49') 近頃は暴力団もスマートになったな。
(54') お父さんも年をとったな。

しかし、終助詞を用いる場合は、より現場に近く、より即時的な表現になる。

したがって、本節で考察した感嘆文をもっとも即時的なものから反省的なものへ順に並べると、(57)になる。

(57) 装定文・形容詞の一語文・感嘆の動詞文->コトの感嘆文->「ー(タ)モノダ」の感嘆文

國立政治大學
National Chengchi University

第五章　当為をあらわす「モノ」「コト」

5.0 はじめに

命題で述べられる行為は望ましいものであると示すモダリティは当為と呼ぶ[8]。「コトダ」「モノダ」は両方とも当為のモダリティを表す形式だが、意味の違いが伺える。以下は両者の違いを分析し、それを通して形式名詞「モノ」「コト」の性質を探ることを試みる。

そのほかに、「モノカ」は当為を表さないが、当為の「モノダ」と同じ基本を持つため、本章の考察対象に入れることにする。

5.1 当為を表す「モノダ」

寺村(1981)では、当為を表す「モノダ」を本質を表す「モノダ」と連続性を持つとし、以下のように指摘している。

「一般的な心理のようにある対象の本性を述べる、という言い方は、その対象のあるべき姿、自分が理想と考えるあり方の主張にしばしば移行する。」

それは、(1)(2)の例文でよく伺える。

(1) 女というものはね、おしのちゃん、自分のためには何もかも捨てて、夢中になって可愛がってくれる人が欲しいものよ。 (寺村 1981)

(2) 女は男から好かれ、男から惚れられるものよ。
菊次はそういう。女のほうから惚れると必ず苦労する、相手のよしあしにかかわらず、男には決して惚れるものではないというのである。(寺村 1981)

(1)では、話者は女の本質を相手に教えようとしている。同じ構文で、(2)では、話者は女のあるべき姿を述べているか、本質を述べていると二通りの解釈ができるようになる。

そして、(2)に出てくる「ものではない」は、明らかに命題内容が望ましくないことを示している。すなわち当為を表すモノダの否定形である。同時に、それは(2)における一番目の本質・あるべき姿を述べる文から導き出された結論でもある。したがって、以上三つの文から、「モノダ」における本質から理想の姿への移行が観察される。

次に、当為を表す「モノダ」の形式を考察したい。

[8] 野田（1995）は当為的な用法について、行為の実行が望ましいということを表すと述べている。

まず、否定形についてだが、(2)が示したように、その行為が望ましくないことを表す場合、否定は「モノデハナイ」となる。だが、(3)のように、「ナイモノダ」の形式も存在する。両者はどう違うだろうか。

(3) a．結婚したら、女は働くものではない。（作例）
　　b．結婚したら、女は働かないものだ。

(3 a)「モノデハナイ」は当為の否定を表し、その行為は不適切であることを示すものである。一方、(3 b)「～ナイモノダ」は性質(本質)を表し、性質自体に否定のものが含まれるのである。

そのため、(3 a) は「女は、結婚すると働くべきではない、働いてはいけない」になるが、(3 b) は「女は結婚すると働かない傾向がある、働かなくなるのがほとんどである」になる。

概略にいうと、「モノデハナイ」と「～ナイモノダ」は以上のように分析できるが、実際両者は意味が重なるところがあって、その両形式が表す意味は動詞の分類にも関わっている。

次のような例を見てみよう。

(4) いくらコーヒー好きとはいえ、これだけのコーヒーを一人で飲みきれるものではない。（世界の終わり）
(5) 部落に対する呼称をどのようにかえようとも、それでもって差別が消え去るものではない。（『破戒』）
(6) どんな医療ミスでも許されるものではありません。（毎日新聞 2000.9.5）
(7) 男は人前で泣くものではありません。（『文型辞典』）
(8) 余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。（『よだかの星』）

(4)-(8)は「モノデハナイ」の例である。例文からわかるように、「モノデハナイ」は意味が「性質」と「当為」と二通り分けられる。(4) - (6) は述語が非対格動詞、受身など状態性動詞になって、「性質」を表す例である。(7) (8) は述語が対格動詞と感情動詞の例で、「当為」を表している。つまり、ここで観察できるのは「モノデハナイ」において、動詞の性質と「モノデハナイ」で表す意味が緊密に関わって相補分布をなしていることである。

相補分布をなすポイントは話し手のコントロール性にある。対格動詞、可能動詞、受身など静的な動詞は状態を表し、話し手はそれを自分の意志によって、積極的に状況を変化させたり、変えたりすることはできないため、「性質」を表すことができるが、「当為」を表すには動詞の意味上難しくなる。それに対して、対格動詞、非能格動詞は行為を実行するかどうかは話し手の意志で決められるので、当為を表すことができる。

一方、「泣く」「興奮する」などのような感情動詞と生理動詞は話し手の意志によってコントロールすることが難しいと思われるが、何故（7）は当為を表すことができるのだろうか。それは、外的な行動はある程度人によってコントロールできるからである。

外部の要素に刺激され、人間の内部に感情が生まれる。そして、時には笑う、泣くなど外部に観察できる反応を取る。だが、自分を落ちづかせたり、泣かないように努力したりすることができる。そのため、感情動詞や生理動詞で当為を表す場合、それは外部に見られる反応について、とるべき努力や行動について、主張するのである。

次に「～ナイモノダ」の例について見る。

(9) 人間、あんまりおどろくと、即座にからだが動かないものだ。（『丹下左膳』）
(10) 実の親子の情は、さすがに争われないものだ。（諸国噺）
(11) 筋とは何だ。世の中は筋のないものだ。筋のないもののうちに筋を立てて見たって始まらないじゃないか。（『写生文』）
(12) 役人というのは、そこまでは考えないものだ。（『冬の旅』）
(13) 水夫は、必ずジャックナイフをからだから離さないものだ。（十五少年）

（9）-（12）は「性質」を表す例で、（13）は当為を表す例である。例文からわかるように、「～ナイモノダ」は「モノデハナイ」のように、動詞の分類によってきれいに相補分布を成してはいない。「性質」を表す例に、述語の動詞の種類は実に豊富で、対格動詞、非対格動詞、受身、存在動詞など、特定の動詞分類に絞ることはできない。だが、当為を表す例が少なく、ほとんど対格動詞の例のみが観察できる。すなわち、それは「～ナイモノダ」は「性質」を表す傾向があるのではないかと思われる。そうすると、先に述べた、「～ナイモノダ」は主に性質を表すことはひとつ証拠付けられたとも考えられる。

さらに(14)(15)もう二つの例を挙げて、「モノデハナイ」「～ナイモノダ」におけるもうひとつの性質の違いを考察したい。

(14) 片道切符をつかまされた人間は、決してそんな歌い方など{*するものではない /しないものだ}。（『砂の女』）
(15) 水夫は、必ずジャックナイフをからだから{*離すものではない / 離さないものだ}。（十五少年）

(14)(15)は「モノデハナイ」が用いられず、「～ナイモノダ」のみが用いられる例である。それは副詞「必ず」「決して」の存在があるからである。もし(14’)(15’)のように、この二つの副詞を取り除けば、「モノデハナイ」「～ナイモノダ」両方とも使えるようになる。

(14’) 片道切符をつかまされた人間は、そんな歌い方など{するものではない/しないものだ}。

(15’) 水夫は、ジャックナイフをからだから{離すものではない / 離さないものだ}。

「決して」の場合は命題の中に否定の「ない」までかかるが、(16 a) が示すように、「～ナイモノダ」は「モノダ」がモダリティを担い、「ナイ」は命題の中に入っているため、文は問題なく成立する。しかし、(16 b)となると、否定の「ない」は命題の外側に位置し、副詞「決して」との間に隔たりがあるため、非文となるのである。

(16) a. [片道切符をつかまされた人間は、決してそんな歌い方などしない]ものだ。

b. *[片道切符をつかまされた人間は、決してそんな歌い方などする]ものではない。

そして、「必ず」の場合、述語は否定形に限定しないので、「離す」のままでもいいはずだが、問題は(17 a)が示すように、命題の中ではジャックナイフを離すことを「必ず」を使って肯定を強調しているにもかかわらず、外側のモダリティでは離すことを不適切だと指摘し、混乱が起きているのである。そのため、(17 a)は非文となる。(17 a)を正しい文にするには、(15’)のように「必ず」を取り除くほかに、(17 b)のように、モダリティを肯定の形に変えて矛盾を解消するのも方法のひとつである。

(17) a. *[水夫は、必ずジャックナイフをからだから離す]ものではない。

b. [水夫は、必ずジャックナイフをからだにつける]ものだ。

以上当為を表す「モノダ」の否定形について見てきたが、次に、肯定の場合についても見てみたい。

(18) 病院では静かにする{ものだ / *もの}。

(18)で示すように、肯定の場合、「モノダ」は「ダ」を取り除いて、モノだけを残しては、当為を表すことができない。また、野田(1995)でも指摘したが、当為の「モノダ」は(19)のように、タ形になったら、過去の性質を表すことができるが、過去においてその行為は望ましかったという意味は表さない。

(19) 女は家にいるものだった。だが、女は働かずに家にいることは、労働力の半分を犠牲にしていることに意味する。少子化が進む中で、半分の労働力を放置できなくなったか、政府は女性に社会に出て働くことを勧めるようになった。 (作例)

何故当為を表す「モノダ」はタ形にならないのか、それは野田(1995)で述べ

たモノだにおける行為の促し方に関係している。

野田(1995)では、(20)のように、三段論法を用いて当為を表す「モノダ」の行為の促し方を分析している。

(20) a．祭りの前の晩は早く家に入るものだ。・・・・・・・・・・・・ 大前提
b．今は祭りの前の晩だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小前提
c．今、聞き手は早く家に入ることが望ましい。・・・・・・・・・・ 結論

だが、性質を表す「モノダ」と当為を表す「モノダ」との繋がりがはっきり現れるように、野田（1995）の三段論法を次のように修正する。

(21) a．祭りの前の晩は早く家に入るのが常識だ。・・・・・・・・・・ 大前提
b．今は祭りの前の晩だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小前提
c．今、聞き手は早く家に入ることが望ましい。・・・・・・・・・・ 結論
> 祭りの前の晩は早く家に入るものだ。

（21）でわかるように、当為の「モノダ」は、話し手が思う社会の一般的規則、一般的認識を表す。そして、それを背景にして、このような状況下で、聞き手はその行動を取ることが社会の一般的認識に相応しいと伝え、相手の行為の実行を促すのである。言い換えれば、当為の「モノダ」は、本質の「モノダ」を前提にして、初めて当為を表せるのである。

ここで、「モノダ」のタ形が当為を表さない原因を説明する。当為の「モノダ」は先に述べたように、本質の「モノダ」を前提におき、発話時の状況が前提に当てはまり、聞き手もそこに当てはめようとして、そこから当為の意味が生まれる。

一方、「モノダ」のタ形は過去の性質を表せるが、三段論法の二段階目が示すように、当為へと繋がるために、発話時の状況は前提と関わる必要がある。しかし、「モノダ」はタ形で表されると、過去の性質を表すようになり、発話時の状況はそこに当てはまる必要がなくなり、聞き手を過去の性質に当てはめる必要もなくなるので、聞き手の行為の実行までは働かなくなる。そのため、当為の意味も生まれなくなる。

ゆえに、当為の「モノダ」はタ形を持たないのである。

また、否定形「モノデハナイ」「～ナイモノダ」が目の前の聞き手を意識して発話された場合、聞き手への働きかけを三段論法で分析すると、聞き手への働きかけは少し違うことがわかる。

(22) a．女は結婚したらと働かないものだ。・・・・・・・・・・・・・・大前提
b．聞き手は女性だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小前提

c．聞き手は働かないことが望ましい。・・・・・・・・・・・・・・・結論

(23) a．女は結婚したら働くものではない。・・・・・・・・・・・・・・大前提
b．聞き手は女性だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小前提
c．聞き手が働くことが望ましくない。・・・・・・・・・・・・・・・結論

(22)は「～ナイモノダ」を用いて大前提で望ましい性質を示し、聞き手の行動を促そうとして、基本的に肯定の場合と同じ構造を持つ。ただ、その理想の性質の中に、否定のものが入っているため、行動の停止か不行動が望まれるのである。一方、(22)は大前提でその行為は望ましくないことを指摘し、聞き手に行動の停止を要求する。

そして、文全体が肯定の形式でまとまった（22）と違って、（23）は文全体が否定の形式でまとまっている。否定の表現は肯定に対して、有標であり、それを持って行動の不適切を示すと、話し手の強い主張が感じられ、場合によっては、相手の行動を責めるニュアンスも感じ取れる。そのため、「～ナイモノダ」と比べて、「モノデハナイ」はより禁止に近い働きを持つ。

以上の考察をまとめて、当為を表す「モノダ」の性質を分析すると、次の通りになる。

当為を表す「モノダ」について、寺村（1981）では、「ある対象（モノまたはコト）の本性を述べる、という言い方は、その対象のあるべき姿、自分が理想と考えるあり方の主張にしばしば移行する。」と指摘されている。

野田（1995）では、話し手は行為の実行を一般的な通念と考え、間接的に当該の場面で聞き手の行為の実行を促すと述べられている。そして、当為を表す「モノダ」はタ形にならないとも指摘している。

そこで、本章は否定形の「モノデハナイ」「～ナイモノダ」について検討し、「モノデハナイ」は前節動詞が意志動詞なのか、非意志的動詞なのかで、意味の相補分布をなしている。意志動詞の場合は当為の否定を、非意志動詞の場合は性質の否定を表すとわかった。一方、「～ナイモノダ」の場合、動詞の種類を問わず、性質の否定を表す傾向が強いともわかった。

また、寺村（1981）では性質を表す「モノダ」はしばしば当為の意味に移行すると述べているが、本章では、その行こうの条件を明らかにした。すなわち、性質の叙述が当為の主張に変わるのは、主語が二人称か、聞き手が総称の三人称に当てはまる場合である。

また、野田（1995）が指摘したように、「モノダ」は間接的に当為を表す。そのため、(24)のように、性質と当為、文脈によって両者いずれかに解釈可能な例が存在する。

(24) a．重病人は、新聞くらいで、そんなに興奮したりするものではない。今は心を安らかにして、ゆっくり病気を治すのが肝心だ。

b．重病人は、新聞くらいで、そんなに興奮したりするものではない。そんなことしたら、仮病がばれるじゃないか。気をつけよう。　（作例）

5.1.2　否定疑問を表す「モノカ」

ここで反語形式による否定疑問を表す「モノカ」についてみたい[9]。何故当為を表すモノを考察するところに、否定疑問を入れるのか、それは両者が共に性質を表す「モノダ」を基本にしていると考えられるからである。

(25)「いけない、いけない。帰る、帰る。」
「歩けるもんか。大雨だよ。」
「跣足で帰る。這って帰る。」
「危いよ。帰るなら送ってやるよ。」　（『雪国』）

(26)「ほんとですか」
「ほんとか、嘘か。来てみるまでわかるもんか。」　（『野火』）

(27)「あんまり病人の側にばかりいないで、少しは散歩くらいなすっていらっしゃらない？」
「この暑いのに、散歩なんか出来るもんか。……夜は夜で、真っ暗だしさ。……それに毎日、病院の中をずいぶん往ったり来たりしているんだからなあ」　（美しい村）

（25）は「常識で考えると、大雨の中では歩けない」という話し手の考えを裏に持っている。（26）は「一般に考えると、本当か嘘か、実際に見て確かめるまではわからないものだ」という常識判断を裏に含まれている。（27）は「常識で考えると、こんな暑い天気では散歩はできない」という背景的意味を含まれている。（28）は「常識で考えると、これは素人に変にいじられないものだ」という話し手の考えが含まれている。

すなわち、否定疑問の「モノカ」は社会常識に基づいて、相手の意見や事柄の成り行きを不合理と判断し、疑問の形をとって、否定を表すのである。

また、「モノダ」は基本的意味が性質を表すのに対して、疑問形の「モノカ」「モノデスカ」が否定疑問を表すのは、相手の意見や事柄の成り行きが話し手自身の持つ社会常識に反するため、反対の意志が生まれ、性質を表す「モノダ」を疑問形にすることで、反語形式になり、常識に反することを相手に訴えるのである。

疑問否定を表す「モノカ」が性質に基づいていることは、（25）-（28）は次

[9] 日本語記述文法研究会（2003）では、「モノカ」について、反語を表す形式と指摘している。だが、ほかの「モノ」を含む表現との繋がりがあるかどうかについては言及していない。そこで、本稿は「モノカ」を「モノダ」の疑問形と考え、両者の繋がりを本節を通して指摘したい。

のように、肯定形か否定形に書き換えると、性質を表す文になることから伺える。

(25’) a．大雨の中では歩けないものだ。
　　b．大雨の中では歩けるものではない。
(26’) a．ほんとか、嘘か。来てみないとわからないものだ。
　　b．ほんとか、嘘か。来てみるまでわかるものではない。
(27’) a．この暑いのに、散歩はできないものだ。
　　b．この暑いのに、散歩なんか出来るものではない。

したがって、性質を表す「モノダ」を基本にして、その形式と「ダ」の活用で表す意味は次のようにまとめられる。

(28) 肯定形「モノダ」:　　性質　＞　当為
　　否定形「モノデハナイ」:　性質　＞　当為
　　疑問形「モノ（デス）カ」:　（性質）　＞　否定疑問、否定の強調

また、「モノカ」は次のように、人称を入れる場合もある。

(29) 「縁談？　……ふむ、そりゃあまあ、当り前だろうな」と賢一郎は皮肉な言い方をした。
　　「あら、どうして笑うの」
　　「笑わないよ」
　　「笑ったじゃないの。失礼ね」
　　「それで、君は行くつもりかい」
　　「誰が行くもんですか。わたしまだ十八よ」　　（『青春の蹉跌』）
(30) 昔と今とは違うんだよ、と僕はゆっくり、その肩に手を置いたまま話し出した。昔は僕だって若かったし、世の中のことは何にも分らなかった。僕は夢中になって生きていたし、世界というのはそういうもの、憎悪も残酷も無慈悲もなくて、愛さえあれば足りるものと、そう思っていたんだ。今は違う、今は、僕の世界と外部の現実とはまったく別のものだということが、僕にははっきり分っている。(略)こんな野蛮な、無智な、非人間的な戦争なんて、誰が悦んで参加するものか。　　（『冬』）

人称を入れる場合、「モノカ」は社会常識に基づく裏に意味もなくなり、反語を表す機能だけが残っている。

たとえば、(29)(30)は次のよう否定の意味を裏で読み取れるが、社会常識に基づいたものとは限らない。

(29’) 誰も行かない。だから、私も行かない。

(30’) 誰も悦んで参加しない。だから、私も参加しない。

したがって、以上からわかるように、「モノカ」は、性質を表す「モノダ」を基本にして、否定疑問を表すとわかる。そして、人称が入らない場合は、叙述内容が社会常識に反して生まれた反問を表すが、人称が入っている場合は、社会常識に基づくというニュアンスが薄くなり、機能的意味だけが残り、裏の否定を表す反語をあらわすようになるのである。

5.2 当為を表す「コトダ」

つぎに、「コトダ」について考察する。
当為を表す「コトダ」は、 (34)のようなものである。

(31) 若し君等が日本の思想の一隅に棲みたいといふのであれば、先づ第一にもつと行儀をよくすることだ。 (『小熊秀雄全集』)

ある特定の場面において、あるいは特定の事象に臨んで、話し手にとって一番望ましい処置を述べるのが「コトダ」である。
そして、これは（34’）が示すように、ノダ、「ベキダ」に書き換えることができるが、「モノダ」に書き換えることはできない。

(31’) a. 若し君等が日本の思想の一隅に棲みたいといふのであれば、先づ第一にもつと行儀をよくするべきだ。
b. 若し君等が日本の思想の一隅に棲みたいといふのであれば、先づ第一にもつと行儀をよくするのだ。
c.* 若し君等が日本の思想の一隅に棲みたいといふのであれば、先づ第一にもつと行儀をよくするものだ。

同じ当為を表す形式として、「コトダ」と「ベキダ」と「モノダ」はどう違うのだろうか。また、(34）に限らず、「コトダ」を「ノダ」に書き換えられる例は少なからず存在する。では、「ノダ」と「コトダ」に共通する特徴と相違はどんなものなのだろうか。また、「コトダ」に意味的にも、統語的にも似ている形式として、コトもあげられるが、何故ほとんどの場合、「コト」と「コトダ」は言い換えられないのだろうか。
以下は「コトダ」とコト述語文との比較から「コトダ」の統語的性質を見出し、「ベキダ」、「ノダ」、「モノダ」との比較から「コトダ」の意味的性質を見出す。さらに、「コト」とも比較して、類似する両形式の意味の違いを明らかにする。

5.2.1 「コトダ」とコト述語文

(32)-(35)のように、形式名詞コトが文末に位置して、名詞化の機能を果たし、節を名詞化させる文をコト述語文と呼ぶことにする。

(32) Ｇ７に集まった各国通貨当局者の仕事は、世界経済の運営をスムーズに進行させることによって、自国経済にメリットをもたらすことだ。（毎日新聞 2000.1.24）

(33) なによりぼくが考えなくちゃならなかったことは、ぼくの寿命が限られていることだ。（『楡家の人びと』）

(34) 訴訟を通して分かったことは、米国の資本主義を支える二つの基本精神が一貫して流れていたことだ。（毎日新聞 2000.6.9）

(35) こうした警察庁自身による改善策は当然としても、それとは別に「行政監察」という視点からチェックを加えることは意味のあることだ。（毎日新聞 2000.1.17）

例文(32)-(34)が示すように、コト述語文はコトの前に来る品詞に特に制限はないが、統語構造に制限がある。それは、(35) との比較からわかる。

(35)は、一見(32)-(34)と同じ構造を持っているように見えるが、コトと前に来る節は内の関係で繋がっている。つまり、文末のコトはもともと連体修飾節の中で文を形成する要素のひとつであり、連体修飾節に戻すことが可能なのである。その場合、コトは形式名詞の機能を果たすより、実質名詞に近い役割を果たしている。

(35’) 意味のあることだ。→ こと（事）に意味がある。

それに対して、(35)-(37)ではコトと連体修飾節は外の関係で繋がり、いずれもコトを連体節に戻すことができず、連体節自体で意味が完結している。

もう一組、名詞の場合の例文を見る。

(36) 問題はそのオーストリアもＥＵの一員であることだ。（毎日新聞 2000.3.1）

(37) 「２０００年度を循環型社会元年とする」。自自公の与党３党が、そう合意したのは昨年秋のことだ。（毎日新聞 2000.1.22）

名詞の場合、両者の違いはさらにはっきり現れてくる。(36)はコト述語文の例だが、コトと連体節は外の関係にある。そのため、コトを連体節に入れることが不可能である。それに対して、(37) は内の関係の例であり、普通名詞とコトは、助詞ノで繋げられ、コトは名詞化を果たす形式名詞ではなく、実質名詞として「事柄」という意味を表している。

一方、当為を表す「コトダ」は、望ましい処置の仕方を持って、相手の行動を促すため、コトだの前に来る品詞は動詞に限り、そして状態を表す非対格動詞、可能動詞など、行為者の意志でコントロールできない動詞が「コトダ」の前に現れることもない[10]。

また、当為はまだ起きていないこと、非実行のことに対するものなので、(38)が示すように、「コトダ」は動詞のテイル形とタ形に接続しない。明確な主語も見当たらない。

(38) ともかくも若い間は行動｛する / *した / *している｝ことだ。
めったやたらと行動しているうちに機会というものはつかめる――と、亡き道三は光秀に語ったことがある。 (『国盗り物語』)

そして、統語構造から見て、コト述語文では、コトが命題に含まれ、断定助動詞ダは、活用して否定になったり、後にモダリティを付け加えることができるが、当為を表す「コトダ」は命題の外に置かれ、モダリティを担うモダリティ形式になったため、否定形にしたり、疑問形にしたりすることができない。そして、終助詞以外に、ほかのモダリティ形式を付け加えることもあまりできないようである。

(36’) a. 問題はそのオーストリアもＥＵの一員であることではない。
b. 問題はそのオーストリアもＥＵの一員であることですか。
c. 問題はそのオーストリアもＥＵの一員であることだそうだ。
(38’) a. *ともかくも若い間は行動することではない。
b. *ともかくも若い間は行動することですか。
c. *ともかくも若い間は行動することだに違いない。
d. ともかくも若い間は行動することだね。

ここで、コト述語文、「コトダ」の例をみて、その中間的なものの例を探りたい。

(39) 人間、何をやってもいいんだ。一番大事なことは、まっすぐに生きることだ。 (『路傍の石』)

(40) 明日こそ、明日こそこれをすっかりたて直し、手当てを加え、修正しなければ、そして要は――あの鼻もちならぬ青二才を抹殺して、病根をたつことだ。 (『罪と罰』)

(41) 「てめえが食うものもわからねえような奴はけえれ！この朝鮮人野郎！」こんな場合常連の客である事を示すためには、嬉しそうな高笑いをあげ

[10] 寺村（1984）では、動詞の制限について、意志的な行為を表す動詞の基本形に限られると述べている。

て、「まあまあ」と手で制しながら、「きびしいからなあ、この店は」と、連れに囁けばよかった。そうでなければ、むっと押し黙ることだ。

だが、いずれにせよ、その親父は許さなかった。客が下手に出ようと、上手に出ようと、更にサディスティックな追い討ちをかけてくる。(『風に吹かれて』)

(42) ともかくも映画を見ておこうと考えて、彼はホテルを出た。そのあとで映画の所感を手紙に書いて送るのだ。しばらく康子との接触を続けて行こう。しかしあの気位の高い女は、なにか機会を見つけては男を軽蔑しようと考えているらしい。軽蔑されないためには、威厳をもって接することだ。当分のあいだ、求愛の言葉などを用いてはならない。(『青春の蹉跌』)

(39)(40)はコト述語文で、「大事・必要なのは～ことだ」という構造になっていて、当為をあらわす「コトダ」と構造が違うが、文に[大事だ・必要だ]という意味が含まれているため、当為を表す「コトダ」とコト述語文との中間的なものになっている。(41)(42)は「コトダ」の例で、「{命題}コトダ」という構造になって、明確な主語は存在しない。

(39)-(42)この四つの例文にひとつ共通する特徴がある。それは、叙述内容が必要・重要だという判断である。(39)(40)は文脈から、必要・重要に同様な語彙を持っているが、(41)(42)はそのような語彙を文に含んでいない。だが、次のように書き換えることができる。

(41’) こんな場合常連の客である事を示すためには、むっと押し黙ることが必要だ。

(42’) 軽蔑されないためには、威厳をもって接することが必要だ。

これは寺村(1984)では「コトダ」は「ことが必要だ」を端折った言い方であると述べられている。すなわち、「コトダ」は必要であるという意味を内包して、モダリティ形式になったのである。

ただ、「ことが必要だ」が「コトダ」になると、文脈から読み取れるように、「必要」という語彙がなくなることで、いっそう話し手の主観が強くなる。その証拠に、(41”a)は客観性を表す「と思われます」を付け加えることができるが、(41”b)は「と思われます」を付け足すと、違和感が生じる。

(41”) a. こんな場合常連の客である事を示すためには、むっと押し黙ることが必要だと思われます。

b.? こんな場合常連の客である事を示すためには、むっと押し黙ることだと思われます。

主観の強化は「コトダ」で表す当為の構造とも関係しているが、これについては、後で述べることにする。ここでまず「コトダ」で表す意味について分析したい。

当為表現を表す「コトダ」は、次のような例がある。

(43) おれは学校騒動には加担しない。現実を大事にし、自分の立場を大事にしなくてはならない。これはエゴイズムではない。社会人としての当然の義務でもある。とにかく今年のうちに司法試験に合格することだ。そこからおれの未来は開ける。そしてこの資本主義社会のなかに一つの足場を築くのだ。そこで始めておれの発言権が認められ、社会を動かす実力が備わってくる。 (『青春の蹉跌』)

(44) 加藤はそういう自分の声を聞いた。
「いや加藤、眠ることは死を意味する。きさまの下半身はすでに凍傷になりかかっている。歩くことだ。動いているうちは、お前の身体に血が流れる。だが休んだら凍る。一度停止したエンジンを動かすことは困難だ」(『孤高の人』)

(45) 豊かな日本をつくるには、日本人がバックボーンをもった、個性ある人間になることだ。 (毎日新聞 2000.2.9)

(46) 解雇や一方的な労働条件の切り下げも増え、働く人々にとっては受難の時代を迎えた。雇用形態も働き方も大きく変わってきた。労組の出番なのだ。なのに、労組だけはタコツボにひたすら閉じこもり、旧来の発想のまま既得権にしがみつこうとしているようにみえる。これでは労組は存在価値を失ってしまう。
メーデーは１日８時間労働制を求めたアメリカのシカゴの労働者のデモから始まった。その原点に立ち戻り、労組が、働く人々全体にもっと目を向けることだ。そのためにまず、職場で、ゆとりのある働き方ができる取り組みを強めてほしい。 (毎日新聞 2000.5.1)

(47) 「すると、藤沢さんはどうすればいいっておっしゃるのでしょうか」
外山三郎はやや詰問のかたちで聞いた。
「放っておくことだ。彼の芽を伸ばすには放っておくのが一番いい。ああいう大物は下手な先生をつけずに置いた方が、素直なかたちで伸びる。(略)」 (『孤高の人』)

(48) 読んだら、すぐ焼け、なんて、女は身勝手だと思う。すぐ焼かねばならぬような内容なら、紙に書いたりしないことだ。 (『太郎物語』)

(49) ハッカーの侵入を完全に防ぐ防護システムは、ないといわれている。「だから、ファイアーウオールはあまり意味がない」という指摘もある。それは、「いくら戸締まりをしても、泥棒はなくならない」と、同じだろう。

まず、いくつものかぎをしっかりかけることだ。　（毎日新聞 2000.1.28）

（43）（44）では話し手は自分が置かれた状況において、一番優先されるのが望ましい行動を判断している。(45)（46）は、主語の人物が文脈に述べた状況においての望ましい行動を示すか、述べた目的を達成するのに必要な行動を述べている。（47）は、話し手が話す相手に、とるのが望ましい行動を示している。(48)（49）では明確な行動者はないが、その状況下で望ましい行動を述べる点で（43）-（47）と同じである。

以上(43)-(49)の例文からわかるように、「コトダ」で示す当為は、会話する二人称に限らず、一人称、三人称にも用いられることがわかる[11]。

そして、以上の例文から、「コトダ」で表す当為表現に共通する特徴として、状況判断があるとわかる。すなわち、ある特定の場面か事象を直面するときに、とるべき行動を「コトダ」が示すのである[12]。言い換えれば、特定された場面か先行事象がないと、「コトダ」が使えないのである。この特徴はコトの比較でよく表す。

5.2.2　規則を表すコトと当為を表す「コトダ」

次はコトと「コトダ」の例である。

(50) 川柳を始めて７年になります。川柳は、難しい決まりがないのが何よりです。毎日の生活、自然を見たり聞いたりしたことに、自分の思いや期待を込めて、分かりやすい言葉で「五七五」のリズムに乗せて表現すればよいのです。

今、私はもう少し早く川柳と出合っていればよかったのに、と思っています。やっと他人に川柳を勧める気持ちになってきました。何事も、忙しいからできない、暇だからできるというものではありません。物事をよく観察する｛　？こと / ことだ｝。材料は身近にいくらでもあります。（毎日新聞 2000.2.23）

(51) 「藤沢さん、ぼくにヒマラヤがやれますか」

「自分に勝つ｛　？こと / ことだ｝。そうすればヒマラヤに勝つことがで

[11] 姫野（1999）は当為を表す「コトダ」の疑問形「コトハナイ」における談話の意味機能を（1）相手の行為への非難、たしなめ、戒めなどを示す場合（2）相手への慰め、励ましなどを示す場合（3）自己の行為について釈明をする場合と、三つに分けている。挙げられた例は一人称と二人称に集中されているが、本章を通して、三人称が主語の場合も当為の「コトダ」を用いられるとわかった。

[12] 野田（1995）では、「コトダ」の意味用法について、聞き手が悪い状況にとどまらないため、陥らないためには、その行為の実行が必要、重要だという話し手の判断を示す場合であると説明されている。

きる」　　(『孤高の人』)

（50）はコトの例で、「コトダ」に言い換えることができない。それは、先行の事象か場面がないからである。話し手（書き手）が川柳を七年間学んできたことを先行事象のように思えるかもしれないが、それは「コトダ」を用いる場合に必要とされる先行事象とは違う。

「コトダ」に必要な先行事象・場面は、未解決の状態にあるものかと非実現のものである。たとえば、(44）の「眠ることは死を意味する。きさまの下半身はすでに凍傷になりかかっている。」という場面があるからこそ、「歩くことが必要だ」と話し手の判断の元で「歩くことだ」が導き出される。(48)「豊かな日本をつくるには」という未実現の目標があるからこそ、「日本人がバックボーンをもった、個性ある人間になることだ」が目標の実現に必要なこととして取り出される。

それと同様に、そして、(48）では話し手に手紙が届いて、読んだら、すぐ焼けと要求されること、(51）ではヒマラヤに登ろうとすることが先行の場面で、そのような場面において、大事な・必要な処置を「コトダ」で表されているのある。

それと比べて、(49）の七年間川柳を学んだことは、「コトダ」の表す処置判断を求めない事柄なのである。故に、(41)のコトは「コトダ」に言い換えることができない。

そのほかに、(52）のように、同じ文脈で「コト」、「コトダ」、両方とも用いられる例もある。

(52) a．仕事が終わったら、まっすぐに家に帰る<u>こと</u>。
　　b．仕事が終わったら、まっすぐに家に帰る<u>ことだ</u>。　　（野田 1995）

いずれも文法的に正しい文だが、スタンスは違う。(52 a)は規則を表すが、(52 b)は状況を判断し、一番望ましい行動として述べているため、これは二人称が主語の場合なら忠告を表すと考えられる。

両者の発話場面を想定すると、(52 a)はいつも帰りが遅い夫に不満を持った妻が、夫が帰ったときか、出かけるときに発した言葉だが、(52 b）は、妻と喧嘩して、同僚に相談を持ちかけたときにもらった忠告と考えられる。

コトで表す規則は先行する場面と事象がなくとも、たとえば壁に張られる標語のときにも用いられる[13]が、「コトダ」で表す当為判断は特定の事象か場面が

[13] 野田（1995）では、規則の「コト」をダのない形と呼び、当為の判断を表すコトができるが、事だと違って、聞き手が悪い状況にとどまらないため、陥らないために必要、重要なことを示すという性質はないと述べている。しかし、野田（1995）にも指摘したように、「コト」

ないと用いられない。すなわち、先行事象・場面の有無が、「コトダ」と「コト」の境目になるのである。

5.2.3 「コトダ」・「ベキダ」・「ノダ」

次は「コトダ」、「ベキダ」、「ノダ」の言い換えについて考察したい。まず、例文から見ておく。

(53) 解雇や一方的な労働条件の切り下げも増え、働く人々にとっては受難の時代を迎えた。雇用形態も働き方も大きく変わってきた。労組の出番なのだ。なのに、労組だけはタコツボにひたすら閉じこもり、旧来の発想のまま既得権にしがみつこうとしているようにみえる。これでは労組は存在価値を失ってしまう。
メーデーは１日８時間労働制を求めたアメリカのシカゴの労働者のデモから始まった。その原点に立ち戻り、労組が、働く人々全体にもっと目を向ける{ ことだ / べきだ / のだ}。そのためにまず、職場で、ゆとりのある働き方ができる取り組みを強めてほしい。

(54) こゝまで準備は整っているし、みんなの意気も上がっているのだから、あとは大衆的煽動で一気に持って行く{ ことだ / べきだ / のだ}。(『党生活者』)

以上三つの例文は、三人称が主語か、明確な主語がない場合である。

(53)では、「コトダ」、「ベキダ」、「ノダ」、いずれも用いられるが、ニュアンスが少々違ってくる。「コトダ」の場合は、状況を判断し、その状況下で望ましい行動を述べる。「ベキダ」の場合も望ましい行動を述べているが、「コトダ」のように、先行事象や場面を要求しないため、文脈で作られた場面がなくても、単独で発することのできる文である。そして、「ノダ」の場合は当為判断のニュアンスが薄く、行動に焦点をあて、話し手の強い主張を前に押し出しているニュアンスになる[14]。

(54)では、「コトダ」は文脈を踏まえて、これから必要行動を述べている。それを必要という言葉を入れて書き換えると、「あと必要なのは大衆的煽動で一気に持っていくことだけだ」になる。「ベキダ」は「コトダ」より、当為判

は望ましい行為を指摘することができるが、主に書き言葉に用いられ、使用場面が制限されているので、当為と区別して、規則の「コト」と称することにする。

[14] 野田（1995）では、「ノダ」について、「モノだ」「コトダ」に比べると、命令形に近く、行為の主体は二人称に限られると指摘している。また、その行為を実行することが望ましいと聞き手もわかっている場合に用いられやすいとも述べている。聞き手も望ましい行為であることを知り、さらに命令形に近い形式であるため、当為判断より、行為のほうに焦点を当てると考えられる。

断に重点をおき、行動とのつながりが薄い。それに対して、「ノダ」は「ベキダ」と対照的に、その行動は妥当かどうかはわからないが、話し手の主張が強く、行動に焦点を当てている。

ここで、「ノダ」、「ベキダ」における行動へのつながりの違いを示す例を取り上げる。

(50’)「すると、藤沢さんはどうすればいいっておっしゃるのでしょうか」
外山三郎はやや詰問のかたちで聞いた。
「放っておく{ ?べきだ / のだ}。彼の芽を伸ばすには放っておくのが一番いい。ああいう大物は下手な先生をつけずに置いた方が、素直なかたちで伸びる。(略)」

もし、これは会話ではなく、「放っておくべきだ」が始発文なら問題なく成立する。だが、先に「どうすればいい」と行動を聞く文があったので、ここで行動とつながりの薄いベキダを使うと、違和感が生じるのである。

次は一人称が主語になる場合である。

(55) 北鎌尾根に入ってから今日まで、人工物にはなにひとつとして行き当ったことはなかった。そこに第三吊橋を見たことは、人の住む里への帰路を発見したことであった。
(よしあとは岩小屋を探す{ ことだ / ？べきだ / のだ}。たしかにこの辺に岩小屋があるはずだ。) (『孤高の人』)

(56) 「あなたには眠られないということが、よくあるんですね。」
「ごらんな、景蔵さんもまた近いうちに京都へ出かけるそうだ。あの人もぐずぐずしちゃいられなくなったと見える。」
「あなた――あなたは家のものと一緒にいてくださいよ。お父さんのそばにいてくださいよ。あのお父さんも、いつどんなことがあるかしれませんよ。」
「そりゃお前に言われるまでもないサ。まあ、条山神社のお神酒《みき》でもいただいて、今夜はよく眠る{ ことだ / ?べきだ / ？のだ}。こういう時世になって来ると、地方なぞはてんで顧みられない。」 (『夜明け前』)

三人称の場合と違って、「コトダ」、ベキダ、「ノダ」の言い換えに支障が出てきた。

(55)では、話し手の心のうちの独り言なので、ベキダでは、違和感が生じる。「コトダ」は文脈を踏まえ、現状で必要な処置を表す。だが、「ノダ」になる

と、自分に言い聞かせるニュアンスが含まれ、必要の判断は含まない。

そして、(56) は同じく一人称が主語だが、(55) と違って、独り言ではなく、会話になっている。すると、ベキダ、「ノダ」はそれぞれ相手の行動の当為判断と行動指示になるため、ここでは用いられない。

次は主語が二人称になっている場合である。

(57) 「言いだしたら、決して後へひくことのない母だ。といって、まさか母に去り状を書くわけにも行くまい、この家さえ出れば何をしようと菊の自由なのだ。たとえ菊の所に男が通ったとしても……」

「男など……そんな、お恨みいたします」

「いや、よく後まで聞く{ ことだ / ?べきだ / のだ}。その通い男が、このわたしであってもいいではないか。どうだ、菊」 (『塩狩峠』)

(58) 彼らは決してその生活を膨張させようというのではなかった。現在の状態について要求しているのだった。それなのに、前田工場主は緊縮政策をもって、にべもなく彼らの要求を退けた。

「まあここしばらく、生活を緊縮する{ ことだ / べきだ / のだ}。実を言うと、工場の経費だって緊縮したいところなんだからなあ。まあまあ、できるだけ生活を緊縮して……」

「なにを？　緊縮しろ？　緊縮できるくらいならなにも言わねえや」

職工たちには、とうとう我慢のできない日が来た。 (『仮装観桜会』)

(57)では、ベキダは当為判断を下しただけ、相手に行動の要求は薄いので、ここでは相応しくなくなる。「コトダ」、「ノダ」いずれも相手に行動を要求することができるが、「ノダ」は命令形に近いので、ほかの二つの形式と比べて、態度がつよいのである。また、「コトダ」は状況判断が含まれるので、望ましい行動を前提に、相手に働きかけるが、「ノダ」は話し手の主張のみに焦点を当てて、相手の行動を求めるので、主観性の強さから、態度の強さにつながったのだとも考えられる。

そして、(58) は雇い主と雇われ者の会話だが、ベキダは雇われ者の反感をさらに買う可能性がかなり高い。なぜなら、ベキダは行動へのつながりが薄く、当為判断に焦点を当てているので、適切だと判断された行動内容は聞き手の行動と違った場合、相手が取った行動は不適切だと責める意味が裏に含むことになる。

しかも、ベキダによる当為判断は話し手自身の主観的判断のため、独断で適切な行動を決め、相手の行動を責めることになるので、「ノダ」と「コトダ」と比べて反発を買ってしまう可能性が高いのである。

それに対して、「コトダ」は今の状況下での望ましい行動、必要な行動を述

べ、焦点は当為判断ではなく、行動のほうにあるので、ベキダほど危険ではない。

また、「ノダ」は当為と関係なく、話し手の主張だけ述べているので、「コトダ」より強いが、ベキダほど危険ではない。

以上の比較からわかるように、「コトダ」は状況判断の元で、望ましい行動を主張し、そこに焦点を当てる。ベキダは当為判断に焦点をあて、相手の行動への働きかけは薄い。そして、主張を表す「ノダ」は、話し手の判断のみで、妥当かどうかは考慮に入れるとは限らないことがわかった。したがって、「コトダ」は働きかけへつながる当為を表すのだとわかる。

さらに、以上の比較の結果を通して、話し手と聞き手との距離が伺える。

(58)は「コトダ」、ベキダ、「ノダ」三つとも用いられる例だが、「ノダ」は聞き手の行動に対して、話し手の強い主張を押し付け、働きかける。ベキダは話し手の主観的な当為判断を聞き手へ伝える。そして、主張が強ければ強いほど、意見が主観的であればあるほど、話し手は聞き手に迫っていき、聞き手との距離が短くなるのである。一方、「コトダ」を用いると、聞き手から距離を置いた冷静なニュアンスになり、場合によっては突き放したニュアンスさえ感じ取れる。

5.3 まとめ—「モノダ」と「コトダ」

以上の考察をまとめると、次のようになる。

当為を表す「モノダ」は性質を表す「モノダ」を基本に置いている。性質は話し手一人で決められるものではなく、普遍的に認められるものなので、性質を表す「モノダ」から派生された当為は、社会常識に照らしたものになる。

そして、聞き手への働きかけの構造は、(21) が示すように、まず普遍的に認められる性質を示し、聞き手をその性質に当てはめようとして、当為が生まれるのである。

(21) a. 祭りの前の晩は早く家に入るのが常識だ ・・・・・・・・・・ 大前提
b. 今は祭りの前の晩だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小前提
c. 今、聞き手は早く家に入ることが望ましい。・・・・・・・・・・ 結論
> 祭りの前の晩は早く家に入るものだ。

また、否定の形式に、「モノデハナイ」と「～ナイモノダ」があげられる。「モノデハナイ」は性質と当為二通りの意味を表すことができるが、動詞の性質によって相補分布をなしている。非対格動詞、可能動詞など静的意味を表し、話し手のコントロール性が低い動詞を用いる場合は性質を、対格動詞、非能格

動詞など話し手のコントロール性の高い動詞を用いる場合は当為を表すのである。

そして、「～ナイモノダ」は相補分布の現象が観察されなかったが、全体としては、当為を表す例が少なく、動詞の種類を問わず、性質を表す傾向がある。

そのほかに、性質を表す「モノダ」に基づく「モノカ」もあるが、「モノカ」は叙述内容が話し手が持つ社会常識に反する場合に起こる反問を表す。そして、人称が入っている場合だと、叙述内容が話し手の持つ社会常識に反することによる反問を表す場合と、人称に当たる人の性質に反することによる反問を表す場合が考えられる。

これを「モノダ」と一緒に、形式と表す意味をまとめると、次のようになる。

(28) 「モノダ」:　　性質　＞　当為
　　「モノデハナイ」:　性質　＞　当為
　　「モノ（デス）カ」:（性質）＞　反問

一方、当為を表す「コトダ」は、先行の場面や事象を考慮に入れて、必要な処置を示すものである。そのため、特定な場面がないと用いられない。逆に、規則を表すコトは先行の場面や事象がある場合は、あまり用いられない。

そして、当為を表す「コトダ」は聞き手を考慮に入れていないため、聞き手不在の場合でも、すなわち話し手の独り言の場合でも用いられる。

さらに、「ノダ」、ベキダと比べて、「ノダ」は話し手が行動に焦点を当て、当為判断を含まないが、ベキダは行動へのつながりが薄く、当為判断に焦点を当てている。また、その判断は話し手の主観的なものである。「コトダ」は先行の場面や事象を考慮に入れ、必要な処置を表すため、行動へのつながりもあり、また先行事象など客観的な要素も考慮に入れるので、ベキダより客観的な当為判断ともいえる。そのため、「コトダ」はベキダ、「ノダ」と比べて中間的なものとも言えるだろう。

以上の分析をまとめると、「モノダ」は総称名詞の場合に用いられ、社会一般的な認識を表す。「コトダ」は先行場面や事象に向けて必要な処置を示す。コトは規則を表すことがわかる。

すなわち、「モノダ」は時間から離脱、抽出され、安定しているのに対して、「コトダ」は特定的な事柄と共起するため、まだ時間に組みこめられる。

また、コトは規則を表し、その規則は一時的なもの、数人の間にしか通用しない場合でも用いられるが、「コトダ」は一般的処理の仕方を念頭に入れて、忠告をするので、まだコトと比べて、社会的で安定している。

したがって、モノだ、「コトダ」、コトは(59)で示したように、左から右へ、個人的のものから、社会的なものになっていくのである。

(59) モノダ　＞　コトダ　＞　コト

第六章　願望を表す「モノ」「コト」

6.0 はじめに

これまで、経験、思考、感嘆、当為を表す「モノ」「コト」について見てきたが、最後に、願望を表す「モノ」「コト」について考察したい。しかし、思考、感嘆、当為を表す「モノ」「コト」と違って、願望を表す「モノ」は文法形式だが、願望を表す「コト」は実質名詞のことが願望を表す形式を受けて連体修飾節になっているものである。しかし、それでも願望を表す文の中で、「デキルモノナラ」「デキルコトナラ」のように、モノ・コトが類似する形式が存在するので、この両形式と「デキルナラ」「デキレバ」との比較は意味あるものと思い、考察対象に入れた。

以下は願望を表すモノ形式―「～タイ（テホシイ）モノダ」「～ナイモノカ」「デキルモノナラ」、願望を表すコト形式「デキルコトナラ」について考察する。そして、デキルコトナラにおけるコトは実質名詞であることは第二節で詳しく説明する。

6.1 願望を表す「モノ」

6.1.1　「タイ（ほしい）モノダ、」

願望を表す形式に「～タイ」「～ホシイ」があげられる。そして、次のように、「～タイ」「～ホシイ」はモノと共起して願望を表す文が存在する。

(1) 小渕恵三首相がテレビ局の生番組に電話をかけてきたとか、ある番組の司会者が 官邸に電話したら気軽に応対し臨時の出演になったとか、やたら目につく「ブッチホン」のパフォーマンスぶりに、いささか怒りを覚えています。（略）その暇があったら「公務に励んで」もらいたいものです。（毎日新聞 2000.1.16）

(2) 少年事件被害者の母より、天国のわが子からのメッセージを伝えます。
日本国憲法に人権の平等はうたわれているはずです。
しかし、少年法や日本の国には、被害者の人権だけがすっぽりと抜け落ちていて、存在のかけらすらありません。一刻も早く被害者の人権を確立し、国の法の下の不平等さを是正してほしいものです。
少年法は、少年審判の内容を被害者に知らせず、信じがたいことですが、真実はいとも簡単に隠ぺいされてしまいます。加害者少年の人権・保護育

成という大義名分のもとに、多くの人々が泣かされてきたのです。（毎日新聞 2000.5.13）

（1）（2）は願望を表す「～タイ」「～ホシイ」とモノが共起する例だが、（1’）（2’）が示すように、モノが取り外されても、意味は通じる。

(1’) その暇があったら「公務に励んで」もらいたいです。
(2’) 一刻も早く被害者の人権を確立し、国の法の下の不平等さを是正してほしいです。

だが、文脈を見ると、「モノ」が願望を表す形式に存在する意味がわかる。（3）は～タイの例文だが、これを「～タイモノダ」に入れ替わると、違和感が生じる。それは文の位置づけと「モノ」の機能が一致していないからである。

(3) 失業率の上昇で赤字が続く雇用保険について、労働省は保険料率を現行の１・５倍に引き上げる方針を明らかにした。平均９４００円の負担増は、生き残りをかけた企業・労働者双方にとって厳しいものとなろう。
　その一方、あまり知られていないことだが、我々公務員には雇用保険が適用されない。これまで失業の不安がなく、その必要がなかったためだが、深刻な財政難から給与カットや早期退職促進に踏み切る自治体が増え、本格的な首切りはもはや時間の問題となった。そこで、すべての公務員が雇用保険の適用を受けられるよう要望し{たい / ？たいものだ}。（毎日新聞 2000.1.26）

願望を表す「～タイ（テホシイ）モノダ」は段落の末に位置することが多い。それは、「モノ」に影響され、文脈をまとめる機能、すなわち結束性を持つようになると考えられる。たとえば、（1）は文章末に現れたものだが、話し手が不満に思った現象の数々を取り上げた最後に、「公務に励んでもらいたい」という一言で文章を纏め上げ、「モノ」によって文章に結束性を与える。

また、（2）は文章末に位置する例ではないが、やはり段落末に置かれたものである。話し手（文章の書き手）は最初に文章の要旨を述べ、自分の立場を示し、「～ホシイモノダ」で段落をまとめた後、次の段落から詳しく事柄を述べていく。すなわち、（2）における「～ホシイモノダ」は、段落をまとめる役割を果たし、次の段落から違う叙述に切り替わる鍵になっているともいえる。

だが、（3）において、書き手はまず状況を説明し、「そこで」という接続詞が示すように、「～タイ」の例文によって、話が切り替わる。すなわち、（3）では、「～タイ」の文自体はこれまでの文脈をまとめるものではなく、既に話の焦点は切り替わったのである。そのため、「～タイモノダ」に書き換えると、

結束性を持つ文を文頭に置くことになり、違和感が生じるのである。

そして、(1)(2)からも読み取れるように、願望を表す「～タイモノダ」は感嘆を表すモノダに繋がりを持っている。次の例から、そのことはもっとはっきり現れる。

(4) 秋もおわりのある寒い夜のことである。
岡の上の畑のまん中にたっている一軒家で、小説家のフン先生は、冷飯に大根のつめたいみそ汁をぶっかけて、その日七度目にあたる食事を胃の中へ流し込んでいた。
「ぶるぶるぶる。べつに大きな望みはないけれども、せめてこんな寒い夜には、熱いインスタントラーメンでもたべたいものだ。おやおや、もうお釜の中にはごはんがないな。明日はまた一週間分のごはんをたかなくてはならんな」 (『ブンとフン』)

(5) ああ何だか馬鹿になったような淋しさである。私は口笛を吹きながら遠く走る島の港を見かえっていた。岸に立っている二人の黒点が見えなくなると、静かなドックの上には、ガアン、ガアンと鉄を打つ音がひびいていた。
尾道についたら半分高松へ送ってやりましょう。東京へかえったら、氷屋もいいな、せめて暑い日盛りを、ウロウロと商売をさがして歩かないように、この暮は楽に暮したいものだ。私は体を延ばして走る船の上から波に手をひたしていた。手を押しやるようにして波が白くはじけている。五本の指に藻がもつれた糸のようにからまって来る。
「こんどのストライキは、えれえ短かかったなあ――」
「ほんまに、どっちも不景気だけんな。」
船員達が、ガラス窓を拭きながら話している。私はもう一度ふりかえって、青い海の向うの島を眺めていた。 (『放浪記』)

(4)(5)は「～タイ(テホシイ)モノダ」の文だが、次のように、(4’)(5’)のように書き換えて、「モノダ」を取り外し、「～タイ」の文にして、比較してみると、「～タイモノダ」と「～タイ」との違いがわかる。

(4’) ぶるぶるぶる。べつに大きな望みはないけれども、せめてこんな寒い夜には、熱いインスタントラーメンでもたべたい。

(5’) 東京へかえったら、氷屋もいいな、せめて暑い日盛りを、ウロウロと商売をさがして歩かないように、この暮は楽に暮したい。

(4’)(5’)では、「～タイ」が即時的な要望を表しているため、行動に移る可能性も高い。だが、(4)(5)と比べて、感嘆の意味が薄くなっている。(4)(5)の「～タイモノダ」は要望を表すところが「～タイ」と同じだが、感嘆の意味

を帯びて、行動へのつながりが薄い。その違いは次のように分析できる。

願望を表す文法形式の基本は「～タイ」・「～ホシイ」であり、話し手が発話時に即時的な要望は～タイで表す。それに対して、「～タイモノダ」は「モノダ」を付け加えることで、時間は捨象され、話し手の即時的な要望を表さなくなる代わりに、発話時以前から思い続けてきた持続性を持つ願望を表すようになる。

そして、「～タイ（テホシイ）モノダ」が持つ感嘆の意味は、願望の持続性から生まれたのだと考えられる。

（1）-（5）の例はいずれも話して・書き手の独話だが、次に、会話の例を見たい。

(6) 右近はまた涙ぐんでいた。

「何をお隠し申しましょう。御方さまの父君は三位の中将でいらっしゃいました。たいそうお可愛がりになっていらしたのですが、ご不運つづきで若死にされました。そこへ頭の中将さまがまだ少将でおいでのころ、ふとしたことでお通い初めになったのでございます。三年ほどはこまやかにお通いでしたが、北の方さまのご実家の右大臣家から、こわいことを申されてまいりまして、御方さまは、ただもうおびえてしまわれました。身をかくしてあの五條の家へいらしたところでございました。お気弱でいらして、ひとり、くよくよと物案じなさるお性質の方でいらっしゃいましたから……」

「小さな女の子を行方不明にしたと中将がふびんがっていたが」

「はい。おとどしの春お生まれになりました。とてもおかわゆい姫君でいらっしゃいます」

「あのひとの形見に引きとりたいものだ。頭の中将にもいずれ話はするが、あのひとをおそろしい目にあわせて死なせたと怨まれるのが辛い。――その姫君を引きとって世話してみたいのだが」

「そうなりましたら、どんなにかうれしゅうございましょう」

と右近は涙ぐみながらもうれしそうにいった。源氏は夕顔の話をいくらしても飽きない。（新源氏）

（6）では、「～タイモノダ」の二つの性質、段落をまとめる結束性、感嘆との繋がりがよく現れている。

右近と源氏の最初の会話は夕顔に残された娘の身の上について展開されたが、やがて「形見に引きとりたいものだ」という文によってまとめられ、そこから先の会話は娘の将来のことについてのものになる。

そして、源氏のわずか三つの文を含む発話の中で、「引き取りたい」「世話し

てみたい」と趣旨が類似する文は二回も繰り返すところにも注目される。

「引き取りたい」の発話はもし（6’）のように書き換えたら、二回タイの発話となり、余分な感じになる。それは、二回趣旨が類似する文は～タイと～タイモノダ両者の機能の違いによるためだと考えられる。

(6’) あのひとの形見に引きとりたい。頭の中将にもいずれ話はするが、あのひとをおそろしい目にあわせて死なせたと怨まれるのが辛い。――その姫君を引きとって世話してみたいのだが。

「～タイ（テホシイ）モノダ」はそれまでの会話をまとめるほか、感嘆の意も表す。そして、その感嘆は話し手自身に向けられたものであり、内言に近いものである。そのため、(6)における「～タイモノダ」はそれまでの会話の内容に対する話し手の感想・感嘆を表すもので、その次に表す「～タイ」の発言は聞き手に向けるもので、娘の世話をしたいという意志を相手に表明するものなので、両者は形が似ていても、機能が違うため、余分な感じは生じないのである。

そして、(4’)(5’)から読み取れるように、「～タイモノダ」で表す願望は感嘆を表す「～モノダ」と同じく、即時的なものではなく、まとめあげたようなものなので、「～タイモノダ」が持つ結束性とあわせて考えれると、文法形式になった「モノ」は、まとめの機能を基本に持つのではないかと推測される。

6.1.2 「～ナイモノ(ダロウ)カ」

願望を表すモノ形式に、動詞の否定形にモノカ、あるいは「モノダロウカ」をつける形式がある。これをモノを取り外した「カ」と「ダロウカ」と比較し、その違いからモノがこの文法形式で果たす役割がわかり、ひいては形式名詞「モノ」の性質の一部がわかると考えられ、次の考察を行いたい。

まず、「～ナイモノカ」の例を見る。

(7) 息子の夫妻は朝夕の間候を怠らず、食事どきの食事はいつも饗宴のような手厚さであった。
息子夫妻のそつの無い歓待振りはまことに十二分の親孝行に違いなかった。普通にいえばこれで満足すべきであろう。だが父の祖神の翁には物足りないものがあった。
息子夫妻が父の祖神の翁に顔を合すとき、大体話は山の生産の模様、山民の生活の状況、それ等を統《たば》ねて行く岳神としての支配の有様、そのようなものであった。それは誰が聴いても円満で見上げたものであった。

山民間に起った面白そうな出来事を噂話のように喋っても呉れた。だが、それだけだった。
親子関係を離れて誰に向っても話せる筋合いの事柄ばかりである。折角、親子がたまにめぐり合うのは、もっと心情に食い込んだ、親子でなければできないという気持の話はないものか。人知れない苦労というものが息子の岳神にはないのか、囁いて力付けて貰ったり、慰めて貰ったりしたい秘密性の話はないのか。
気を付けてみるのに、息子の岳神のこの公的な円満性は、妻に対してでもそうであった。（『富士』）

(8) 「ええ、先生にはずいぶん長い間学校でお世話になったもんですから。」
荒畑はその手紙を見てやって来た教誨師にでたらめを言った。荒畑は抱月とはたった一度何かの会で会ったきりだった。勿論師弟関係もなんにもない。
「ついちゃ、お願いがあるんですが。」
と荒畑はちょっと考えてから言った。
「そんな風ですから、別に近親というわけでもないんですが、一つ是非回向をして下さることはできないものでしょうか。」
教誨師はまた何か厄介な「お願い」かと思ってちょっと顔を顰めていたが、その「お願い」の筋を聞いて、顔の皺を延ばした。そして今までは死んだ人の話をするのでもあり、ことさらに沈欝らしくしていた顔色が急ににこにこと光り出した。（『続獄中記』）

（7）（8）からわかるように、「～ナイモノ(ダロウ)カ」は話し手の願望を表す。また、それは（7）のように、話し手の独り言や胸の内の考えに用いられるほか、(8）のような会話の場合も用いられる。動詞の否定形に限定する文法形式だが、話し手の要望は肯定形のほうにある。たとえば、(7）(8）における話し手の要望は（7’）（8’）のように表すことができる。

(7’) 折角、親子がたまにめぐり合うのは、もっと心情に食い込んだ、親子でなければできないという気持の話がほしい。
(8’) 一つ是非回向をして下さってほしい。

だが、(7')(8')の「～ホシイ」の表現と比べて、「～ナイモノダロウカ」による願望表現は婉曲的である。その婉曲さは否定形の表現によるものでもあるが、「モノ」の介入にも関係している。それについてはあとで詳しく述べることにする。

ここで、「モノ」の役割について考察したい。
（7）（8）は～ナイモノダロウカの例だが、(7”)(8”)のように、モノを取

り外したら、どうなるだろうか。

(7”) 折角、親子がたまにめぐり合うのは、もっと心情に食い込んだ、親子でなければできないという気持の話ができないか。
(8”) 一つ是非回向をして下さることはできないでしょうか。

（7”）（8”）はモノを取り外すと、単純な疑問文か確認の文になり、答えの傾きへの話し手の期待は薄くなるはずだが、まだ話し手の意向を読み取れるのは、「折角」「是非」など、命題の内容をプラスのほうに持っていったり、「て下さる」のように、恩恵の授受を示す語彙が現れたりしているからである。

次の例で、モノを取り外すと、単純な疑問になることがわかる。

(9) 私はこの人達から離れて暮したいと思う。一緒に暮していると、べとべとにくさってしまいそうだ。心のなかでは、何時でも気紛れな殺人を考えている。少しずつ犯人になった恐怖におそわれる。自分も死んでしまえばいいと思いながら、人間はこうした稀れな心理のなかには仲々飛び込めないものだと思う。(略) このさきざき、珍らしい事が起きようとは思わない。充分満足する心が与えられない。前の荷馬車屋で酔っぱらいの歌がきこえる。火の粉のように爆発したくなる。もう一度、あの激しい大地震はやって来{ないでしょうか / ないものでしょうか}。 (『放浪記』)

(9) は「～ナイデショウカ」を用いると、地震がまた来るのかどうかについての疑問を表し、地震が来ることを心配しているようにも読み取れる。しかし、「～ナイモノデショウカ」を用いると、地震が来ることを期待する文になる。したがって、「～ナイカ」は疑問を表すのに対して、「～ナイモノダロウカ」は疑問の中に、話し手の願望が含まれることがわかる。

そして、「～ナイカ」と「～ナイモノダロウカ」における性質上の違いは、もうひとつあげられるが、次の例文を用いて分析したい。

(10) ７５歳を迎え、運転免許証更新の日が近づいたら、更新期限の２カ月前、県交通安全協会から１枚のはがきが届いた。驚いたことに、道路交通法の規定により、免許証の更新で７０歳以上になると「高齢者講習」を受けることが必要で、その「終了証明書」なしには更新は認めない（１９９８年１０月１日施行）とのこと。しかもその講習を受けるための費用が何と、６３００円もする。(略)
加齢に伴う集中力や反応速度の衰えを知り、安全運転の技能を磨くのには得難い機会ではあろう。しかし、３年ごとの高額負担はいかにも酷。何とか減免の道を開いてもらえ {ないものだろうか / ないだろうか}。(毎日新聞 2000.12.10)

(11)今では当たり前のように無償でもらう教科書のことを今一度、見直してはどうでしょうか。ドイツではリサイクルが徹底しており、教科書も大切に使って、次の学年に譲るそうです。教科書には使った子供の名前が記されるものの、落書きをしたり、粗末に扱うことはないそうです。
教科書を捨てないですむシステムはでき{ないものでしょうか / ないでしょうか}。（毎日新聞 2000.3.17）

(12)ちょっとでいいのだが、エジソンに面会でき{ないものだろうか / ないだろうか}。あれだけ多くの発明をなしとげた人物に、拝顔しておきたいと思っていたのだ。（人民は弱し）

（10）—（12）に共通して、「～ナイモノダロウカ」を用いると、「～ナイカ」と比べてより控えめな、丁寧なニュアンスになっている。その理由は次のように分析できる。

「～ナイカ」を用いる場合、話し手は自分の要求を直接に聞き手に持ち出して、承諾をもらえるかどうかを聞いている。それに対して、「～ナイモノダロウカ」の場合は、制度上、規則上など、決まった社会構造に、自分の要求は組み入れられるかどうかを聞く上で、聞き手に自分の要求を実現する可能性を聞いている。すなわち、「～ナイモノダロウカ」は自分の要求を直接に相手にぶつけるのではなく、その願望に関わる規則や制度などの条件も考慮するため、「～ナイカ」より丁寧で控えめな質問になる。

そして、「～ナイモノダロウカ」のそういった特徴は、性質を表す「モノダ」に繋がっている。それは(13)-(15)のような中間的な例でわかる。

(13)民衆というものは自身の文化成育の欲望をもっていないものだろうか。（『昭和の十四年間』）

(14)兄さん、妹は兄の人格に対して口を出す権利がないものでしょうか。（『明暗』）

(15)職場で働き、職場でたたかいつつある若い独立した婦人であったらばこそ、女の上に新鮮な意志と情感が花咲いていた。もしせまい家庭にかがまって夫に依存する女になったら、急に色あせ、しぼむことはないものだろうか。（『文学と生活』）

(16)仕事を始めたばかりの頃、私はこう考えていた。一カ月を三つに分け、十日を取材、十日を執筆、十日を酒に充てて、何とか喰っていけないものだろうか。そして、実際にそれは不可能なことではなかった。（『一瞬の夏』）

（13）は主語の「民衆」の性質について述べる文であり、願望を表す「～ナイモノダ」ではなく、性質を表すモノダの文であり、モノは命題に入っている。（14）は主題である「妹」の性質について述べているが、モノは命題の中に入っているとも、命題の外にいるとも解釈できるので、中間的なものである。(15)

では、「モノ」は命題の外に位置し、性質、あるいは世の中の筋道について述べている。

（16）では、話し手はまず自分の生活に対して、計画を組み立て、それで食べていけることを望んでいる。同時に、世の中では、このようなやり方は筋道を通っていけるかどうかについても、思慮に入れて考えている。世の中の筋道に関する思慮こそが「～ナイモノダロウカ」の「モノ」から生まれたものである。

したがって、「～ナイモノダロウカ」は話し手の願望を表しながら、決まった社会構造も念頭に入れていることがわかる。

そして、世の中の筋道、性質は共に安定性を持ち、時間は捨象されたものである。その意味では、（16）は、意味的に（13）-（15）に通じるのではないかと考えられる。

さらに、（17）の比較を見ると、～ナイモノダロウカの性質がいっそう明確になる。

(17) a. 明日一時間目の授業が早いが、視聴室で朝食を食べられ｛ないものでしょうか / ないでしょうか。｝

b. 胃腸の具合は少しよくなったが、明日の朝食にハンバーグを食べられ｛？ないものでしょうか / ないでしょうか。｝ （作例）

（17 a）では「～ナイモノダロウカ」と「～ナイカ」両方用いられる。「～ナイカ」の場合は自分の要求は受け入れられるかどうかについて直接聞いているのに対して、「～ナイモノダロウカ」の場合は、視聴室で飲食することに関する規則にもとづいて、自分の要求は受け入れられるかどうかを聞いているのだと考えられる。

一方、（17 b)は「～ナイカ」が用いられるが、「～ナイモノダロウカ」になると、違和感を感じる。それは、（17 b）の場面では社会に決まった規則や制度などが考えにくいからである。

「～ナイモノダロウカ」を用いる場合は、決まった規則や制度に照らし合わせることが背景に含まれる。だが、（17 b）のように、個人の体調と朝食のメニューに関することなら、それは個人で決められることであり、それについての規則や制度も考えにくいため、「～ナイモノダロウカ」を用いると、違和感が生じるのである。

6.1.3 「デキルモノナラ」

ここで、もうひとつ願望を表すときに用いられるモノ形式、「デキルモノナラ」を考察したい。まず、例文から見ておく。

(18)僕はこのトンボを飼って置くつもりだった。馴れるものか馴れないものか、僕はそれを問題にするほど、トンボに知恵があるかとは思っていなかった。が、できるものなら、何か食わせて、少しでもこの虫に親しんで見たいと思った。 (『続獄中記』)

(19)「その通りだな。しかし、どうも気がすまない。ぼくにできるようなことで、なにか役に立ちそうなことがあったら、言ってくれ」
　野口は困ったような表情で言った。星はしばらく考えてから言った。
「そうだな。できるものなら……」
「なんだ。遠慮なく言ってみてくれ」
「ちょっとでいいのだが、エジソンに面会できないものだろうか。あれだけ多くの発明をなしとげた人物に、拝顔しておきたいと思っていたのだ」
（人民は弱し）

（18）は話し手の独り言の例だが、話し手はトンボは人になれるものではないと思いながら行動している。（19）は会話の例で、話し手が控えめな態度で聞き手に要求を呈している。

両者に共通する特徴として、いずれも実現する可能性の低い事柄に対して、仮説を立てていることが挙げられる。そして、いずれも文頭において、「～タイ」「～ホシイ」など願望を表す文脈と共起して、願望の実現可能性が低いという副次的な意味を付け加え、活用がないため、副詞的な存在とも言えるだろう。

また、(18’)(19’)からわかるように、デキルモノナラの例はデキルナラに言い換えられる。

(18’) できるなら、何か食わせて、少しでもこの虫に親しんで見たいと思った。

(19’)「そうだな。できるなら……」
「なんだ。遠慮なく言ってみてくれ」

デキルナラは中性的な仮説を表し、仮説内容の実現の可能性について、既定の答えや傾向を持っていない。そのため、文脈は中性的な仮説であれ、既定の傾きのある仮説であれ、デキルナラを用いて、文脈の傾きと矛盾することはない。そのため、(18)（19)のデキルモノナラの例は、デキルナラに置き換えられても違和感はない。

しかし、逆にデキルナラの例文で、文脈においてその願望は特に実現性が低

い場合ではなかったら、デキルモノナラに置き換えると、文脈から読み取れる実現性と「デキルモノナラ」における実現性の暗示に矛盾が生じて、違和感が生じるのである。

たとえば、次の例の中に、「デキルナラ」を「デキルモノナラ」に言い換えて、違和感が生じてしまうものがある。

(20)そのときぼくは{できるなら /? できるものなら }売場の上司の許可を得てさっきの女店員の話を聞かせてもらう方がいいな、と考えていた。万年筆についての取材は今日がはじめてで、まだ基本的なことは何もわかっていない。 (『新橋烏森口青春篇』)

(21)トムと同じ年ごろの少年たちは、トムの失踪事件を無視するふりをしようとしたが、実はうらやましくてたまらず、トムの黒く日にやけた皮膚とすばらしい名声を手に入れることが{できるなら / できるものなら }、何を手放しても惜しくないと考えていた。 (『トム・ソーヤーの冒険』)

（20）は元々「デキルナラ」の例だが、話し手は状況が許す限り、もう少し情報を得たほうがいいと判断し、実現性は特に低い仮説ではないため、実現性の低さを伴う「デキルモノナラ」に置き換えると、違和感が生じる。

一方、（21）は同じくデキルナラの例だが、仮説の内容がかなうのなら、代償として何を手放しても惜しくないという叙述から、話し手にとって仮説の内容がどれだけ貴重なものか、実現しがたいものか伺える。そのため、デキルモノナラに言い換えても違和感は生じない。

故に、デキルモノナラは、願望を実現する可能性が低いときに用いられることを証明できる。

そして、（18）（19）では、「デキルモノナラ」「デキルナラ」は文頭に置かれて、（20）でも、内容節においては文頭に置かれた副詞的な存在だが、（21）では、「コトがデキル」という文型に、「モノナラ」をつける形になっている。すなわち、「デキルモノナラ」は実現性の低い願望と共起する最も典型的な形であり、その形が文頭に固定するほどのため、副詞的な存在になったが、「デキルモノナラ」だけでなく、可能動詞に「モノナラ」を接続する形もある[15]。

たとえば、次がその例である。

(22)あれほど柏木の愛した人生のたのしみ、社交のたのしみ、音楽や恋文のた

[15] 大辞林では、「ものなら」が接続助詞とされ、可能の意を表す語を受ける場合は次のように説明されている。なじるような気持ちをこめて、突き放す場合に用いる。だが、それは聞き手に対して言う場合であり、（22）のように、話し手自身の望みを述べる場合、そのようなニュアンスは薄くなる。

のしみは、今は遠くなってしまった。
宮のことで、青年の心の中はいっぱいになってしまった。
宮と二人きりでこの世を棄てて暮らせるものなら他のすべての愉悦も捨てよう。
この女の視界から、自分以外の人間の姿を消してしまえるものなら。
「もし、そうできるものなら、命に代えてもいい」
と柏木は呻いて、宮の胸に、祈るように顔を伏せた。

(23)喜助に相談ができるものなら、こんなところへきてまで恥をかくようなことをたのみはしない。

（22）（23）でわかるように、願望の実現性が低いことに変わりはないが、（23）のように、既に反事実的な仮説になる場合もある。

だが、なぜモノが参与すると、実現性が低くなるのだろうか。6.1.1 と 6.1.2 の成果を参考にして、次のように推測することができる。

6.1.1 と 6.1.2 の考察によると、「モノ」が参与する「～タイ（テホシイ）モノダ」は、叙述内容自体が時間を捨象した安定感のあるものになる。そして、モノが参与する「～ナイモノ(ダロウ)カ」は話し手が自分の願望を社会常識、規則、制度などに照らし合わせて要望を主張することがわかった。これを踏まえて、「デキルモノナラ」で表す仮説を推測してみる。

「デキルモノナラ」で表す仮説は(21)(22)その後ろに、大きな代償か大きな喜びが表れることがある。それだけ実現する可能性が低いと話し手が認識しているからである。6.1.1 と 6.1.2 の結果を踏まえて推測すると、その可能性の判断基準は「モノ」によって暗示されていると考えられる。

6.1.1 と 6.1.2 の結果をもって、「モノ」で表す判断基準を推測すると、それは社会常識、普遍的な認識に近いと考えられる。社会常識や普遍的な認識を基準にし、その結果可能性が低いとなると、特別な条件がないと、仮説内容を実現することがかなわないにも等しい。そのため、その仮説を実現しようとする話し手には、大きい代償を持ち出す傾向が現れるのだと考えられる。

そのほか、「デキルモノナラ」で相手に要求を提出するときに、読み取れる控えめな態度も、「モノ」の性質に関わっていると思われる。

(19)「その通りだな。しかし、どうも気がすまない。ぼくにできるようなことで、なにか役に立ちそうなことがあったら、言ってくれ」
野口は困ったような表情で言った。星はしばらく考えてから言った。
「そうだな。{できるものなら / できるなら}……」
「なんだ。遠慮なく言ってみてくれ」
「ちょっとでいいのだが、エジソンに面会できないものだろうか。あれだけ多くの発明をなしとげた人物に、拝顔しておきたいと思っていたのだ」

（人民は弱し）

（19）が示すように、「デキルモノナラ」の場合は控えめ、婉曲な態度が含まれるが、「デキルナラ」の場合はそのニュアンスが薄くなっている。これは「モノ」が関与するためだと考えると、次のように分析することができる。

(19)では、話し手は「デキルモノナラ」を用いて、自分の願望を主張している。だが、その願望を聞き手に押し付けるのではなく、主張しながら、実現できるかどうかを判断しているのである。そして、その判断の基準を社会常識や制度などにおいて、自分の要求は社会常識に照らして筋が通るものかどうか、制度に基づいて、許可が出せるかどうか、念頭に入れたのだと思われる。

さらに、（24）を見ると、社会常識や制度に基づく傾向は明らかになる。

(24) 「それでは、年度がかわって予算の支出が可能になりしだい、つぎつぎに納入させていただくことにして、いま私が大量に買付けておくというのはいかがでしょう。専売局は、時価より安く購入できることになります」
「ということは、きみの社が総督府の予算を立替えようというのだな。なんでまた、そのような気になったのだ」
「国家がみすみす外貨のむだづかいをするのを、見ていられないからです。また、台湾の専売局にはいろいろとお世話になっており、そのご恩がえしの意味もあります。もちろん、それと同時に、払い下げていただく粗製モルヒネの価格も安くなるわけで、当社の利益ともなることです」
「まあ、いずれにせよ、予算の支出をへらしてくれる好意には感謝する。<u>できるものなら</u>、やってみてくれ」
「国家がみすみす外貨のむだづかいをするのを、見ていられないからです。また、台湾の専売局にはいろいろとお世話になっており、そのご恩がえしの意味もあります。もちろん、それと同時に、払い下げていただく粗製モルヒネの価格も安くなるわけで、当社の利益ともなることです」
「まあ、いずれにせよ、予算の支出をへらしてくれる好意には感謝する。<u>できるものなら</u>、やってみてくれ」
（人民は弱し）

（24）は会話の例だが、願望の内容は「デキルモノナラ」を用いた話し手自身が提案したものではなく、聞き手のほうである。そのため、「デキルモノナラ」によって持ち合わせるニュアンスは、相手に要求を出すときに現れる控えめな態度にまで変わることなく、実現できるかどうかの基準を社会常識と制度に置くという元の裏的意味に留まったのである。

そのため、（24）を通して、「デキルモノナラ」における実現性の判断の基準は社会常識や制度にあると証明できるのではないかと思われる。

6.2 「デキルコトナラ 」と「デキルモノナラ」

次に、「デキモノナラ」に類似する形式、「デキルコトナラ」を「デキルモノナラ」と比較しながら、考察していく。

ここで述べておきたいが、「デキルコトナラ」と「デキルモノナラ」において、もっとも違うところは文法化の度合いにある。「デキルモノナラ」について、「モノナラ」はひとつまとまった文法形式になっているが、「デキルコトナラ」の場合、コトは実質名詞「事」であり、「できる事＋なら」という普通の従属節である。そのため、「デキルコトナラ」は「デキルナラ」と同じように、話し手の願望を表すが、実現の可能性については触れていない無色なものである。

そのことについて、後にまた触れるが、ここでまず例文を通して、「デキルモノナラ」と「デキルコトナラ」の意味を比較したい。

(25)加藤の山行が増した。土曜、日曜は雨が降っても、近くの山へ出かけて行った。山を歩いていれば幾分気が晴れた。{できることなら / できるものなら} 人の居ない山を歩きたかったが、山にはどこへ行っても人がいた。山で話しかけられることも苦手だった。加藤が登っていくのを待っていて、こんにちはと呼びかける相手に、加藤は黙って頭をさげて、その人の前を風のように通りぬけていった。（『孤高の人』）

(26)松造は三十一、おとよは三十だという。夜、人めを避けて逢うようになってからは、三日と逢わずにはいられない。{できることなら / できるものなら}毎晩でも逢いたいところだ。けれども、つい先ごろ気づいたのだが、二人が逢っているのを、こぶが覗きにゆくのだという、これには困ったと松造が万吉に訴えた。（『さぶ』）

(27)神学校で上席を占め、{できることなら / できるものなら} 一番になろうというのが、ぼくの堅い決意だったのだ。それをきみはくそ勉強だといった。ぼくについてはたしかにそのとおりだ。しかし、それがぼく一流の理想だったのだ。ぼくはそれにまさるものを知らなかったのだ。（『車輪の下』）

（25）-（27）は例が示すように、いずれも「デキルモノナラ」に置き換えることができる。(25) は話し手の希望に反して、どこも人で込んでいるため、話し手の希望はかなえなかった。事実に反する仮説になるので、実現性の低い「デキルモノナラ」を用いても自然で、「デキルコトナラ」とはあまり変わりがないと思えるが、よく観察したら、やはり少し違いが存在する。

（25）は「デキルコトナラ」の場合、話し手の願望を表すが、実現性については触れていないので、文の従属節「…歩きたかったが、」まで関わっている。だが、「デキルモノナラ」の場合、願望のみならず、実現性の低さまで暗示しているため、主節「どこへ行っても人がいた」まで関わる。

（26）（27）の場合、文の背景的意味に影響を与える。（26）では「デキルコ

トナラ」を用いると、毎日逢いたいという願望だけを表しているが、「デキルモノナラ」を用いると、逢いたいが、逢うことに支障が生じていることを暗示し、実際はあまり会っていないことになる。

（27）では、「デキルコトナラ」を用いる場合、話し手は向上心のある学生に映るが、「デキルモノナラ」を用いると、向上心はあるものの、一番になることにあまり自信がなく、「上位を占めたいが、一番には多分難しい」という話し手の裏の心理が含まれる。

そして、「デキルモノナラ」と「デキルコトナラ」の違いはもうひとつあげられる。「デキルモノナラ」は（28）のように、ほかの可能動詞の場合に用いられることができるが、「デキルコトナラ」はほかの可能動詞では共起することはできない。そのため、「デキルコトナラ」は必ず文頭にあるのに対して、「デキルモノナラ」ならほかの可能動詞と共起することで、文中に位置することもある。

(28) a. あれほど柏木の愛した人生のたのしみ、社交のたのしみ、音楽や恋文のたのしみは、今は遠くなってしまった。
宮のことで、青年の心の中はいっぱいになってしまった。
宮と二人きりでこの世を棄てて暮らせる{ものなら / ？ことなら}他のすべての愉悦も捨てよう。

b. この女の視界から、自分以外の人間の姿を消してしまえる{ものなら / ？ことなら}。

c. 「もし、そうできる{ものなら / ？ことなら}、命に代えてもいい」と柏木は呻いて、宮の胸に、祈るように顔を伏せた。（新源氏）

このような違いが生じたのは、文法化の度合いの違いがあるからである。「デキルモノナラ」の場合、「モノナラ」はすでにひとつまとまった文法形式として、実現性の低い願望を表す機能を持つ。そのため、ほかの動詞と共起する場合でも、願望を表す分であることがわかる。

それに対して、「デキルコトナラ」は実質名詞「事」を中心とした従属節であり、（25）-（27）では願望を表せるのは、文末に「～タイ」「～ホシイ」など願望を表す形式が伴っているからである。

そのため、次のような例文は、全部「デキルコトナラ」を用いられるのではない。

(21’)トムの黒く日にやけた皮膚とすばらしい名声を手に入れることが{できるものなら / ？できることなら }、何を手放しても惜しくないと考えていた。

(22’)そのときぼくは{ できることなら / ？できるものなら }売場の上司の許可を得てさっきの女店員の話を聞かせてもらう方がいいな、と考えていた。

(21’)では、「できる」という語彙は「～ことができる」という文型をなして、デキルコトナラの「こと」と重複することになるため、できることを用いると混乱しやすく、違和感が生じる。

そして、(22’）では、話し手は状況が許されるなら、もう少し情報を収集したほうがいいと判断し、特に可能性の低い仮説ではないので、「デキルコトナラ」は用いられるが、「デキルモノナラ」では違和感を生じるのである。

6.3 結論

願望を表す「モノ」形式、「～タイ（テホシイ）モノダ」・「～ナイモノ(ダロウ)カ」・「デキルモノナラ」、「コト」形式「デキルコトナラ」について考察した。

「タイ（テホシイ）モノダ」は即時的な願望ではなく、話し手が発話時以前から思い続けてきた願望を表す。つまり、持続の願望を表すのである。また、「～タイ（テホシイ）モノダ」の「モノ」は結束性を持つため、文章や段落をまとめる機能を持ち、文章末や段落末に位置することが多い。

「～ナイモノ(ダロウ)カ」も話し手の願望を表すが、直接に聞き手に承諾を得られるかどうか質問するのではなく、自分の要望が関わる決まった制度、規則や社会常識などに基づいた上で、要望は受け入れられるかどうかを聞くため、聞き手に要望を主張するとき、「～ナイカ」より控えめな、丁寧な要求になる。そして、決まった制度、規則や社会常識に照らし合わせる背景的な意味をもたらしたのは、「～ナイモノ(ダロウ)カ」に組み入れられた「モノ」である。

「デキルモノナラ」は話し手が願望を述べるとき、その実現性が低い場合に用いられる。「モノナラ」はひとつの文法形式になっているため、「できる」はほかの動詞に置き換えても、実現性の低い願望を表せる。

「デキルコトナラ」は文法化された文法形式ではなく、実質名詞「事」に連体修飾と接続助詞をつけた従属節である。が、「デキルモノナラ」が実現性の低い願望を表す場合に用いられるのと対照的に、「デキルコトナラ」で表す願望は実現性については中性的で特定な立場を持っていない。そのため、中には文脈から実現性の低い願望だと推測される例もあり、それは「デキルモノナラ」に言い換えられるが、特に実現性が低い例でないと、「デキルモノナラ」に言い換えられない。

また、文法化されていないため、文末に「ホシイ」、「タイ」など願望を表す

語彙がないと、願望を表しにくいし、「できる」をほかの動詞に置き換えることもあまりできない。

以上の考察の結果をまとめると、「モノ」は時間を捨象した結晶とも言えることがわかる。たとえば、文脈をまとめる結束性は文脈を帰納して、一言に凝縮するのである。規則、制度、社会常識などは、いずれも時間を超越する存在であり、安定性を持つ普遍的な存在となっている。したがって、「モノ」が介入する文法形式は規則、制度、社会常識に結びつき、結束性を持つようになるということは、「モノ」自体に規則、制度などに共通する性質を盛ると考えられる。言い換えれば、モノ自体は時間を超越した安定性を持つ普遍的な存在なのである。

一方、「デキルコトナラ」の「コト」は実質名詞のため、「モノ」の性質を見出す手立てとして比較することはできるが、形式名詞の「コト」の性質は他章をまとめてから、論じることにする。

國立政治大學
National Chengchi University

第七章 結論

7.1 意味が類似する「モノ」「コト」

以上類似する意味を表す五組の「モノ」「コト」から発展された形式を分析し、比較してきた。次に、その結果をまとめ、そこから五つの「モノ」と「コト」の性質を見出すことを試みる。

7.1.1 時間軸に置かれた「モノ」「コト」

過去の時間において起きた事柄を表す「モノ」「コト」の形式に、「コトガアル」と「ータモノダ」がある。

「コトガアル」は文節の述語動詞と「コトガアル」の「アル」がタ形に変えることができるので、四つの形式に分けられる。その中で、「ールコトガアル」は未発生の事柄を表し、そのほかの三つの形式は過去の事柄を表す。これは次のようにまとめられる。

(1) 「-ルコトガアル」: 可能性の提示。実際に起きていないことの叙述に使う。
「-ルコトガアッタ」: 過去の経験の叙述。多発の事柄にしか用いられない。
「-タコトガアル」: 過去の経験の叙述。一回、あるいは一回とみなされる事柄に用いる。事柄は発話時点と関係している。
「-タコトガアッタ」: 過去の経験の叙述。一回、あるいは一回とみなされる事柄に用いる。事柄は発話時点と関係が薄い。

例を挙げると、次のようになる。

(2) １回の漁で３０枚以上もビニール袋を引き揚げることがあり、持ち帰って処理するのが大変な労力だ。 (毎日新聞 2000.1.23)
(3) 岩肌はおおむねなめらかで凹凸は少なかったが、それでもときどき張り出した岩のかどに思い切り頭をぶっつけることがあった。 (世界の終り)
(4) 宮村さんと一緒に山へ行ったことがある。 (『孤高の人』)
(5) 埼玉県東松山市の丸木美術館を、寒い冬の日に一人で訪れて、じっくり鑑賞したことがあった。 (毎日新聞 2000.1.18)

すなわち、「コトガアル」において、文節の述語動詞のル形とタ形は事柄が多発か一回かを決め、本動詞「ある」のル形とタ形は、発話時点との関係性を示すのである。

一方、「ータモノダ」は話し手が過去における習慣的な経験を回想するとき

に用いられる。過去を振り返って懐かしむ感情を伴うことが多い。

そして、一回限りの経験をあらわす場合もあるが、それは次のように、話し手の感情を表す場合であり、「目の前」性は典型的な「ータモノダ」より強く、感嘆を表す「ータモノダ」との繋がりが読み取れる。

(6) 「冗談じゃない。ことは、国民の意思をどう反映させるか。そのための選挙制度の問題でしょうがっ！」。私はラジオ相手に怒りまくったものです。
（毎日新聞2000.1.19）

さらに、同じく過去における多発的な事柄を表す形式として「-ルコトガアッタ」と「ータモノダ」を比較すると、「-ルコトガアッタ」は話し手の懐かしむなどの感情を伴わず、偶発的な過去の経験を表す。それに対して、「ータモノダ」で表す過去の経験は繰り返される頻度が高く、習慣的になっている。そして、話し手は過去の時間を振り返って、当時の事柄の情景を回想し、懐かしむ感情を引き起こすのである。

7.1.2 思考活動を表す「モノ」「コト」

思考活動を表す「モノ」「コト」の形式は「モノト思ウ」「コトト思ウ」である。これは「モノダト思ウ」「コトダト思ウ」と形式的に似ているが、構造も意味も違っている。

「コトダト思ウ」は「コトダ」を述語とする文で、「コトダ」は主語になる指示対象に対して、規定を行うため、「コトダ」の叙述に当たる指示対象の存在が必須である。それに対して、「コトト思ウ」は、推測のモダリティを表す文法形式であり、コトダの叙述に当たる指示対象を要求しない。両者の統語構造を示せば、次のようになる。

(7) コトダト思ウ：[節+コトダ]+ト思ウ
　　コトト思ウ：　節+コトト思ウ

例はそれぞれ次の通りである。

(8) 景気が不透明な中で、どの企業もセールスマンは骨身を削って努力していることと思う。（毎日新聞　2000.4.6）

(9) それが本当に問題のないことなのか、慎重に考えたいというのは当然のことだと思う。（毎日新聞 2000.9.9）

そして、「モノダト思ウ」と「モノト思ウ」においても、同じような違いが伺える。「モノダト思ウ」は「モノダ」を述語とし、モノダの修飾節の内容に

当たる指示対象の存在が必須だが、「モノト思ウ」は命題の外に置かれるモダリティ形式である。その統語構造を示すと、(4) になる。

(10)モノダト思ウ：[節+モノダ]+ト思ウ
　　モノト思ウ：　節+モノト思ウ

例で示すと、次のようになる。

(11)我慢することや人への思いやりの気持ちなどは、人間関係づくりの中で学び、体得するものだと思います。　(毎日新聞 2000.1.22)
(12)私は、行き過ぎた車社会を見直す、良いお手本を都が示すものと思っている。　(毎日新聞 2000.2.9)

さらに、「コトト思ウ」と「モノト思ウ」の分析を行い、次の結果が得られた。

「コトト思ウ」の意味の基本は、「発話の時点から別の時空間に存在する事柄を想像し、推測する」。その想像した状況や場面に情が流れ込み、いたわりの気持ちを帯びるようになる場合が多い。たとえば、次がその例である。

(13)みなさんもずいぶん楽しみになさっていたことと思いますが、旅行の中止は私もたいへん残念です。　(『日本語文型辞典』)

何故コトト思ウに、いたわりの気持ちを帯びやすいのか、それはコトの経過性に関わるように思われる。コトの経過性は事柄に割り込み、広げる機能がある。そして、共起する形式によって、違う効果を引き起こす。聞き手志向の「ト思ウ」と共起する場合、事柄に割り込む経過性は事態を広げる。話し手がその中で細かく事態を吟味したため、いたわりの気持ちを引き起こしやすい。

そして、「モノト思ウ」について安達（1998）は「論理的思考を経て得た帰結を表す」としているが、文型辞典では「話し手が確信していることを表す」と説明されている。両者の説明に食い違いが生じている。何故そのような食い違いが生じたのか、分析した結果、その原因はニュアンスの揺れにあると分かった。

「モノト思ウ」は、根拠から導き出された判断・結論を表す。そのため、話し手の確信度も高い。だが、(14)のように、根拠がちゃんと言語化された場合、論理的推理で得た帰結であることが前に出され、その判断に客観的、普遍的なニュアンスが伴う傾向が強くなる。それに対して、(15) のように、根拠が言語化されないなど、はっきりしない場合、話し手の確信が前に出て、その判断に逆に主観的・個人的なニュアンスが伴う傾向が強くなるのである。

(14) 1 日本欄「都の『車通行料』は手前勝手だ」の意見があったが、私はそう思わない。（中略）物流を含めた移動の手段は、道路だけではない。通行

料を嫌ってほかの交通機関にシフトされれば、環境は良くなり、国民全体の利益にもつながるはずだ。私は、行き過ぎた車社会を見直す、良いお手本を都が示すものと思っている。 (毎日新聞 2000.2.9)

(15)田中さんはこないものと思って、五人分の食事しか作らなかった。

(『日本語文型辞典』)

7.1.3 感嘆を表す「モノ」「コト」

感嘆を表す「モノ」の形式は「ー(タ)モノダ」である。「ー(タ)モノダ」は文節の述語動詞のテンスの形によって、感嘆を向ける対象が変わる。

（16 a）のように、タ形の場合、感嘆はすでに起きた、一回限りのことに向けられるが、(16b）のように、ル形の場合となると、感嘆は話題人物の属性に向けられることになる。

(16) a. 重太郎は飯を口に入れながら、それをつくづくと見た。女房も年をとったものだ。 (『点と線』)

b. 五年も見ないと人間って年をとるもんだなあ。 (作例)

そして、「ー(タ)モノダ」は形式上、感嘆と回想、二通りの意味を表す可能性が考えられるが、両者と共起する「ヨク」は「ヨクモ」に言い換えられるかどうかが、感嘆のマーカーとなっている。

回想を表す「ータモノダ」と共起する「ヨク」は（17）のような頻度副詞だが、感嘆を表す「ー(タ)モノダ」と共起する「ヨク」は陳述副詞である。そして、陳述副詞の「ヨク」はプラス評価もあれば、マイナス評価もあれるが、(18)が示すように、いずれも「ヨクモ」に言い換えられる。それに対して、頻度副詞「ヨク」は「ヨクモ」に言い換えられないので、言い換えの可能性は回想の「ータモノダ」と感嘆の「ー(タ)モノダ」を見分けるマーカーとなったのである。

(17) 私は {よく / *よくも} 浅草公園へ出掛けて、所在のない時間をつぶしたものです。 (『モノグラム』)

(18) a. きみみたいな人が四年も {よく / よくも} あんなところでしんぼうできたものだ。 (『八つ墓村』)

b. 平面、凸面、凹面、波型、筒型と、{よく / よくも} あんなに変わった形のものが集まったものです。 (『鏡地獄』)

一方、感嘆をあらわす「コト」の形式は、(19）のように、「コト」「コトカ」があげられる。

(19) a. 思えば、姉君の三の宮はうらやましいこと。 (新源氏)
b. 。「やめて」と何度心の内で叫んだことか。 (毎日新聞 2000.1.12)

形容詞の一語文と装定文による感嘆は即時的な反応の場合に用いられるのに対して、「コト」による感嘆が、即時的な反応の場合と、回想による感嘆の両方に用いられる。だが、即時的な反応で用いる「コト」は、形容詞の一語文と装定文に比べて、話し手はより冷静に自分と状況を捉え、自分の感情を客観視しているのである。

そのため、(20)のように、話し手は激情にとらわれているときは、感嘆の「コト」を用いられないのである。

(20) では誰にでも聞いて御覧なさい。深草の少将の百夜通いと云えば、げすの子供でも知っているはずです。それをあなたは嘘とも思わずに、……あの人の代りにわたしの命を、……ひどい。ひどい。ひどい{φ/*こと}。(泣き始める)(略) (『二人小町』)

ここで、即時性で最も即時的なものから順に並べると、(21)のようになる。

(21) 装定文・形容詞の一語文->現場のコト->回想のコト

そして、「コトカ」は「コト」の経過性によって想像性を引き立たせて、程度の甚だしさを表し、感嘆の意味を帯びるようになるが、実際に起きたことに向ける感嘆を表す「コト」と違って、(22)のような仮説の場合の感嘆にも用いられる。

(22) ああ、こんな月光に照らされた浜辺の美しさを、かの紫の君に見せてやったら、どんなに喜ぶことか。 (新源氏)

さらに、「ー(タ)モノダ」と「コト」を比べると、結果は次のようにまとめられる。

	「ー(タ)モノダ」	「コト」
構文	題述文・主語がある文に用いられる。	題述文・主語のある文に用いにくい。
意味	1. 男女かまわず使える。 2. 外部の刺激を時間を置いて、吟味、反省した場合に用いられる。 3. 自分の感情から離れていない。	1. 女性が使うことが多い。 2. 外部にある事柄や情報に刺激に対する即時的反応。 3. 自分の感情を客観視する。

そして、感嘆の「モノ」も入れて、即時性から分析すると、もっとも即時的なものから順に次のようになる。

(23) 装定文・形容詞の一語文・感嘆の動詞文 >「コト」の感嘆文 >「ー(タ)モノダ」の感嘆文

7.1.4 当為を表す「モノ」「コト」

当為を表す「モノ」「コト」の形式は「モノダ」「コトダ」である。そして、「コトダ」に類似する形式に規則を表す「コト」がある。

当為を表す「モノダ」は性質を表す「モノダ」を基本にしている。性質は話し手一人で決められるものではなく、普遍的に認められるものなので、性質を表す「モノダ」から派生された当為は、社会常識に照らしたものになる。これを三段論法で示すと、次のようになる。

(24) a. 祭りの前の晩は早く家に入るのが常識だ ・・・・・・・・・・ 大前提

b. 今は祭りの前の晩だ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小前提

c. 今、聞き手は早く家に入ることが望ましい。・・・・・・・・・・ 結論

> 祭りの前の晩は早く家に入るものだ。

そして、「モノダ」の否定形に「モノデハナイ」と「～ナイモノダ」があるが、次のように違いが伺える。

「モノデハナイ」は動詞の種類によって表す意味が相補分布をなしている。(25)が示すように、非対格動詞、可能動詞など、非意志的動詞の場合、「モノデハナイ」は性質の否定を表し、対格動詞、非能格動詞など、話し手のコントロール性が高い動詞の場合、「モノデハナイ」は当為の否定を表す。

(25) a. いくらコーヒー好きとはいえ、これだけのコーヒーを一人で飲みきれるものではない。 (世界の終わり)

b. 男は人前で泣くものではありません。 (『文型辞典』)

それに対して、「～ナイモノダ」では相補分布の現象が観察されなかったが、全体としては、当為を表す例が少なく、動詞の種類を問わず、性質を表す傾向が強い。

(26) 役人というのは、そこまでは考えないものだ。 (『冬の旅』)

一方、当為を表す「コトダ」は先行の場面や事象を考慮に入れて、必要な処置を示すものである。そのため、特定な場面がないと用いられない。逆に、規則を表す「コト」は、(27)が示すように、先行の場面や事象がある場合は、あまり用いられない。

(27) 「藤沢さん、ぼくにヒマラヤがやれますか」
「自分に勝つ｛　？こと / ことだ｝。そうすればヒマラヤに勝つことができる」 (『孤高の人』)

また、「コトダ」は聞き手を考慮に入れていないため、聞き手が耳を貸すかどうかにかかわらずに用いられる。ゆえに、突き放した感じを与えることがある。

社会常識に照らし合わせる「モノダ」と先行場面を考慮する「コトダ」は、いずれもその場で話し手が決められる規則を表す文末の「コト」より、普遍的で社会的である。だが、総称名詞を主語にとる「モノダ」と比べて、特定的な場面や事象を要求する「コトダ」は普遍性が低くなるので、社会的から個人的な形式に並べると、次のようになる。

(28) モノダ　＞　コトダ　＞　コト

7.1.5 願望を表す「モノ」「コト」

願望を表す「モノ」の形式、「～タイ（テホシイ）モノダ」「～ナイモノ(ダロウ)カ」「デキルモノナラ」がある。これらを分析すると、結果は次のようになる。

「タイ（テホシイ）モノダ」は即時的な願望ではなく、持続性を持つ願望を表す。また、「～タイ（テホシイ）モノダ」の「モノ」は結束性を持つため、文章や段落をまとめる機能を持ち、文章末や段落末に位置することが多い。

「～ナイモノ（ダロウ）カ」も話し手の願望を表すが、直接に聞き手に承諾を得られるかどうか質問するのではなく、制度、規則や社会常識などを聞きながら、要望が受け入れられるかどうかを質問するため、(29)のように、聞き手に要望を主張するとき、「～ナイカ」より控えめな、丁寧な要求になる。

(29) 道路交通法の規定により、免許証の更新で７０歳以上になると「高齢者講習」を受けることが必要で、その「終了証明書」なしには更新は認めない（１９９８年１０月１日施行）とのこと。しかもその講習を受けるための費用が何と、６３００円もする。(略)
加齢に伴う集中力や反応速度の衰えを知り、安全運転の技能を磨くのには得難い機会ではあろう。しかし、３年ごとの高額負担はいかにも酷。何とか減免の道を開いてもらえ｛ないものだろうか / ないだろうか｝。(毎日新聞 2000.12.10)

そして、決まった制度や社会常識に照らし合わせるという背景的な意味をも

たらしたのは、「～ナイモノ(ダロウ)カ」に組み入れられたモノである。

「デキルモノナラ」は話し手が願望を述べるとき、その実現性が低い場合に用いられる。モノナラはひとつの文法形式になっているため、「できる」はほかの動詞に置き換えても、実現性の低い願望を表せる。

(30)できるものなら、何か食わせて、少しでもこの虫に親しんで見たいと思った。（『続獄中記』）

(31)宮と二人きりでこの世を棄てて暮らせるものなら他のすべての愉悦も捨てよう。（新源氏）

願望を表す「コト」の形式「デキルコトナラ」についても考察したが、「デキルコトナラ」は文法化された文法形式ではなく、実質名詞「事」に連体修飾と接続助詞をつけた従属節である。

そして、「デキルモノナラ」が実現性の低い願望を表す場合に用いられるのと対照的に、「デキルコトナラ」で表す願望は実現性については中性的で特定な立場を持っていない。

故に、「デキルコトナラ」の例で、文脈から実現性の低い願望だと推測されれば、デキルモノナラに言い換えられるが、特に実現性が低い例でないと、デキルモノナラに言い換えられない。

(32)そのときぼくは{できるなら /? できるものなら }売場の上司の許可を得てさっきの女店員の話を聞かせてもらう方がいいな、と考えていた。万年筆についての取材は今日がはじめてで、まだ基本的なことは何もわかっていない。（『新橋烏森口青春篇』）

また、文法化されていないため、「デキルコトナラ」は (33) が示すように、文末にホシイ、タイなど願望を表す語彙がないと、願望を表しにくいし、「できる」をほかの動詞に置き換えることもあまりできない。

(33) a.「もし、そうできる{ものなら / ？ことなら}、命に代えてもいい」と柏木は呻いて、宮の胸に、祈るように顔を伏せた。

b. 宮と二人きりでこの世を棄てて暮らせる{ものなら / ？ことなら}他のすべての愉悦も捨てよう。（新源氏）

7.2 「モノ」「コト」の性質

ここで、以上の結果を踏まえ、類似の意味を表す「モノ」「コト」の違いから「モノ」「コト」の性質を見出すことを試みる。まず、その違いをまとめる。

7.2.1 類似の意味を表す「モノ」「コト」における違い

過去における多発的な事柄を表す「モノ」「コト」の形式は「ールコトガアッタ」「ータモノダ」である。

「ールコトガアッタ」は偶発的な経験を表すが、「ータモノダ」はもっと頻度の高い習慣的な経験を表す。そして、もし偶発的な経験は繰り返され、持続を持つようにみなされると、「ータモノダ」を用いることも可能になる。

思考活動を表す「モノ」「コト」の形式は「モノト思ウ」「コトト思ウ」である。

「コトト思ウ」は発話の時点から別の時空間に存在する事柄を想像し、推測する。その想像した状況や場面に情が流れ込み、いたわりの気持ちを帯びる場合が多い。そのいたわりの気持ちを伴う原因は次のように考えられる。

「コト」の経過性は事柄に割り込み、事態を広げる機能がある。「ト思ウ」との共起によって、事柄の想像がいたわりの気持ちへと導く。その機能と効果から、「コト」の動的性質が伺える。

一方、「モノト思ウ」の意味は「確信」と「論理的帰結」の間をゆれている。根拠が言語化された場合、論理的思考で得た帰結であることが顕著になり、客観的なニュアンスが強い。それに対して、根拠が言語化されない場合、根拠性が薄くなり、話し手の確信のほうが顕著になり、個人的・主観的なニュアンスが強くなる。だが「確信」にせよ、「論理的帰結」にせよ、いずれもはんこを押すように、話し手が事柄に対して、結論か判断を下している。すなわち、静的な性質を持つ内容である。

感嘆を表す「モノ」「コト」の形式は「コト」「コトカ」「ー(タ)モノダ」である。「コトカ」は「コト」の経過性を生かし、想像を引き立たせて、程度の甚だしさを表す。「コト」は一語文と装定文と比べて、時間を置いた感嘆を表し、自分の感情を落ち着いて客観視するのである。だが、題述語と主語のある文には用いにくい。

それに対して、「ー(タ)モノダ」は時間を置いて、事柄を吟味した感嘆を表すため、即時的な感嘆ではない。

当為を表す「モノ」「コト」の形式は「コトダ」「モノダ」である。

「コトダ」は、先行の場面や事象を考慮に入れて、必要な処置を示すものである。そのため、特定的な事柄を必要とする。

「モノダ」は社会常識に基づいて、望ましい行為を指摘し、聞き手をそこに当てはめようとするため、当為の意味を表すようになる。同時に、主語に総称名詞を使うことが多い。

願望を表す「モノ」に、「～タイ（テホシイ）モノダ」「～ナイモノカ」「デキルモノナラ」がある。

「～タイ（テホシイ）モノダ」は持続を持つ願望を表す。すなわち、話し手は発話時以前から持ち続けてきた願望である。モノの影響のため、結束性を帯びて、文章や段落をまとめる機能を持ち、文章末や段落末に位置することが多い。

「～ナイモノカ」は自分の要望が関わる制度、規則や社会常識などに基づいた上で、要望が受け入れられるかどうかを聞くため、聞き手に要望を主張するとき、「～ナイカ」より控えめな、丁寧な要求になる。そして、決まった制度、規則や社会常識に照らし合わせる背景的な意味をもたらしたのは、「～ナイモノカ」にモノが組み入れられたと考えられる。

「デキルモノナラ」も話し手の願望を表すが、その願望が実現する見込みが極めて低いときに用いられる形式である。そのため、事実と反対の仮説の場合も、この文型を用いることができる。

7.2.2 「モノ」「コト」の性質

以上五組の結果をまとめて、「コト」は動的で、時間を含む存在であり、「モノ」は静的で、時間を捨象したものであるとわかる。

たとえば、「モノ」は静的で、時間が捨象されているため、結束性を持ち、それが「～タイ（テホシイ）モノダ」「モノト思ウ」、感嘆の「－(タ)モノダ」に反映されている。そして、「～ナイモノカ」、当為の「－タモノダ」が背景的に関わる社会常識、規則、制度も、静的な性質を反映している。

それに対して、「コトト思ウ」が帯びるいたわりの気持ちは、「コト」に時間が含まれるため、経過性を持ち、事柄に組み入れられ、当時の場面を想像し、そこから同情やいたわりなど話し手の感情反応が引き起こされる。

当為の「コトダ」が特定の事柄を必要とすることは、時間を持つ「コト」に影響されたためと考えられるが、これは総称名詞を主語とし、社会常識を裏付ける「－タモノダ」とは対照的である。

そして、「－（タ）モノダ」が時間を置いた感嘆を表すことは、時間を捨象した「モノ」の結束性によるまとめの機能に影響されたのだと考えられ、感嘆の「コト」が「－（タ）モノダ」より即時的な感嘆を表すのも、「コト」の時間性という性質に影響されたのだと考えられる。

したがって、以上五組の「モノ」「コト」の文型を分析し、違いをまとめた結果、「コト」は動的な性質を持ち、時間が含まれている。「モノ」は静的な性質を持ち、時間を捨象されているという結論を得られた。

7.3 今後の課題

今回は、「モノ」「コト」の性質を文法化された形式から見出すことを目的としたため、類似する意味を表す「モノ」「コト」の形式を中心に見てきた。その結果、「コト」は動的な性質を持ち、時間を含まれる。「モノ」は静的な性質を持ち、時間を捨象されるという結論を得られた。

そして、考察を行った形式は述語表現なので、主に文末に位置する「モノ」「コト」が対象となったが、次のように、語頭に位置する「コト」「モノ」もある。

コト：「事新しい」「事改めて」「事欠く」「事変わる」「事切れる」「事事しい」「事細かい」「事足りる」「事面倒」…

モノ：「物新しい」「物鮮やか」「物案じ」「物言い」「物憂い」「物恐ろしい」「物覚え」「物思い」「物書き」「物語」「物狂い」「物寂しい」「物足りない」「物々しい」「ものあわれ」…

中に形容詞に繋がるものもいれば、動詞に繋がるものもある。そして、同じ語彙の語頭に位置するか、類似する形式になっているものもあり、面白いことに、意味は違っている。

たとえば、次の例である。

(34)「事新しい」：a．ことさらめいている。わざとらしい。
　　b．今までと違って新しい。改まっている。
「物新しい」：なんとなく新しい。　（『大辞林』）

(34)からわかるように、「事新しい」「物新しい」は「事が新しい」「物が新しい」という意味ではないため、接頭辞になっていると考えられる。だが、語彙にどんな影響を与えるのか、どんな機能的意味を付加するのか、まだ検討する必要がある。

そして、相対的な例になっていない語彙の中にも、興味深い例がある。

(35)「事欠く」：必要なものがないために不自由する。「日々の米にも事欠く生活」　（『大辞林』）

(35)では、「事欠く」は必要なものがないために不自由すると説明されるが、「物」が足りないのに、「物欠く」ではなく、「事欠く」になるのは何故だろう。そのほかに、「物語」は人物、場所、事件が含まれ、「事柄」として認識されると思われるが、何故「事語り」にならないのか。そのほかに、熟語になっていないが、「ものの考え方」という言葉がある。が、思考内容は物ではなく、事だと思われるが、「ことの考え方」という言い方がない。これらの疑問は解くためには、語頭に現れる「モノ」「コト」を研究する必要があり、今後の課題にしたい。

國立政治大學 National Chengchi University

付録

【参考文献】

(1) Hopper and Traugott(1993) 日野資成訳『文法化(Grammaticlization)』九州大学出版会

(2) 安達太郎(1998)「認識的意味とコト・モノの介在」『世界の日本語教育 8』国際交流基金

(3) 揚妻祐樹（1990)「形式的用法の「もの」の構文と意味--<解説>の「ものだ」の場合」『国語学研究』30 p82-94

(4) 秋元実治(2002)『文法化とイディオム化』ひつじ書房

(5) 青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房

(6) 井手至（1967）「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法．第 3』松村明等編 明治書院

(7) 大堀寿夫(2005)「日本語の文法化研究にあたって―概観と理論的課題―」『日本語の研究』第 1 巻第 3 号　日本語学会

(8) 北原保雄等（1988）『日本文法事典』有精堂

(9) 木村敏（1992）『時間と自己』中公新書

(10) 北村雅則（2004）「モノダで終わる文 ： 解釈決定に関わる諸要因の分析」『国語国文学』95 p103-116 名古屋大学

(11) 澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版

(12) 高橋太郎（2005）『日本語の文法』ひつじ書房

(13) 高橋雄一（2008）「内容節の構造を持つ「モノダ」文について」『東海大学紀要　留学生センター』28　p17-35

(14) 坪根由香里（1997）「「ものだ」「ことだ」「のだ」の理解難易度調査」『第二言語としての日本語の習得研究』p137-155

(15) 坪本篤朗（1999）「モノとコトから見た文法--主要部内在型関係節と ト書き連鎖」『日本語学』18 p26-40

(16) 坪本篤朗（2001）『モノとコトから見た文法一文法と意味の接点一』（論文出版）

(17) 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味　第 II 巻』くろしお出版

(18) ――――（1991）『日本語のシンタクスと意味　第 III 巻』くろしお出版

(19) ――――（1992）「「こと」と「もの」」『寺村秀夫論文集』くろしお出版

(20) 東辻保和（1997）『もの語彙こと語彙の国語史的研究』汲古書院

(21) 名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能―関連性理論の観点から―』くろしお出版

(22) 仁田義雄（1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

(23) ――――(1997)『日本語文法研究序説―日本語の記述文法を目指して―』

くろしお出版
(24) 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版
(25) ――――――――――――（2007）『現代日本語文法 3　』くろしお出版
(26) ――――――――――――（2008）『現代日本語文法 6　』くろしお出版
(27) 沼田善子（1995）『「も」の言語学』筑波大学
(28) 沼田善子・徐建敏(1995)「とりたて詞「モ」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
(29) 沼田善子（2000）『時・否定と取り立て』岩波書店
(30) 沼田善子（2003）『日本語のとりたて―現代語と歴史的変化・地理的変異』
(31) 沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
(32) 野田春美（1995）「モノダとコトだとノダ―名詞性の助動詞の当為的な用法―」宮島・仁田（編）『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版
(33) ――――（1999）『「の（だ）」の機能」』くろしお出版
(34) 日野資成（2001）『形式語の研究―文法化の理論と応用―』九州大学出版会
(35) 半藤英明（2006）『日本語助詞の文法』新典社
(36) 姫野昌子（1999）「形式名詞「こと」の複合辞的用法―助詞的用法と助動詞的用法をめぐって―」『東京外国語大学　留学生日本語教育センター論集』26 p17-31
(37) 藤森弘子（1999）「談話における「コトガアル」の意味と用法」『東京外国語大学　留学生日本語教育センター論集』26 p33-47
(38) 深尾まどか（2008）「終助詞「もの」について」『台大日本語文研究』13 p3-23
(39) 北条淳子「」
(40) 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
(41) ――――（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
(42) ――――（2000）『新日本語文法選書 2　複文』くろしお出版
(43) 籾山洋介（1992）「文末の「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』14 p19-31
(44) 吉川武時（2003）『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房
(45) 吉田妙子（2004）「習慣行為を表すスルとシテイル―性質叙述性と外部視点性―」『台湾日本語文学法』19 p365-389
(46) 劉懿禎(2007)『現代日本語形容詞の下位分類―分類基準と機能』東呉大学日本語文学系博士論文
(47) 渡邊ゆかり（2008）「文補語標識「こと」「の」の意味的相違に関する研究」溪水社

【辞典】
『日本語文型辞典』くろしお出版

『大辞林』第三版　三省堂

【用例出典】
毎日新聞 2000 CD-ROM

井伏鱒二 『黒い雨』 新潮文庫 / （世界の終わり）村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 新潮文庫 / 新田次郎『孤高の人』新潮文庫 / （一握の砂）石川啄木『一握の砂・悲しき玩具』新潮文庫 / サマセット・モーム (著) 中野 好夫 (翻訳)『月と六ペンス』新潮文庫 / 三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫 / トルストイ（著）木村 浩（翻訳）アンナ・カレーニナ 新潮文庫 / スタンダール (著), 小林 正 (翻訳)『赤と黒』新潮文庫 / （新源氏）田辺聖子『新源氏物語』新潮文庫 / 林芙美子『放浪記』新潮文庫 / 国枝史郎『レモンの花の咲く丘へ』青空文庫 /芥川龍之介『二人小町』青空文庫 / 山内義雄翻訳『狭き門』新潮文庫 / 高野悦子『二十歳の原点』新潮文庫 / 太宰治『正義と微笑』青空文庫 / 赤川次郎『死体は眠らない』角川文庫/ 赤川次郎『クリスマス・イヴ』角川文庫/ 赤川次郎『インペリアル』角川文庫 / 松本清張『点と線』新潮文庫 / 江戸川乱歩『モノグラム』筑摩ブックス / 金田一耕助『八つ墓村』角川文庫 /江戸川乱歩『鏡地獄』筑摩ブックス / 太宰治『太宰治全集』ちくま文庫 / 大藪春彦『名のない男』角川文庫 / 赤川次郎『悲歌』角川文庫 / 井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫 / 村上春樹（世界の終わり）『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮文庫 / 島崎藤村『破戒』新潮文庫 / 宮沢賢治『よだかの星』新潮文庫 /林不忘『丹下左膳』光文社文庫 / 太宰治（諸国噺）『お伽草紙・新釈諸国噺』岩波文庫 /夏目漱石『写生文』青空文庫 / 立原正秋『冬の旅』新潮文庫 / ジュール・ヴェルヌ 波多野 完治訳（十五少年）『十五少年漂流記』新潮文庫 / 安部公房『砂の女』新潮文庫 / 小熊秀雄『小熊秀雄全集』新潮文庫 / 北杜夫『楡家の人びと』新潮文庫 / 斉藤道三『国盗り物語』新潮文庫 / 山本有三『路傍の石』新潮文庫 / ドストエフスキー 工藤 精一郎訳『罪と罰』新潮文庫 / 五木寛之『風に吹かれて』新潮文庫 / 石川達三『青春の蹉跌』新潮文庫 / 新田次郎『孤高の人』新潮文庫 / シェイクスピア 福田 恒存訳『ハムレット』新潮文庫 / 曽野綾子『太郎物語』新潮文庫 / 小林喜太郎『党生活者』新潮文庫 / 島崎藤村『夜明け前』新潮文庫 / 三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫 / 佐左木俊郎『仮装観桜会』青空文庫 /井上ひさし『ブンとフン』新潮文庫 / 林芙美子『放浪記』新潮文庫 / 岡本かの子『富士』ちくま文庫 / 大杉栄『続獄中記』現代思潮社 / 星進一（人民は弱し）『人民は弱し　官吏は強し』新潮文庫 / 宮本百合子『昭和の十四年間』河出書房 / 夏目漱石『明暗』筑摩書房 / 宮本百合子（『文学と生活』）河出書房 / 沢木耕太郎『一瞬の夏』新潮文庫 / 有吉佐和子『華岡青洲の妻』新潮文庫 / 椎名誠『新橋烏森口青春篇』新潮文庫 / 大久保 康雄『ト

ム・ソーヤーの冒険』新潮文庫 / 山本周五郎『さぶ』新潮文庫 / 高橋健二『車輪の下』新潮文庫 / 川端康成『雪国』新潮文庫 / 大岡昇平『野火』新潮文庫 / 堀 辰雄（美しい村）『風立ちぬ・美しい村』新潮文庫 / 福永武彦『冬』新潮文庫 /

國立政治大學
National Chengchi University